

原谷の大地

－原谷古地名考150－



本郷西区町屋川原のしだれ桜

(表紙写真は国土地理院より)

序

発刊によせて

未来につたえる素晴らしい教科書

掛川市長 松井三郎

『原谷の大地—原谷古地名考 150—』の発刊を心からお喜び申し上げます。地域の古い地名について、後世にその由来や記録を伝える素晴らしい教科書が完成しました。関係者のご尽力に対し深く敬意を表します。原谷地区は古くから原野谷川からの豊かな恵みがもたらされ、塩の道や秋葉街道、あるいは水運などの交通の要衝であったことなどから栄えてきた地域でした。この本にあるいくつかの古地名は、古きこの地域の姿や、そこに生活していた人々の生活を語りかけてくるようであります。地域を細かく調査され、地元の先輩方からの聞き取りなど、丁寧につみ上げられた資料をもとに、各地の地名が面的にまとめられたこの本は、地域の歴史を後世に伝える資料として一級の価値があるものと思います。



また、この本の制作は、構想から 10 年を費やしたものとお聞きしました。中心的な役割を担った「原谷史学習会」は、これまで 120 回を超える学習会を続けられているとのこと。このような学びの場がこれほど継続しているということは、携わっている皆様が学ぶ手応えを感じていらっしゃるのではないかと思います。これからの人生 100 年時代、充実した人生を送っていただくためには「健康」であることはもちろんのこと、「学びつづける」こともまたとても大切なことであります。10 年前に芽吹いたみなさまの「学び」の芽は、今大きな花を咲かせたのではないのでしょうか。

さらに、地域の歴史を後世に紡いでいくという重要な仕事を、地域の活動としてまちづくり協議会が発刊したこともまた、掛川市が進める協働のまちづくりの姿であると思います。地域の子どもたちが小さなころから自分の住んでいる地域を知り、地域の中で楽しい思い出をたくさん積み重ねることは地域を誇りに思うという点で大切なことです。これからは、この本を通して世代間交流がはかられることもまた期待したいと思います。

最後に、皆様方のご健康とますますのご活躍、そして原谷地区の今後のさらなるご隆盛をお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

ふるきをたずね新しきを知る、もって師となるべし

原谷地区まちづくり協議会会長
竹下文博

平成 21 年度（2009）に発足した原谷史学習会は既に 10 年以上が経過しました。この間、原谷史学習会の各地区担当の編集委員による原谷地区内の古地名考に関する調査・研究も行ってきました。

この度、『原谷の大地—原谷古地名考 150 —』というタイトルの原谷古地名考の郷土誌の発刊となりました。今回の郷土誌発刊は「温故知新」の孔子の論語にある故事を思い出させます。

まさに、歴史の研究や調査活動は古きをたずね新しいことを知ることの大切さを本書を読む者に教えてくれます。

最後に、10 年間という長きにわたった編集委員の現地調査や聞き取り調査を積み重ねての議論を展開してきた中からまとめ上げた大変貴重な郷土研究の資料冊子となっています。改めて編集委員の皆様のご努力に心より敬意と感謝を申し上げます。

並びに、一人でも多くの方々に本書を読んでいただき、原谷への郷土愛が深まり原谷地区がさらなる発展と住みよい地域になりますことを願っています。

原谷地域の歴史が刻まれた古地名

原谷地区区長会会長
山崎 潔

原谷地域に古地名が 150 もあることに驚きです。そして、その由来や特徴を調べ、ここに一冊の『原谷の大地—原谷古地名考 150 —』としてまとめられたことにお慶び申し上げます。

現代の生活変化とともに歴史の風化を感じる事が多くあります。原谷地域も同じで、日常会話の中で、使われなくなった古地名が多くあります。調査の時、古老に聞いても分からない古地名がいくつもあったと聞いています。そのため、古老に聞き取りをし、文献に目を通して記録に残すことはとても大切なことです。

原谷の古地名は①自然地形、②都市開発、③社寺、④律令制・荘園制などに由来しています。「原谷の大地」を読まれて 150 の古地名の由来を確認したり知ったりすることはたのしい時間になるでしょう。原谷地域の場所により、どのような古地名が多いのか考えてみるのはどうでしょうか。

それでは「原谷の大地」をご一読ください。そして、次の世代に原谷の古地名を伝えていただければ幸いです。

原谷地区古地名考の研究動機と発刊趣旨

「原谷の大地」編集委員長
佐藤 收一

近年、産業構造の急激な変化により、人々は自分の住んでいる土地への関心が薄まっています。そのような中で、2009 年度に発足した原谷史学習会は既に 10 年以上が経過しました。この間、原谷地区の古地名を学習会の中で実地調査や聞き取り調査を実施し研究してきました。そしてこの度、これらの研究成果を一冊の本に集大成することにしました。原谷地区まちづくり協議会のもとで 2018 年度・2019 年度の二ヶ年かけて『原谷の大地—原谷古地名考 150—』の出版となりました。本の内容は、原谷地区について西山、幡鎌、本郷西、本郷東、細谷の 5 地区に分けて調査したそれぞれの古地名考を一冊の本にまとめたものです。

原谷地区には古代や中世につけられた地名が今も使われている所が多く見られます。例えば奈良時代の条里制の名残の「西坪」や「東坪」の古地名があります。又、戦国時代の戦があった所に「古戦」という古地名があります。このように地名とは長い年月をかけて多くの人々が共同で行ってきた営みやそこでの思いが地名の中に感じ取れるものが数々みられます。地名はその時々政権に左右されることなく、改名されることも少ないです。さらには「市場」とか「馬場先」「船原」など、それだけで当時の人々の生活や風習を如実に残しています。

又、当地方のことは今でも「安里」と呼ばれています。古地名は当時の時代を考察する上でとても大きな手がかりとなります。このように古地名の存在は歴史を解きほぐす上でとても大きいと考えています。

地名をこれからつけるべき必要が生じた場合、例えば道や坂、橋、公園、学校、踏切などに古地名を付け残していくといった作業はとても重要です。本郷東から細谷方面に流れている「防の窪」と呼ばれる幹線排水路に架けられている橋の名前は、これ全てが昔から言われていた古地名で付けられています。

さて最後になりますが、今回の発刊誌『原谷の大地—原谷古地名考 150—』はまだまだ解明するには不十分な箇所がいくつかあります。本書発刊により、いろいろとお気づきの点がございましたら何なりとご意見やご指導をいただきたく思います。原谷地区の古代から現代まで受け継がれてきた当地の古地名の再認識となるべき本書発刊の意義が、多くの人々に理解や関心につながっていただければこれにすぐる喜びはございません。

2019 年 12 月

目 次

序

掛川市長発刊によせて	2
原谷地区まちづくり協議会会長挨拶	3
原谷地区区長会会長挨拶	3
原谷地区古地名考の研究動機と発刊趣旨	4
第一章 原谷と古地名	
第一節 収録した古地名一覧	6
第二節 古地名と古地図	8
第三節 原谷の略年表と参考資料	14
第二章 各区の古地名考	
第一節 西山区の古地名考	
1. 西山区の古地名（小字）地図	22
2. 西山区の古地名一覧	23
3. 西山区の古地名考	24
4. 西山区の古地名	26
第二節 幡鎌区の古地名考	
1. 幡鎌区の古地名（小字）地図	40
2. 幡鎌区の古地名一覧	41
3. 幡鎌区の古地名考	42
4. 幡鎌区の古地名	44
第三節 本郷西区の古地名考	
1. 本郷西区の古地名（小字）地図	50
2. 本郷西区の古地名一覧	51
3. 本郷西区の古地名考	52
4. 本郷西区の古地名	54
第四節 本郷東区の古地名考	
1. 本郷東区の古地名（小字）地図	64
2. 本郷東区の古地名一覧	65
3. 本郷東区の古地名考	66
4. 本郷東区の古地名	68
第五節 細谷区の古地名考	
1. 細谷区の古地名（小字）地図	80
2. 細谷区の古地名一覧	81
3. 細谷区の古地名考	82
4. 細谷区の古地名	84
第三章 その他	
第一節 原谷地区の踏切道	100
第二節 「防 ^{ほう} の窪」にかかる橋について	110
主な参考文献一覧・執筆分担	115
「原谷の大地（原谷古地名考 150）」編集委員会組織	116
おわりに	117

第一章 原谷と古地名

第一節 収録した古地名一覧

西山区の古地名

番号	古地名	読み方
1	菖蒲ヶ谷	しょうぶがや
2	猿ヶ谷	さるがや
3	丸山	まるやま
4	荒駒	あらこま
5	久保山	くぼやま
6	上ノ山	うえのやま
7	井野尻	いのじり
8	久保	くぼ
9	上李田	うわすもんだ
10	下李田	しもすもんだ
11	尾	お
12	尾坪	おつぽ
13	定賀	さだか
14	西川原	にしがわら
15	天照	てんしょう
16	横手	よこて
17	森西	もりにし
18	昭和	しょうわ
19	上川原	かみがわら
20	中山	なかやま
21	矢部	やべ
22	孫六	まごろく
23	原	はら
24	西谷田	にしやだ
25	後藤ヶ谷	ごとうがや
26	下谷田	しもやだ
27	太郎次	たろうじ
28	中山	なかやま
29	前田	まえだ
30	中田	なかだ
31	市場	いちんば
32	南山	みなみやま
33	南田	みなみだ
34	大通	おおどおり
35	下川原	しもがわら
36	向川原	むかいがわら

幡鎌区の古地名

番号	古地名	読み方
1	板ヶ谷	いたがや
2	田中前	たなかまえ
3	上河原	かみがわら
4	中河原	なかがわら
5	黒比志	くろひし
6	菖蒲ヶ谷	しょうぶがや
7	寺ノ谷	てらのや
8	松崎	まつざき
9	峯山	みねやま
10	馬場崎	ばばさき
11	裏門	うらもん
12	西田	にしだ
13	土合	どあい
14	松場	まつば
15	下川原	しもがわら

本郷西区の古地名

番号	古地名	読み方
1	上新田	かみしんでん
2	大石	おおいし
3	又太郎	またたろう
4	切山	きりやま
5	向河原	むかいがわら
6	中川原	なかがわら
7	東坪	ひがしつぼ
8	西坪	ひしつぼ
9	清水	しみず
10	町屋	まちや
11	町屋川原	まちやがわら
12	柳原	やなぎはら
13	宮坂	みやざか
14	宮西	みやにし
15	古城	ふるしろ
16	井戸沢	いどさわ
17	上ノ山	うえのやま
18	古戦	こせん
19	北ノ谷	きたのたに
20	中村	なかむら

本郷東区の古地名（本郷南区、サン
グリーン区を含む）

番号	古地名	読み方
1	久保田	くぼた
2	池ノ島	いけのしま
3	馬ケ田	うまかだ
4	岩崎	いわさき
5	勧喜寺	かんきじ
6	新ケ渕	しんがふち
7	八ツ恵	やつえ
8	藪崎	やぶさき
9	池鯉鮒	ちりゅう
10	大目ノ谷	だいにちのや
11	石原田	いしはらだ
12	長面	ながおもて
13	西中曽根	にしなかそね
14	鑄師	いもじ
15	藪下	やぶした
16	中殿ノ谷	なかとのや
17	相馬ケ谷	そうまがや
18	法光寺	ほうこうじ
19	中御道	なかおみち
20	中道	なかみち
21	松崎	まつさき
22	半ノ木	はんのき
23	壺丁田	いっちょうだ
24	与次下	よじした
25	奥ノ海道	おくのかいどう
26	楠ケ谷	くすがや
27	在家田	ざいけだ
28	七反田	しちたんだ
29	味噌野	みその
30	堂下	どうした
31	堂山	どうやま
32	間加田	まかだ
33	婦安美	ふあみ
34	杉ノ谷	すぎのや
35	森下	もりした

細谷区の続き

42	山合	やまあい
43	柚ノ木	ゆのき
44	下前	しもまえ

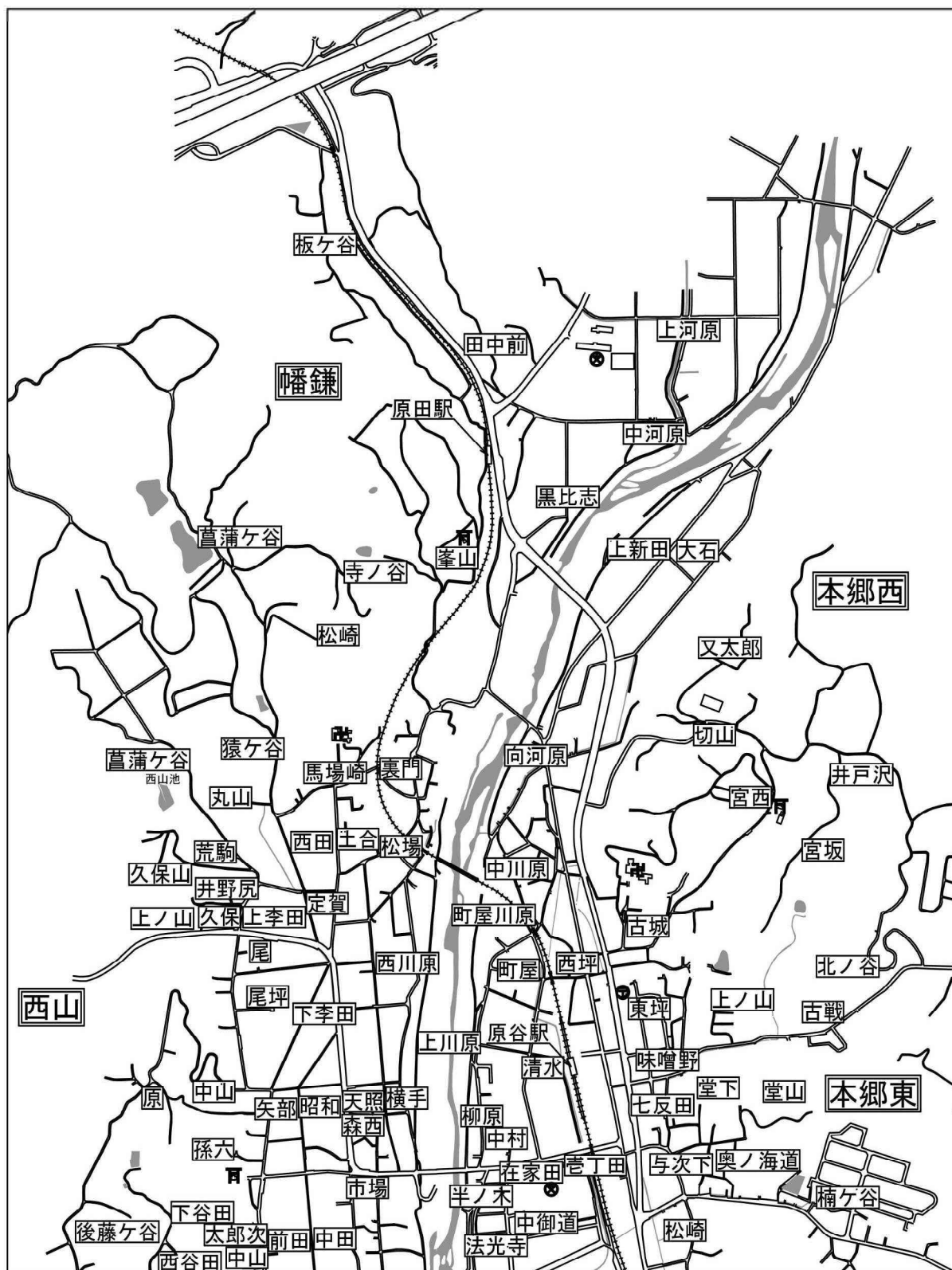
細谷区の古地名

番号	古地名	読み方
1	殿ノ谷	とんのや
2	郷ケ峰	ごうがみね
3	若宮	わかみや
4	宮下	みやした
5	高松	たかまつ
6	大谷	おおや
7	谷口	やぐち
8	堂前	どうまえ
9	打越	うちこし
10	久保田	くぼた
11	勘左ケ谷	かんざがや
12	狐ケ谷	きつねがや
13	山崎	やまさき
14	土橋	つちはし
15	五反田	ごたんだ
16	権田ケ谷	ごんだがや
17	枕田	まくらだ
18	土狗在家	けらざいけ
19	山伏塚	やんぶしつか
20	池ノ島	いけのしま
21	細合	ほそあい
22	橋向	はしむかい
23	中坪	なかつぼ
24	梨ノ木	なしのき
25	上船原	かみふなばら
26	正負田	しょうぶでん
27	下船原	しもふなばら
28	溝尻	みぞじり
29	下正負田	しもしょうぶでん
30	塚越	つかこし
31	東姥田	ひがしうばた
32	西姥田	にしうばた
33	子貝	こがい
34	松向	まつむかい
35	東柳添	ひがしやなぎぞえ
36	西柳添	にしやなぎぞえ
37	上野原	かみのはら
38	下野原	しものはら
39	西野原	にしのはら
40	高代	たかしろ
41	西向	にしむかい

※ここに示した古地名は、『静岡県掛川市原谷地区土地法典』（帝国市町村地図刊行会、昭和34年）に登場する小字名から採録しました。表記はそのままですが旧字、異体字などは新字、常用漢字に改めました。

第二節 古地名と古地図

1. 原谷地区の古地名一覧図 ①地区北部



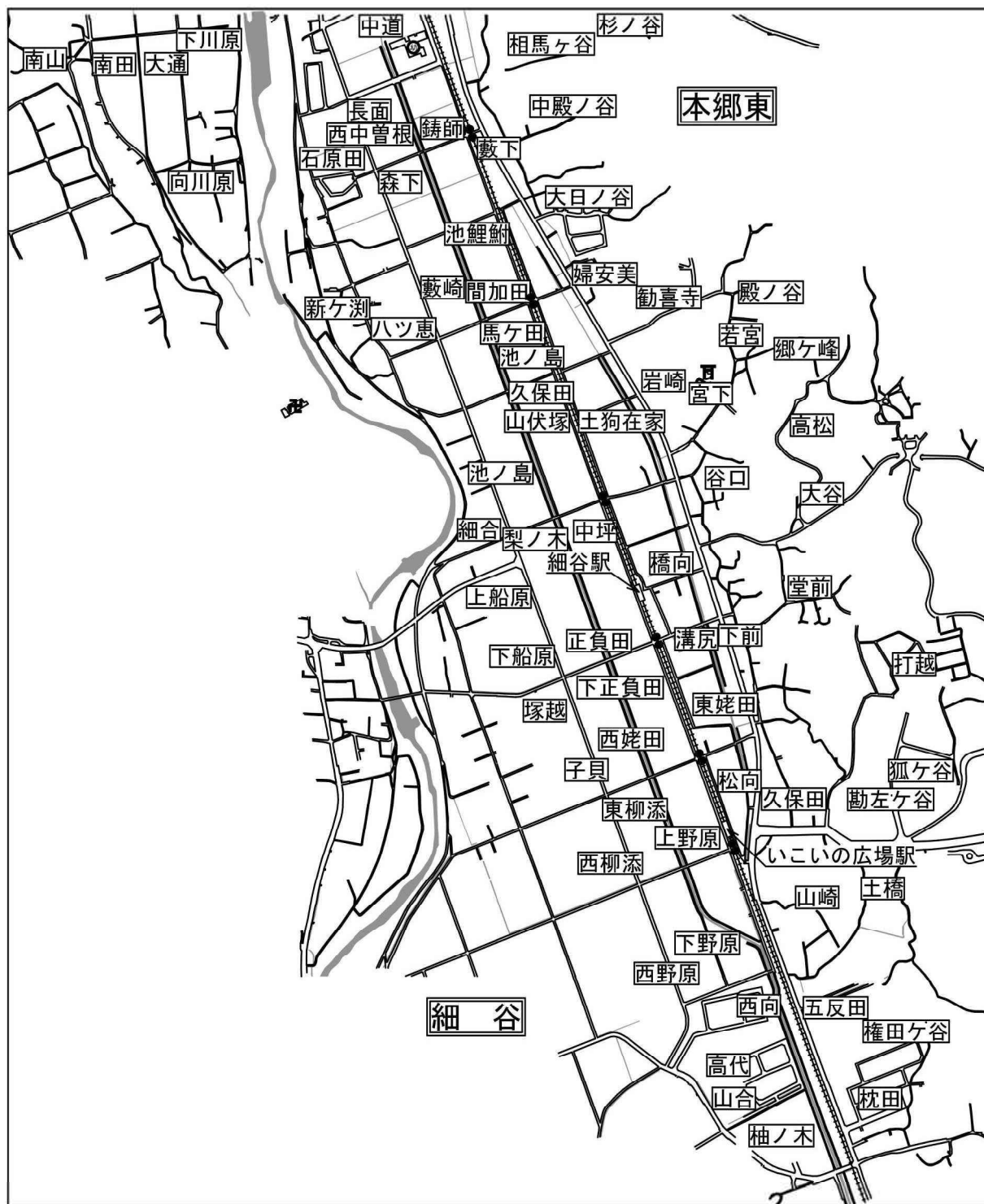
※ 1

②地区南部

＜地区北部＞の下にこの地図が入ります。※1が※2に接続します。

天浜線線路が目安となります。

※2



2. 原谷村周辺地図（明治25年陸地測量部発行「二万分一地形図」
浜松近傍第3号森町、第4号山名より）



左ページの本郷部分拡大

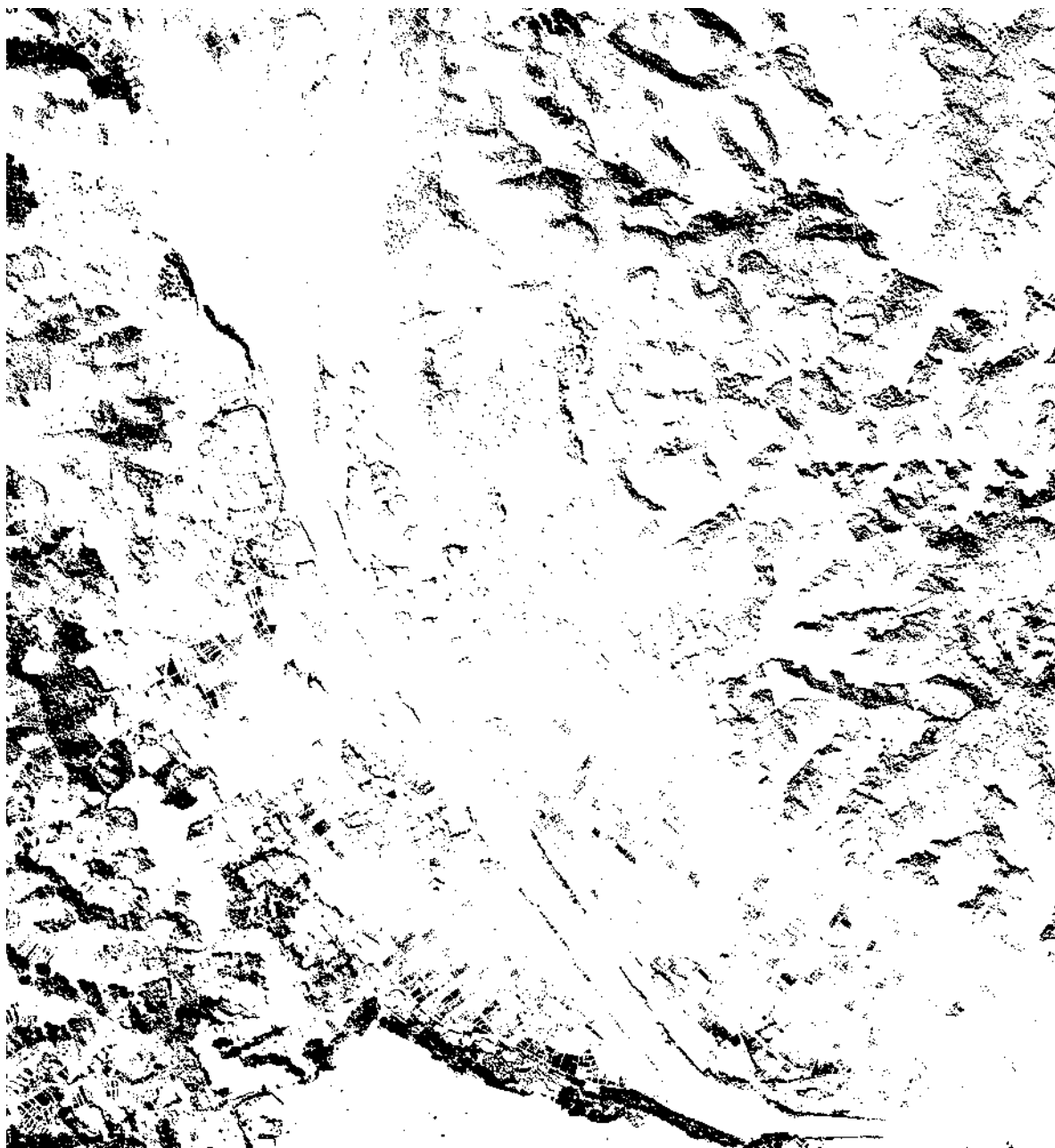


3. 昭和 30 年代の原谷地区航空写真

原谷小学校も昔の場所＝本郷西区東坪にあります。

バイパス也没有。

サングリーンや本郷南の地域に住宅はまだ見られません。



ほぼ同じ時期の地形図

掛川市発行「掛川市全図」より



第三節 原谷の略年表と参考資料 ※（数字）は参考資料の※（数字）と対応

西暦年	和暦年	原谷地域	備考 出典
縄文 縄文～ 弥生 古墳		長福寺西遺跡、安里山遺跡、幡鎌ⅠⅡ遺跡 黒比志遺跡、峯山遺跡、又太郎遺跡、八海山遺跡、長福寺遺跡、古城遺跡 長福寺Ⅰ号墳 楠ヶ谷横穴群、宮坂横穴群、「古銭」横穴群 楠ヶ谷古墳群だけで200基以上⇒自然村落だけでなくいくつかの自然集落が集まった大規模な集落を背景にもつものではないか	『はらや』 『はらや』 『はらや』 『掛川市史』
奈良		律令制⇒班田収受法（口分田班給…男2反、女1反120歩、奴婢は1/3を減じる）⇒条里制の展開（109メートル四方を1町歩＝1坪、坪が36集まって1里） 本郷に 東坪 、 西坪 の地名、西山に尾坪、原田地区に一之坪、二之坪など	
726	神亀3	行基、長福寺開山？ 奈良時代と推定される土器陶磁器類 長福寺で発見	「長福寺出土の遺物について」
884	元慶8	比叡山座主円珍、長福寺再興？ 天台宗 9世紀末～10世紀代の天台宗の遠江への進出に関係か？山伏の存在から長福寺が天台密教の山岳（山林）寺院のネットワークに組み込まれていた可能性	『はらや』 「遠州の古代山岳（山林）寺院」
927 10世紀	延長5	「延喜式」に 佐野郡 10世紀と推測される瓦（丸・平瓦）、土器陶磁器類、長福寺で発見	「長福寺出土の遺物について」
934	承平4	「倭名類聚抄」に遠江国佐野郡六郷の一つとして 幡羅（はら） 登場	
944	天慶7	長福寺の鐘造られる？ 追刻か？ 「遠江国佐野郡原田郷長福寺鐘天慶7年6月2日」	『はらや』
1098	永徳2	原氏初代師清没する 旭増寺に位牌	
1130	大治5	法金剛院創建（仁和寺子院 1130年待賢門院璋子）→ 原田荘 寄進	『静岡県史』
1185	寿永4	4代原清益、源平合戦で功あり、原田庄地頭職を得、寺田より本郷に本拠を移す	『静岡県史』
1193	建久4	曾我五郎十郎による仇討ち 清益、五郎に傷つけられるが十郎を討ち取る	『はらや』
1263	弘長3	原田荘細谷郷 の作付け面積、年貢額記帳される。元47町歩余⇒この頃には37町歩余へ 若王子社、賀茂社、千手堂などの社寺名あり	『静岡県史』原田荘、細谷初出 ※（1）
1265～	文永2	原田荘は最勝光院領となる（本家職）。領家職は随心院	『静岡県史』
1290	正応元	原田荘領家職をめぐって対立⇒後深草法王は 本郷 を最勝光院寺家に知行させる 本郷 の本家領家職＝最勝光院、 本郷 以外の郷の本家領家職＝金剛王院門跡へ	『静岡県史』本郷初出 ※（2） 『静岡県史』
1295	永仁3	細谷郷 の所務をめぐって最勝光院雑掌と 細谷郷 地頭原小三郎兼泰との間で相論⇒幕府の裁定⇒最勝光院が 細谷郷 の本家・領家職、金剛王院が 本郷 以下四郷の本家・領家職をそれぞれ知行、所務権を握って地頭を指揮する体制	『静岡県史』

西暦年	和暦年	原谷地域	備考 出典
		細谷郷の本家領家職＝最勝光院、 本郷 以下四郷の本家領家職＝金剛王院門跡へ	
		原田荘＝ 本郷 、 細谷郷 、 幡鎌郷 、吉岡郷、寺田郷の五つか？	『静岡県史』
		領家方預所が 本郷 に居住して年貢徴納してきた＝原氏	『静岡県史』
		後に東寺が最勝光院の権利を継承する⇒東寺百合文書として残る	『静岡県史』
1326	正中元	原田荘の年貢高…本年貢450石、綾被物二重、兵士10人など	『静岡県史』
	正中7	この頃、 西山 村の始まりといわれる	
1329	嘉暦3	原氏の庶子名として、 細谷郷 に「若狭跡、讃岐跡、光明跡、三郎四郎入道跡、蓮阿跡、五郎跡、奴栗跡（三郎四郎跡）」「向笠福王丸、山内女子、吉岡女子」の名前が登場	『静岡県史』
1331	元弘元	東寺領原田荘年貢争い、雑掌直瑜と地頭原忠益の間で和解	『静岡県史』
1346	貞和2	細谷郷 で、惣領分とならんで金子孫二郎殿分、向笠殿分、金子十郎殿分、 本郷 惣領殿分、天方殿分、 はたかま 殿分、御所熊殿分、後家分并すゝ蔵分が登場	『静岡県史』 幡鎌初出
1363～	貞治2	原田荘 細谷郷 代官大森師益 原氏と関係ある在地武士か？	『静岡県史』
1390～	明德元	原田荘 細谷郷 の代官 観音寺少納言坊（鈴蔵常喜）「原氏惣領の後家と併記される」⇒原氏一族 また寺庵・金融業者 森町飯田	『静岡県史』 『掛川市史』
1435～	永享7	原田荘 細谷郷 の代官 歎喜寺 慶朗 慶朗＝原氏一族？寺庵・金融業者	『静岡県史』 『掛川市史』
1440	永享12	幡鎌に最福寺開山	『はらや』
1443	嘉吉3	細谷郷代官、本家年貢未進注文作成。その中に「作人 山 中之得玄…作人 市 場之二郎衛門」とある	『静岡県史』 西山の市場、百姓名 ※（3）
1458	長祿2	松堂高盛、足利学校の業を終え円通院帰山	『はらや』
1459	長祿3	中遠一揆 原氏は今川氏と組んで守護斯波氏に敵対か？	『静岡県史』
1464	寛正5	原宮内少輔（頼方）、醍醐寺金剛院領原田庄の代官職に任ぜられる。	『静岡県史』
1469～87	応仁3	原頼景、長福寺を一族の松堂高盛を開山とする曹洞宗寺院として再興	『静岡県史』
		「松堂高盛禅師語録」に「当荘五所・西宮両大明神」とある	『松堂高盛禅師語録』
1494	明応3	北条早雲、遠州に乱入、放火殺戮	『松堂高盛禅師語録』
1498	明応7	明応の大地震	「松堂高盛禅師語録」
1492～1497	明応中	小澤氏民間に下る？	『掛川誌稿』
	明応6	原一族の孕石行重が今川方に転じて原要害（本郷城か）で戦う	『静岡県史』
1539	天文8	孕石光尚、原田荘 本郷 の相伝所領の坪付石米納所帳書写	『静岡県史』
		孕石の領地が「 ま門 観喜寺前、角田、山合、楠か谷、杉か谷 」に計4町6反2丈あった	『静岡県史』 ※（4）
1548	天文18	幡鎌 平四郎に今川義元感状与えられる（吉良荒河山在陣之刻…）	『静岡県史』
1554	天文23	原頼卿（14代）、春林院に寺領寄進	『はらや』
1560	永祿3	今川氏真判物が最福寺へ（佐野郡原田庄 幡鎌郷 之内 西福寺 本寺領 菖蒲谷 参石六斗地之事）	『静岡県史』 ※（5）
1564	永祿7	原頼延、竜昌院の慶岳和尚に長福寺領・末寺寄進	『はらや』
1570～	元龜天	小澤氏祖、駿河富士郡の辺へ逃げ去り20余年後帰る？	『掛川誌稿』

西暦年	和暦年	原谷地域	備考 出典
1573	元亀4	原頼延、石川家成の攻撃に敗れ芸州に逃れる…原氏滅亡	『はらや』
1587	天正15	小沢八郎四郎、 五所大菩薩 に鰐口奉納 佐夜八幡宮 禰宜五郎兵衛	『静岡県史』
1589	天正17	徳川家七ヶ条定書、「小栗二右衛門吉忠」の名で 原本郷百姓等 に出される	『静岡県史』
同年		小沢八郎四郎真英、家康より原田庄屋拝領?	『はらや』
1704	宝永元	本郷八幡宮火災	『はらや』
1708	宝永5	この頃、西山村 菖蒲ヶ谷 に溜池作られる。 下谷田 にもそれ以前に溜池築造される。	永井家文書※ (6)
1740	元文5	幡鎌最福寺焼失	『はらや』
1743	寛保3	本郷長福寺焼失	
1805	文化5	吉岡春林院焼失	「春林院誌」
19世紀 はじめ		「遠淡海地志」 本郷村小地名… カマイ 、中村、左用防、上新田、古城、五軒丁、大日谷、 下新田 、 椿藪 、 久保海戸 、 三左衛門島 細谷村小地名「 殿ノ谷 、 中ノ谷 、 下ノ谷 、 谷口 、 弥陀穴 。 旗指 、 土人謂 、 ハブザシト 。各和・吉岡・富部ノ堺。 城ノ壇 、 殿ノ谷ニ有之 、本郷・細谷堺。古墳有之。阿弥陀堂有リ。 中ノ谷阿弥陀穴 ト云所ニ有。 郷ヶ峰 。 「掛川誌稿」 今里正小沢八太夫ナルモノ、宅後ニ 古城 ト呼フ所アリ、溝壘ノ遺趾尚存ス、其上ヲ 上(ウヘノ) 山ト云、又 東屋敷下屋敷 ト云所アリ、下屋敷ノ山ニハ古墳墓多シ、是皆原氏累代ノ古墟ニシテ、三百年外ノ事想像ルヘシ、 法光寺分中御堂 ト呼フ所アリ、是宝光寺ノ旧趾ナリ、五六十年前、此村ノ民、宝光寺ノ趾ニテ宝光ノ印ヲ得タリ 弓削田氏 長福寺記ニ、弓削田八郎、退テ当郷ニ居ル、願主トシテ鐘ヲ鋳ルコトアリ、此後権兵衛ト云人アリ、今ニ 椎原嶋権兵衛堰 等ノ名残レリ、子孫アリ 「遠江国風土記伝」 「 本郷 城跡 一所あり、今人構と謂ふ 」 明治初 法珠庵の寺領…「 与次下、宮坂、勸喜寺、こせん、廣畑ヶ 」 明治元 幡鎌村差出明細帳→旗本細井氏へ提出 明治6 幡鎌村「地理誌編」作成(皇国地誌カ) 1889 明治22 原谷村誕生…本郷村、細谷村、幡鎌村、西山村 20世紀 昭和初 山崎常磐の原谷研究 一本郷古址ノ内掛川志ニアル上(ウヘ)ノ山ハ今牛乳屋宅ノ西北一段高キ平地ナリ、 今モ小字上ノ山ト云ヒ俗ニハ 上ノ屋敷 トモ云フ由土人ノ言ナリ一掛川志ニ云フ 東屋敷、下屋敷 ト云フ所ハ今知ル人ナシ 一八幡神社ノ西北行者山ヘ行ク途中今開墾畑ニナリ居ル所昔ハ幡社神職ニナリシ原氏ノ宅址ナリト云、 神主屋敷 ト云、開墾畑ノ北少ク下リタル所ニ墓石一ヶ存ス、表面及左右ニ数人ノ戒名刻シアリ、其中一行ノ下ニ享保十二年十一月十九日ト刻セルアリ、数人ノ墓ヲ後ニ改築シタモノナルベシ 此家ハ故原作次ト云ヒ古城池下ノ貧屋ニ住シ吾等小学生ノトキ同窓ナリ、早ク死シ后嗣森町辺ニ住スル由 此家モ原氏ノ分系ノモノナラン	

参考資料＜略年表中の※（数字）に対応しています＞

※（１）遠江国原田荘細谷村の検注帳が作成される。

原田荘細谷村正検取帳案

弘長２年正月（1263年）

東寺百合文書こ

『静岡県史』資料編５中世１

（遠江国佐野郡）

原田御庄 細谷村

注進 弘長二年正検取帳目録事
合

田数肆拾柒町柒段中

道溝壺町参段中

河成壺町参段式丈中

山成壺町玖段肆丈

不作壺町捌段肆丈中

畠成参町柒段

見作田参拾柒町肆段肆丈

古作柒町式反参丈

年荒式町捌段式丈中

古新陸町壺反式丈中

当新式拾壺町式反中

除陸町捌段参丈中、古作式町式反参丈中
当新肆町陸段

本免伍段肆丈中古作、東宮壺段
西宮肆段肆丈中

御神楽田式反 古作

八女神楽男給陸段 当新

若王子神田伍段 当新

賀茂神田参段 当新

千手堂仏性田式段 当新

御佃捌段肆丈 古作

郷司正作陸段 古作

人給参町 当新

定得田参拾町陸段中、加若狭讃
岐分田定、

古作肆町玖段肆丈中

分官米式拾肆石玖斗五升^{段別伍斗代}

年荒式町捌段式丈中

分官米拾肆石式斗五升^{段別伍斗代}

古新陸町壺段参丈

分官米式拾壺石伍斗六升^{段別参斗伍升代}

当新拾陸町陸段中

分官米肆拾壺石伍斗式升伍合^{段別式斗伍升代}

分官米佰式斛式斗式升伍合

段米参石玖斗式升^{段別五升定}

勘料米参石陸升壺合^{段別壺升定}

小段米陸石壺斗式升式合^{段別式升定}

御佃米拾肆石八升^{段別壺石陸斗定}

郷司正作米肆石陸斗柒升肆勺^{段別柒斗柒升捌合肆勺定}

（并力）

相口米佰参拾肆石壺斗参升捌合肆勺

右目録注進如件

弘長三年正月 日 地頭代紀在判

御使木工権助在判

（原）

弘長目六書進之候、忠益（花押）

参考

壺	いち	陸	ろく
式	に	柒	しち
参	さん	捌	はち
肆	し	玖	く
伍	ご	拾	じゅう

※（２）後深草法皇、遠江国原田荘本郷を最勝光院に安堵する。

後深草方法院宣案

正応３年３月３０日（1290年）

東寺百合文書み

『静岡県史』資料編５中世１

（端裏書）

「院宣案 原田庄本郷事
正応三三卅

（端書）静厳

「随心院中前大僧正坊御管領之時、宣覚律師申下問状之院宣、押妨庄家之間、依可為寺役之違乱、被付本郷於寺家院宣案」

（山城国）（遠江国佐野郡）
最勝光院領原田庄事、奏聞候之处、依領家職相論、及寺用闕如之条、尤以不便、所詮於本郷者、寺家令知行、可全寺用者、依院宣執達如件、

（勘解由小路兼仲）

正応三年三月卅日 左中弁判

謹上 宰相法印御房

※（３）遠江国細谷郷代官道伊、同郷本家年貢未進注文を作成する。

遠江国細谷郷本家米未進注文（折書）

嘉吉３年正月（1443年）

東寺百合文書メ

『静岡県史』資料編６中世２

（遠江国佐野郡）

細谷郷本家之未進帳

四
三貫五百六文 金子分
と

同米壺石四斗九升六合

同百八十六文 くりや銭

（両カ） 山中
是ハ□年未進分 作人得玄
壺貫五百四十四文 向笠分
同糸代八十四文

（之カ）
同米六斗壺升二合 去年□分
七百六十文 永享十二年之未進
八百十九文 嘉吉元年之未進

百二十六文 くりや銭 是ハ兩年之分

合三貫三百四十二文

是ハ兩三年之未進分

作人吉岡殿

壺貫四百十四文 細谷殿

是ハ去年之分

四百六十文 嘉吉元年之未進

三貫九百文 三年におんてんめされ候分の
未進候也、

四百卅二文 くりや銭 是ハ
兩年之分

〆年々未進分

合六貫貳百六文也、

百八十五文 惣領方

同米三斗三升□合

同六十五文 くりや銭 作人市場之
とととととととととと 次郎衛門

壺貫六百文 一年未進

貳百五十五文 一年未進

（る）
いつれも惣領方より御沙汰あ□へく候、
但注文之文面を写候て請取事ことくあるへ
く候

嘉吉三年正月 道伊（花押）
（花押）

注： と は取り消し

※（４）孕石光尚、遠江国原田庄本郷内の送電所領に関する坪付石米・国役納所帳を書写する。

孕石光尚置文

天文8年5月27日（1539年）

孕石文書

『静岡県史』資料編7中世3

（端裏書）

「天文八己亥年五月廿七日光尚 筆写置者也」

（孕石）

光尚（花押）

遠州原田庄本郷之内孕石譜代相伝之知行分坪付石米納所帳、本文破候間、為末代光尚令書写之置也

壺町 ま門観喜寺前

壺町貳反 角田 ^{八斗代}
此外わりあましあるへし

六反貳丈 山合 此内 ^{五反ハ五斗五升代}
^{七丈六斗五升代}

壺町三反 楠か谷 ^{此外壺反わりましある}
^{へし}

五反 杉か谷 ^{四斗五升代}

以上四町六反貳丈者、

壺町貳反 ^{此外一丈わり}
^{ましあるへし} 孕石村 ^{此内田一丈}
^{壺反仏供}
^{神田}

参反 井尻村

貳反 笠懸

以上壺町七反者

山家在々の成物、何も地頭徳分也、

※（５）今川氏真判物

永禄3年8月3日（1560年）

最福寺文書

『静岡県史』資料編7中世3

遠州佐野郡原田庄幡鎌郷之内西福寺本寺領菖蒲谷参石六斗地之事

右、任先在判之旨、領掌不可有相違、然者先地頭幡鎌八郎左衛門尉令押領云々、但去午年幡鎌知行分彼被官中嶋惣右兵衛尉、依申出子細雖改之、当寺領之儀者、前々由緒以朝比奈丹波守就訴訟、令新寄進之旨先判明鏡也、門前棟別参間諸役共永免許追了、山屋敷竹木田畠以下令停止他之競望、於向後者為寄願寺、弥勤行造営等不可有怠慢、若幡鎌子孫雖及異儀、一切不可許容者也、仍如件

永禄三庚申年八月三日

氏真（花押）

西福寺

※（６）覚（菖蒲ヶ谷溜池修覆願）

享保19年9月（1700年）

永井家文書

覚

しやぶヶや

一溜池壺ヶ所

此垠松木打樋長八間内法三寸四方水口立樋長式間内法三寸四方

是ハ貳拾四年以前大草太郎左衛門様御代官所之節用水溜池新規被仰付候付、幡鎌村御林ニテ垠木被下大工木挽釘銭之義ハ御入用ヲ以被仰付候、其以後損シ度々修覆仕候得共、当年ニ至リ害朽損シ水一円通不申候間、此度願申上候

下谷田

一溜池壺所

此垠松木打樋長八間内法三寸四方水口立樋長式間内法三寸四方

是ハ拾四年以前岩室伊右衛門様御代官所之節御伏替被仰付候ニ付、岡津村御林ニテ垠木被下大工木挽釘銭之義ハ御入用ヲ以被仰付候、其以後損シ度々修覆仕候得共、当年

ニ至リ害朽損シ水一円通不申候間、此度願
申上候

右ハ当村用水打樋式ヶ所之義度々修覆仕候
得共害朽損シ申候間御伏替被仰付被下候様
奉願上候以上

享保十七年子九月
高村嘉左衛門様

一 溜池 五ヶ所 御座候
一 御林 壺ヶ所
一 往還掃除丁場 東海道名栗村地内長三拾
六間御合給入会ニテ相勤申候

一 秣場 壺ヶ所
右秣場ハ当村内大字菖蒲ヶ谷之内合給并ニ
西山村入会草苅取申候

一 当村東西エ三丁半南北拾壺丁五拾間
一 東海道 掛川宿迄道法式里拾丁
袋井宿迄道法式里半

一 諸運上 無御座候
一 漁獵場 無御座候
一 諸職人 無御座候

右之通相違無御座候、以上
明治元辰年十二月

細井愛之助元知行所

遠江国佐野郡

幡鎌村

名主 儀平

組頭 磯兵衛

百姓代 善作

一 御高札場 壺ヶ所
一 郷倉 壺軒
一 家数 貳拾六軒
一 人別合百拾六人

此訳 男 五拾八人
女 五拾八人

※（7）幡鎌村差出明細帳

明治元年 12 月（1868 年）

山本家文書

マ マ
明元辰年十二月

村差出明細帳

細井愛之助元知行所

遠江国佐野郡

幡鎌村

一 高百五拾九石八升六合八勺八才 幡鎌村
（中略）

一 御朱印廿五石五斗余 禅曹洞宗最福寺

伊奈備前守様
一 御黒印 貳石 同宗最福寺扣 徳林寺

一 阿弥陀堂 壺ヶ所

一 天白宮 壺ヶ所

一 神明宮 壺ヶ所

一 御普請所

右者春秋川除堤御普請所御入用諸色代永御
上様被下置候但荒川ニテ数度之破損難渋仕
候

一 用水路

右用水当村原田村分水ニ相成当村御田地エ
六分寺田村御田地エ四分之割合水引込申候
字伝井

用水路坎樋松丸木

字辰ノ口

用水路坎樋松丸木

※（8）幡鎌村地理誌編

明治 6 年カ（1873）

山本家文書

（明治 6 年の文書綴に付けられていた）

地理誌編

遠江国

第三大区

佐野郡

二小区

幡鎌村

郡名 佐野郡

郷名 原野谷

庄名 原田庄

村名 幡鎌村

字松場裏門

当村地屋敷有之、家作多く有之、土ハ黒土
石マジリニ御座候、少シ高ミ平地御座候、
当村東ニ川有之、此川ハ原野谷川ト申候、
此川北ヨリ南エ流申候、此川元ハ黒俣村ヨ
リ福田村迄流候

当村方亥ノ方ヨリ子ノ方ニ山有之

気候

中分ニ御座候、月面ニナル風当リ吹廻シニ
御座候

方位

村ノ中央ヨリ南ノ方ハ西山ニ当ル、又ハ北
ノ方ハ寺田村ニ当ル、東ノ方ハ本郷村ニ当
ル、
西山村中央迄道法凡六町、寺田村中央迄道
法拾五町、戸綿村中央迄道法二拾町、本郷
村中央迄道法拾町、大日村中央迄道法拾五
町

地味

瘦地ナル字西田字黒ヒジ、砂地色ノ土目ナ
ル字菖蒲ヶ谷字板ヶ谷、白土目ナル字田中
前砂地ナル

地宜

字松場裏門ノ内石マジリ黒土故柿少々ヨロ
シ、外ノ物悪シ

道路

掛川ヨリ秋葉道筋、当村地内本郷村境ヨリ
戸綿村境間幅七尺、牛馬通行出来

沢地

沢地無御座候

林業

河流

水上当国佐野郡黒俣村ヨリ流レ出、又ハ西
ノ谷川高山村ニテ合、其ヨリ徳泉村ニテ掛
川河ト合、川六拾間、洪水平水ヨリ六尺増
ス、川魚夏ハ鮎居ルヤ

堤防

馬踏本堤幅二間高サ二間敷六間昔ハ(以下
記載なし)

渡津

渡船場無御座候

瀑布

瀧無御座候

水利

水掛リハ原ノ谷川ヲ引キ寺田村地内ヨリ引
込字黒ヒジエ掛、当村外字之儀水掛リ悪シ
ク旱損地ナル所ニ御座候

温泉

薬湯出ル所無御座候

浅窟

谷ハ無御座候

峰嶺

峯ノ名称ニ野田、此峯ヨリ北エ川根大日山
見エ、小和田村大山見エ、大尾山見エ

村街

人家入込

社寺

神明神社、猿田彦神社、祭り村方ニテ勧請
スル村氏神トス

(以下見出しのみ 内容記載なし)

城砦 戦場 陵墓 勝地 橋梁 島嶼 湊
岸 暗礁 潮汐 岩石 草木 鱗介 鳥獣
漁撈 網ノ口 舟筏 産物 器械 物価
運漕 運賃 傭銀

第二章 各地区の古地名考

第一節 西山区の古地名考

1. 西山区の古地名（小字）地図



2. 西山区の古地名一覧

番号	古地名	読み方	説 明
1	菖蒲ヶ谷	しょうぶがや	むかし、菖蒲が群生していました。江戸時代の溜池があります。
2	猿ヶ谷	さるがや	小さな山が点在し麓には、幾つかの池があります。
3	丸山	まるやま	まるい小さな山があり、その麓には丸山さん宅がありました。
4	荒駒	あらこま	※荘園体制下の荘官名と一致する地名です。
5	久保山	くぼやま	開墾されて良質な茶園が広がっています。
6	上ノ山	うえのやま	西山から宇刈に抜ける所の山です。
7	井野尻	いのじり	小さな貯水池があり、水が湧き出る水源であったことが推察されます。
8	久保	くぼ	久保とは、「窪」くぼの語源から来ていることが多いです。
9	上李田	うわすもんだ	※荘園体制下の荘官名と一致します。
10	下李田	しもすもんだ	※荘園体制下の荘官名と一致します。
11	尾	お	「尾」とは最後、後ろを意味して、西山地区の後方と思われます。
12	尾坪	おつぼ	「坪」とは、土地の平らな箇所を指します。
13	定賀	さだか	境界線の部分で、定(さだ)かとか定かでないの語源からきたものと思われます。
14	西川原	にしがわら	むかし、原野谷川の河川敷だったところではないかと思われます。
15	天照	てんしょう	神明社があり、「天照皇大神」を祀っていました。
16	横手	よこて	横に当てる、脇の意。
17	森西	もりにし	森(杜)の地名は、特に神社のあったところなどに使われる地名です。
18	昭和	しょうわ	年号である「昭和」からきています。
19	上川原	かみがわら	原野谷川の河川敷だったところではないかと思われます。
20	中山	なかやま	中組と下組の2箇所「中山」と命名された土地があります。
21	矢部	やべ	※荘園体制下の荘官名と一致します。
22	孫六	まごろく	西之宮神社があります。
23	原	はら	※荘園体制下の荘官名と一致します。
24	西谷田	にしやだ	細い谷に水田が点在します。
25	後藤ヶ谷	ごとうがや	細い谷の上に茶園が広がっています。
26	下谷田	しもやだ	細い道路を奥まで行くと行き止まりとなった所です。溜池がありました。
27	太郎次	たろうじ	「太郎」は「すぐれた所」、「良い所」という意味があります。
28	中山	なかやま	中組と下組の2箇所「中山」と命名された土地があります。
29	前田	まえだ	荘官名と一致しています。前後を意識し命名された事も考えられます。
30	中田	なかだ	隣りに「前田」があることから前後を意識し命名された事が考えられます。
31	市場	いちんば	むかし、市場があった所と思われます。饅頭屋もあったと聞いています。
32	南山	みなみやま	西山の一番南に位置する山(台地)があります。
33	南田	みなみだ	むかしから、美味しいお米が取れるところです。
34	大通	おおどおり	西山地区切つての大区画水田地帯です。
35	下川原	しもがわら	原野谷川の河川敷だったところではないかと思われます。
36	向川原	むかいがわら	小さな区画の水田が点在しています。

※「荘園制下の荘官名と一致」について…鈴木政弘「原野谷川上流の古地名について」(『掛川市の古地名考』掛川市教育委員会、昭和 55 年)が紹介している荘官名とこの地域の小字名が一致するという意味です。

3. 西山区の古地名考

(1) 西山の地形上の特色

西山村の始まりは、正中 7 年頃(1330 年頃)だと言われています。西山地区は南北に細長く、東側は原野谷川に面しており、昔からその影響を強く受けてきました。原野谷川の水位は現在少ないが、昔は水がゴウゴウと流れており、大雨の時は何回となく氾濫し西山橋が流される(昭和 5 年<1930>、同 13 年、同 45 年…)など住民に多くの被害を与えてきました。反面とても豊かな恵みを与えてくれる存在でもありました。飲料水は勿論のこと、水田等の農耕作、船の行き来による水運、古くは鮭も遡上し漁業が盛んに行われていました。西側は台地となっており良質な茶園が広がっています。



原の台地から見た西山地区

(2) 西山の特徴ある古地名



西山橋を渡り西山区へ入った道路左側が市場

かもしれません。原野谷川の上・下流の人々と水運を活用し交流が盛んに行われ海の幸、山の幸がここに集まり売り買いが行われていたと思います。また江戸時代の西山は横須賀藩であり、掛川藩の本郷とは多少違う文化圏であったのかも知れません。

次に「天照」という古地名です。昔この地に神明社があり、「天照皇大神」を祀っていたことからこの名称がついたと推察されます。神明社は、天照大神を主祭神とし、伊勢

人が生命を維持し生きて行く為には、川、山等の自然環境が非常に大切です。西山の古地名の半分以上は、山、川、谷、原、森、田等が使われています。先人が自然への対応を深く偲ばせている事が古地名から良くわかります。本郷から西山橋を渡り西山に入った所が「市場」(いちんば)という古地名です。物々交換や売買が行われた市場と思われます。人の多い本郷側ではなく、西山に市場があったのは、大変興味深い事です。荘園の置かれていた時代にはこの地域の商業の中心だった



天照 西山橋から西北方向を撮影

神宮内宮(三重県伊勢市)を総本社とする神社で慶長 6 年 (1601)勸請かんじょうされました。西之宮神社は元和 8 年 (1622)に蛭子命ひるこみことを祀り再建、「原」にあった千勝(権現)社は元禄元年 (1688)に再建されたと言われています。その他、李田、荒駒、尾坪、井野尻などほかの地区では見られない独特の地名もあり、どこにルーツがあるのか興味深いところです。

(3) 西山の苗字ベスト 3

西山の苗字は、鈴木姓が多く次にその約 1/2 で佐藤姓、次に青木姓と続きます。静岡県の1位が鈴木姓、全国の1位が佐藤姓、2 位が鈴木姓であり、静岡県や全国的に多い鈴木・佐藤姓がこの西山区に居住していることがわかります。

調査した平成 23 年、隣の幡鎌区では、区の半分近くが山本姓であるのに対し、西山区は、1 位の鈴木姓は西山全体の 16.3 %、佐藤姓が 7.4 %、青木姓が 5.2 %と合せても 30 %に満たず、更に苗字の数は 50 以上あり 1 つの姓に特定されておらず、他地区からの入居が多い地区である事がわかります。(地域電話帳調べ H23.2.24)

(4) 西山区の長老に聞く

西山区の山本貴造氏(95 歳、平成 30 年 9 月現在)に聞く。現役バリバリで水田、お茶、野菜栽培、樹木の剪定、庭木の整枝・・・まだまだ、若い者には負けられんと健康そのものです。平成 24 年から平成 30 年 6 月まで 10 回近く何度もお邪魔し西山はもとより原谷、掛川の昔の事をお聞きし色々教えて頂いております。色々なお話しの中でも戦争の話は特に考え深い様です。「原の台地には戦闘機の滑走路、戦闘機の格納庫。食べる物はなし、空襲はくる。ひどい時代だった、今は幸福じゃあ。若い人に言ってもな一ア。」



山本貴造氏 松の整枝中

西山区の苗字の多い順 ベスト 3		
1	鈴 木	22戸
2	佐 藤	10戸
3	青 木	7戸

4. 西山区の古地名

(1) 菖蒲ヶ谷(しょうぶがや)

西山池があり、西山、幡鎌地区の農業用の貯水池となっています。以前は、両側に山があり車1台がやっと通れる細い道でした。今は両側の山は開墾され茶畑として利用されています。昔、花菖蒲が咲いていた所であると聞いています。西山池の奥には、赤土の斜面があり昔は子供の遊び場となっていました。今では、樹木が生い茂り立ち入ることが出来ません。菖蒲ヶ谷の水田は、落ち葉等が堆積し土壌が良いのか水が良いのかは不明ですが、ここで取れたお米は美味しかったとのこと。



菖蒲ヶ谷の中心に農道が通る

(2) 猿ヶ谷(さるがや)

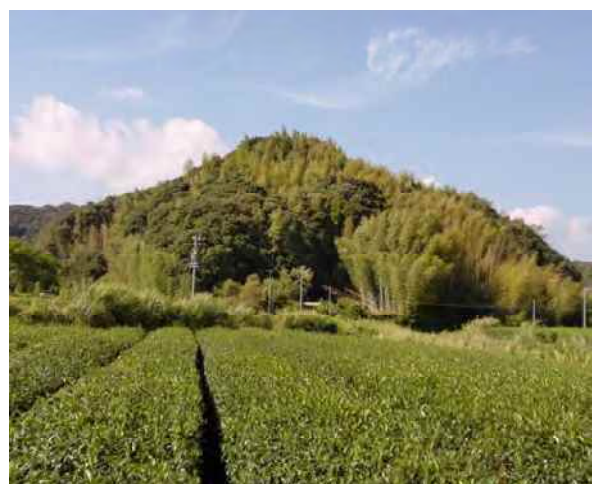
両側に山があり、その麓^{ふもと}には、幾つかの池が点在し西山、幡鎌地区の農業用の水源地となっています。この付近の一部はゴルフ倶楽部^{かつらぎ}の葛城が所有しています。そして一時果樹園として利用されていましたが、現在は荒地となっています。猿ヶ谷の「猿」は、近隣する幡鎌地区の「猿田彦神社」^{さるたひこじんじや}から地名がきているのか興味深いです。



幾つかの池が点在している

(3) 丸山(まるやま)

丸い小さな山があります。山の麓^{ふもと}に西山で一、二の旧家だといわれる丸山さん宅がありました。平成12年(2000)ころまで居住していました。一連の山は、丸山さんが今でも所有しております。原泉には、丸山姓が何戸かあり関係があるのか調べてみたいです。



山の麓に丸山さん宅の屋根が見える

(4) 荒駒(あらこま)

荘園体制下において、荘園領主から現地の管理を委ねられた者(荘官)の姓と地名が一致します。昔は、水田であったが現在は埋め立てられ茶園として利用され、一部は写真にある様にレンコン栽培も行われています。レンコン畑の奥に直径 1m 弱の浅い小さな井戸があります。そこから水が湧き出ており豊富な湧水を利用してお米、レンコン等を栽培しておりました。また、荒駒とは、調教前の馬をその様に呼びます。昔、この地に馬頭観音ばとうくわんのんがありました(長福寺に納めました)。隣には馬場崎ばさき(幡鎌)と言う地名があり、このこととの関連性も示唆されます。



丸山の南側(写真手前)が荒駒

(5) 久保山 (くぼやま)

久保とは、「窪」＝くぼの語源から来ていることが多くあります。久保山の北側には窪地があり、西山池と呼ばれ西山の農業用水の水源となっております。久保山の一部は、現在、開墾されて良質な茶園として利用されています。



写真右側の林の向こうに西山池があります

(6) 上ノ山(うへのやま)

西山から宇刈うがりに抜ける所の山です。昔はトンネルがあり、大正時代に県にトンネル設置陳情に行ったようです。そして、大正 13 年(1924)に人力車がやっと通過出来る位のトンネルが完成しました。その後、昭和 60 年(1985)には、県道 81 号線(金谷赤根線)として整備され、トンネルではなく切り割りとなり、袋井、磐田、森町方面に行くのに大変便利になりました。西山橋を西に渡り坂を下った十字路に金谷赤根線完成記念碑があります。高さ 117cm、高さ 50cm の碑です。



西山から宇刈へ抜ける道

(7) 井野尻(いのじり)

「井」とは、川や池で生活用の水を 汲み
とるという意があります。原泉に「居尻」と
言う地名がありますが、「居」は、居住の居
です。河川が海に入る所を「川口」、川上の
水の源である水源地を「尻」と呼び「底」と
いう意味もあります。「井野尻」には、防火
用の貯水池(現在はコンクリート製の貯水槽、
写真右下)が昔からあり、水が底から湧き出
る水源であったことが推察されます。また、
井野尻は、そかのぼ荘園体制下の荘官名とも一致して、
中世紀頃に遡る可能性があります。



上組の集会場から西方向を見る

(8) 久保(くぼ)

今は、写真に見られる通り住宅地になって
います。久保とは、窪(くぼ)とも書きます。
現在は埋めたてられ道路と同じ高さとなって
いますが、以前は、道路より低く窪地の所で
した。



西山から宇刈へ抜ける道

(9) 上李田(うわすもんだ)

荘園体制下の荘官名と一致します。うわすもんだ上李田
と下李田しもすもんだの2つがあり、上李田は西山池の水
係り、下李田は原野谷川取入れ口(頭首工)の
水係りであったかも知れません。かんり官吏にちか
い役人だったのでしょうが、荘園期には、京
都＝荘園領主から任命されてやってきた人か
もしれません。



県道 81 号線 最福寺入口から西北方向

(10) 下李田(しもすもんだ)

莊園体制下の莊官名と一致します。上李田^{うわすもんだ}と下李田の 2 つがあります。「下李田」は、原野谷川取入れ口(頭首工)の水係り。また、「李」は果樹名の李(すもも)から来ていることも考えられます。「すもも」は中国原産で古代の頃に日本に渡ってきました。それが、この西山の地名にみられる事は、都の人間がこの地の莊園に持ち込んで来たものかもしれません。



県道 81 号線 最福寺入口から南西方向

(11) 尾(お)

尾と(12)の「尾坪」はつながりの土地です。尾とは、本体の後についている部分の意味です。あまり重要でない土地に付けられる名称で、当時、面積が広い割には、水利が悪く、道路もなかったことからこの地名が付けられたと推察されます。現在は、道路、水利も整備され良質な水田、畑作地帯となっています。



県道 81 号線 最福寺入口から西方向

(12) 尾坪(おつぼ)

「坪」とは、土地の平らな箇所を指します。「坪」という単位は、条里制からくると思われます。条里制とは、古代の土地区画制度のことで、1町(360 歩、約 109 m)四方の区画を1坪(つぼ)とし、坪を横に6個並べて1里(り)、縦に6個並べて1条(じょう)としました。1坪の中を10に分け、その小さな1区画は1段(たん)とされ番号付けしました。尾とは最後の部分という意味でここは最後の「坪地」です。これにより土地の正確な位置や面積が簡単にわかります。(11)の「尾」と尾坪はつながりの土地です。



県道 81 号線 最福寺入口から西南方向

(13) 定賀(さだか)

広い水田地帯であり、原野谷川の水を利用した水田地帯となっています。写真奥に見える家々は幡鎌地区です。西山地区と幡鎌地区の境界付近で境界線が明確でない、さだかでない。「さだか」とは、「はっきりしている所」と訳せます。



県道 81 号線 最福寺入口から北方向

(14) 西川原(にしがわら)

川原と言う地名がいくつか点在します。西川原は面積が少なく、大部分が上川原となっています。西川原は、現在 宅地、畑として利用され、写真中央左に見える茶色の外壁のお宅(電柱の横)は、現在も時々、正式な名字ではなく古地名の「かみがわら」と呼ばれています。写真は、原野谷川側から西方向を撮影したものです。幡鎌区や本郷西区にも同様の下川原、中川原といった地名が見られます。



原野谷川側から西方向を撮影

(15) 天照(てんしょう)

原野谷川から豊富な水が小川を通じて流れている水田地帯です。昔この地に神明社があり、「天照皇大神」を祀っていたことからこの名称がついたと推察されます。地名を「あまてらす」と呼ばなかったのは、神の名をつけるには、やはり恐れ多いと思ったのではないかと思います。神明社は、天照大神を主祭神とし、伊勢神宮内宮(三重県伊勢市)を総本社とする神社です。日本全国に約 5 千社あると言われております。一説には約 1 万 8 千社あるとも言われております。「神明」という言葉は天照大神のことを指すほか、単に「神」という意味でも用いられております。



西山橋から西北方向を撮影

(16) 横手(よこて)

横手は2箇所に分かれて存在し、いずれも神明社(天照)を東西で挟む形となっております。「横手」の横は横に当てる、脇の意。神明社の横にあることからこの名称が付けられたと推察されます。神明社は、明治初年に権現原の千勝(権現)社と合せ西之宮神社に合祀されました。



原野谷川土手から西方向を見る

(17) 森西(もりにし)

写真は西山橋から西方向を撮影したものです。森(杜)の地名は、特に神社のあったところなどに使われる地名です。本郷東地区の「とうどの森」も同様です。実際、隣接する「天照」には、昔 神明社がありその西側に位置するため、この名が付けられたと推察されます。神明社の祭神の天照大神は、太陽を神格化した神であり、皇室の祖神(皇祖神)とされているため、農耕儀礼と密接に結びつき広く信仰を集めた神様です。



西山橋から西方向を撮影

(18) 昭和(しょうわ)

正面に見える白い農業用ハウスの先の山の麓が西之宮神社です。昭和初期に耕地整理を行い、いくつかの字名の土地がまとめられ当時の年号である「昭和」と命名されました。耕地整理を行った記念として、西之宮神社に記念碑が建てられ高さ4m、幅40cmで立派なものです。耕地整理について、記念碑に昭和2年(1927)起工、昭和5年竣工、総工費2万円也と記載されています。



県道81号線から西方向を見る

(19) 上川原(かみがわら)

(35) の下川原に対し上川原と命名か。写真奥が西山橋で昭和 50 年 (1975) に完成しました。総事業費 1 億 3530 万円でした。現在は、はらや親水公園となっております。平成 8 年 (1996) に造成され、掛川市で初めての本格的親水公園として完成しました。公園が出来る前は畑でした。現在の土手の内側にもう 1 つ小さな土手がありその間に畑が広がっていました。その畑は、戦時中の食糧難の時、共同で開発した土地であり、共有地として皆で共同管理していました。法務局にある不動産登記法所定の地図をみるとこの公園部分は佐野郡本郷村となっております。



はらや親水公園

(20) 中山(なかやま)

中組と下組の 2 箇所に「中山」と命名された土地があります。この中組の「中山」は、現在、西山地区の墓地の当りです。墓地駐車場付近に善福寺跡があり、昭和 30 年 (1955) 後継者がいないために廃寺となり、昭和 38 年袋井に移築しました(観福寺、袋井市袋井)。観福寺は平成 12 年に一部修復を行いました。が、主柱・紋章は現在も残っており、内部は当時の善福寺の建材がそのまま残っています。



崇租橋から西方向を見る



観福寺



(袋井市役所産業政策課観光振興室提供)

観福寺：延暦 12 年 (793)、天台法華宗として建立され、「袋井」の地名発祥の寺といわれ、母と子の縁と絆の寺として知られ、「へそ寺」とも呼ばれております。玄関の両脇にある黒色の柱、玄関正面にある紋章は善福寺の物が現在も使われています。

(21) 矢部(やべ)

山の麓に西山の旧家である矢部さん宅があります。矢部氏は元清水周辺の豪族であり、鎌倉の梶原景時を清水で討ち取ったとも伝えられています。鎌倉から南北朝の頃に「富士の裾野の戦い」に敗れ西山に来たと言われていました。この地は、本郷城を持った原氏が支配しており、原氏の承認のもとで矢部氏を保護しその勢力下に置いたのではと推察されます。また、西之宮神社前から矢部宅前までの通りを矢部通りと言われていました。

(22) 孫六(まごろく)

西之宮神社(等級 13 級)があります。明治に入って千勝(権現)社と天照にあった神明社を西之宮社に合祀し、現在の西之宮神社となりました。西之宮神社の祭神は蛭子神と他 3 つの神です。掛川市内で神社が 115 社を数えますが蛭子命を祀る神社は、西之宮神社と倉真の松葉神社の 2 社のみです。蛭子とは、日本神話で「イザナギ」「イザナミ」の 2 神の間に生まれた子です。3 歳になっても立つことが出来ず船に乘せられ海に流されたが、神々の助けで海の幸を食べ無事に成長し恵比寿神(えびすじん)となり皆に尊崇されていました。

(23) 原(はら)

この地は、平坦で広大な茶園が広がっており良質なお茶の生産地です。原の北側には、権現原という地名があります。徳川家康が武田軍と戦い散々にやられ、この権現原(森)に逃げ込み命拾いをしたところと伝わっています。のちに天下を取り家康の死後この地に千勝(権現)社を建てたとの話があります。また、原の南には、太平洋戦争中に軍用機用の飛行場が昭和 20 年(1945)の終戦までありました。近くには古墳があり、その後、原谷の豪族として古代から中世に登場してくる原氏発祥の地は、ひょっとしてこの地が始まりではないかと思っています。



西山中央水路から西側を撮影



西之宮神社



西山の墓地を登りその頂上から南方を見る

(24) 西谷田(にしやだ)

山々に囲まれた細い谷の道を行くと山の湧き水を利用した水田地帯が広がっています。更に細い道路を行くと2つの道路に分岐した所が西谷田です。西奥には後藤ヶ谷が見えます。西谷田に対し東谷田、南谷田等はありませんが、西山の方角から命名したのではないかと考えます。



谷田に入る道路、西方向を見る

(25) 後藤ヶ谷(ごとうがや)

細い道路を進むと道路が2つに分岐し左(西方向)に進むと後藤ヶ谷です。後藤ヶ谷の台地の南端に大きな屋敷がありました。原左衛門という長者が大きな家を作って住んでいたとの事です。長者屋敷と呼ばれ高さ5尺、幅が底辺で4尺ほどの土塁とその外側に幅1mほどの溝が存在し北側に裏門、西南の隅に表門がありました。付近に井戸もありました。明治初年には、牧之原開拓と同じ様に旧幕府旗本衆の勤番衆(遠方より来て勤務すること)が茶園開拓に入植し住居にも使われたとも言われています。現在、屋敷はなく茶園となっています。



西谷田から西方向を見る

(26) 下谷田(しもやだ)

西谷田にある分岐路を右(北方向)に進んだところが「下谷田」です。細い道路をさらに奥まで行くと行き止まりとなり、そこに下谷田の池があります。この池は農業用の「ため池」として利用されております。今でも、西山区民の奉仕作業で道路を整備し池も農業用の貯水地として大切に管理している所です。



西谷田から北方向を見る

(27) 太郎次(たろうじ)

西之宮神社の南側に位置する場所です。「太郎」は「すぐれた所」、「良い所」という意味があります。「次」は宿場があったところという意味があります。西之宮神社の入口には、大正時代に建てられた道標があり、北：森、大尾。東：本郷。南：宇刈、和田岡と刻印されており、宿場などがあり、起点となった場所である事が推察されます。



中央水路敬神橋から西南方向を撮影

(28) 中山(なかやま)

写真左隅 青色の屋根の建物が西山製茶工場です。中組と下組の2箇所に「中山」があります。昭和 49 年（1974）7 月 7 日静岡地方気象台で観測史上最高記録となる 24 時間連続雨量 508mm を記録し、七夕豪雨と命名されました。この七夕豪雨により土砂崩れが発生し、写真での中央に見える二階屋のお宅に深夜、土砂が押し寄せ 1 人が生き埋めになりました。お茶の時期で西山製茶工場から人が駆け付け、停電の中、雷の光を頼りに必死に土砂を除け何とか人命を救う事が出来ました。



西之宮神社前から南方を撮影

(29) 前田(まえだ)

写真は、西之宮神社前から南方を撮影したものです。西之宮神社から見て「前の田」と言う意味から来ているのか、荘園体制下の荘官名と一致することからなのかは不明です。広大な水田地帯で西山地区を代表する大水田圃場地帯です。



西山製茶工場

(30) 中田(なかだ)

写真は、中央水路敬神橋から南方を撮影したものです。広大な水田地帯です。昭和初期に耕地整理を行い大きな区画となり、西山地区の大水田圃場地帯といえます。「中田」の隣に「前田」があることから前後を意識し命名された事が考えられます。



中央水路敬神橋から南方を撮影

(31) 市場(いちんば)

この地名は、荘園などがあつた中世紀頃に付けられた「地名」の様です。むかし市場がありました。今の市場の様な売り買いではなく、お互い取れた農作物を持ち寄り物々交換が主であつた様です。川隣であり、遠い昔は、川を使って上流から山の幸、下流から海の幸が集まりここで物々交換が行われたかもしれません。明治 30 年ころまで、原野谷川には鮭が遡上^{そじょう}していました。1m 程の鮭を原田地区で捕獲したとのことです。鮭は貴重な蛋白源であり、古代は鮭の皮を利用し靴を作り(原田 仲屋考古資料館展示)使用していました。



西山橋から南西方向を撮影

(32) 南山(みなみやま)

西山の一番南に位置する山(台地)で山に向かい道路が延びており、茶園や袋井方面に行く際に利用されています。台地の上は、広大な茶園が広がり良質なお茶の生産地です。方向を意識した地名で「南山」に対し「北山」はありませんが、西山橋から西之宮神社に向かう線に「中山」「中田」等の中心的地名があることから、この辺りを中心とした西山全体の方向に関係する地名を付けたと推察されます。



中央水路の淡月橋から西方向を撮影

(33) 南田(みなみだ)

写真は、中央水路淡月橋から南方を撮影したものです。西山地区で最も南に位置する水田であることから命名しました。昔 深田(ふかだ)で、田植え、稲刈りが大変でした。腰まで浸かり作業を行っておりました。稲刈りでは、刈り取った稲を、竹で編んだ舟の様な物の上に置き作業を行っておりました。この水田は、栄養豊富で良質なお米が大量に取れました。



中央水路の淡月橋から南方を撮影

(34) 大通(おおどおり)

耕地整理を行う前から区画がしっかりしていて見通しが良く太い道路が通っていたため「大通」と命名されたと推察されます。西山地区を代表する大区画水田地帯です。



農道交差点から南西方向を見る

(35) 下川原(しもがわら)

(19) の「上川原」に対し「下川原」と命名か。古代、原野谷川が原谷地内を東へ西へと蛇行し流れ、もとは原野谷川の河川敷だったところではないかと推測されます。実際に今でも耕作中に水田から小石が多数出て来るため、現在も拾い集めており小石が畦道に山積みあぜみちにされております。下層も砂利の層であるため水持ちが悪いとのことです。下川原の西に位置する南田は、逆に稲刈り時も水はけが悪く深田であり、この違いは大昔 原野谷川が流れていた位置を示す手掛かりでもあります。



市場から南方向を見る

(36) 向川原(むかいがわら)

この地は、地番が本郷地番であり、昔は、原野谷川に一本橋が架けてありました。大正時代初期には、この一本橋を渡り川向こうの下新田地区(本郷)と同じ組内として会合などの付き合いを行っていました。地図によっては、向川原ではなく、「上新田」と記載されている古地図もあります。ここの住人の檀家は最福寺ではなく本郷地区にある長福寺です。原の台地には、下新田地区の方が所有する畑も多数あります。西山地区耕地整理の際、西山地番でないため、耕地整理が出来ませんでした。そのなごりで今なお昔ながらの小さい圃場^{ほじょう}が点在しています。



西山地区の最南の向川原

<その他資料>

(1) 西山城

西山の西の台地に西山城(出城)がありました。別名「吉岡城」とも言う砦^{とりで}的な城で眺望が良く、高台にも関わらず水が湧き出る所もありました。お城について次の2つの説があります。

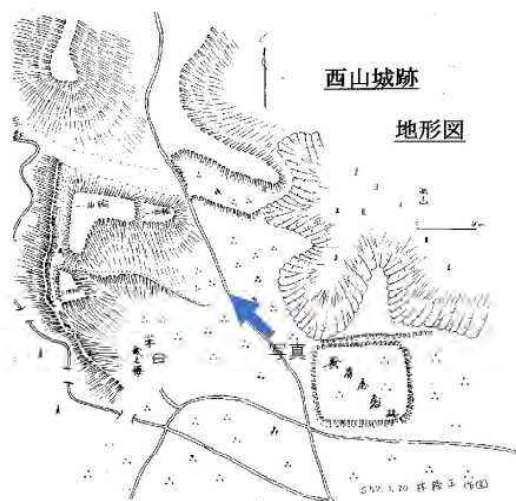
- ・原氏の砦説(1180年～1573年)

本郷方面、北は原田、南は小笠山方向の眺望が大変良く、敵の動きが一望出来る。

- ・武田軍の軍事用要所説(1546年～1582年)
遠州侵攻の軍用地、高天神城侵略の中継地



西山城



出典：林 隆平(静岡古城研究会々員)「ふるさと探訪 掛川の古城址」昭和54年10月1日

(2) この付近に残るその他古地名

城の腰

西山城があったところが城の腰で、近隣には、太平洋戦争時代の飛行場(中島飛行場)や戦闘機格納用の洞窟があります。

長者屋敷

また現在は茶畑となっていますが、原左衛門という長者が大きな家を作って住んでいたという長者屋敷もあります。



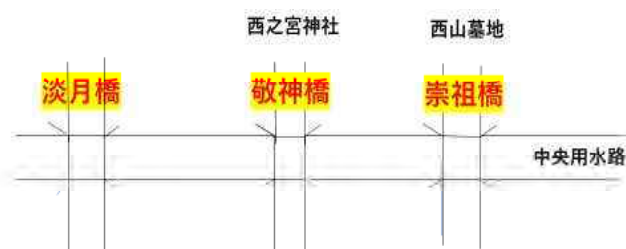
長者屋敷周辺

(3) 西山の橋

- ・淡月(たんげつ)橋：華道の流派、当時(昭和5年)耕地整理を主導的に行った永井寛^{かみ}さんが華道の淡月流師匠であった事から命名。
- ・敬神(けいしん)橋：敬神とは、神を敬うこと
- ・崇祖(すうそ)橋：崇祖とは、先祖を崇める心

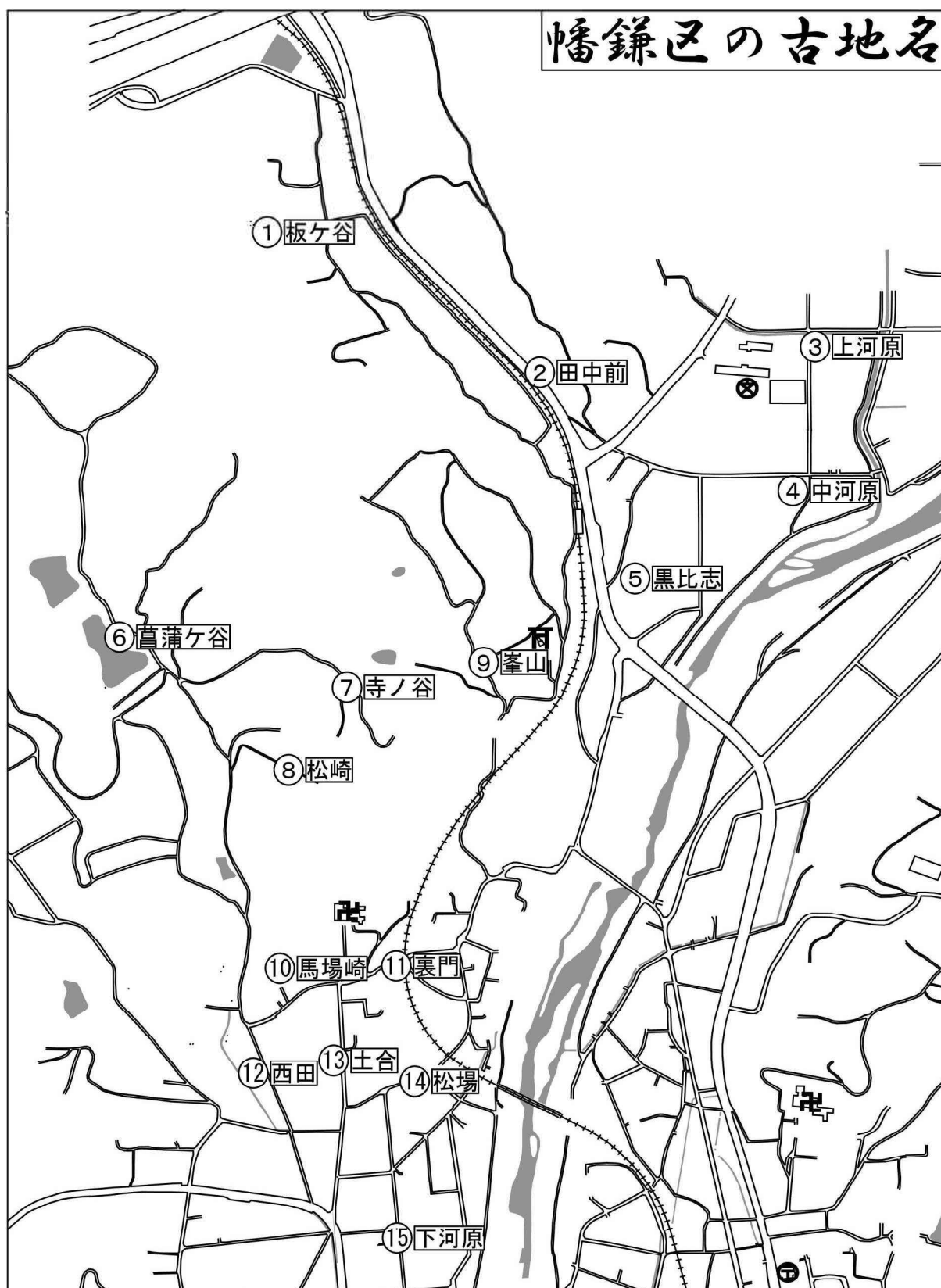


う かり
宇刈に抜けるトンネル(昔は戦闘機の格納庫)



第二節 幡鎌区の古地名考

1. 幡鎌区の古地名（小字）地図



2. 幡鎌区の古地名一覧

番号	古地名	読み方	説 明
1	板ヶ谷	いたがや	石の道標があり、大尾山・掛川への道しるべとしています。
2	田中前	たなかまえ	※荘官名と一致し、塩の道の登り口付近も含まれます。
3	上河原	かみがわら	昔は荒地で、今は水田と河川敷の一部で、家屋もあります。
4	中河原	なかがわら	昔は荒地で、河川敷となっています。
5	黒比志	くろひし	黒比志遺跡があり、※荘園体制下の荘官名と一致する地名です。
6	菖蒲ヶ谷	しょうぶがや	西山、幡鎌との境界に沿って北へ細長く延びています。
7	寺ノ谷	てらのや	火葬場があった所です。
8	松崎	まつざき	最福寺裏山付近で、市の遺跡地図に幡鎌城が記されています。
9	峯山	みねやま	※荘官名と一致し、幡鎌峯山遺跡や猿田彦神社があります。
10	馬場崎	ばばさき	※荘園体制下の荘官名と一致する地名です。
11	裏門	うらもん	幡鎌氏の邸宅といわれている所は、大屋敷と呼ばれています。
12	西田	にしだ	※荘園体制下の荘官名と一致する地名です。
13	土合	どあい	幡鎌では、最も小さい面積の所です。
14	松場	まつば	※荘官名と一致し、油屋、鍋屋等と呼んでいる旧家があります。
15	下川原	しもがわら	板ヶ谷以外で最も低地で西山と隣接した所です。

※「荘園制下の荘官名と一致」について…鈴木政弘「原野谷川上流の古地名について」（『掛川市の古地名考』掛川市教育委員会、昭和 55 年）が紹介している荘官名とこの地域の小字名が一致するという意味です。

※戦時下の勤労奉仕作業＜農業増産に向けて…時局匡救事業か＞

西山から幡鎌方面を見る（写真左上部にわずかに最福寺が見えます）。



3. 幡鎌区の古地名考

(1) 幡鎌の地形上の特色

幡鎌は原野谷川西岸に位置し、戸数は 70 戸余です。板ヶ谷地内は掛川から森へ通じる交通の要所として、昔は塩の道、明治とともに道路が拡幅され、さらに二俣線が通り、現在も県道と天浜線が森町方面へと通じています。昔から西山に隣接した北の小高い地域に民家が集中し、原谷橋より原野谷中学校まで整備された水田が広がっています。

最福寺周辺には、峯山遺跡、裏門遺跡や幡鎌城(館)など歴史の名残をみることができる地域です。

また、面積の大半は、板ヶ谷、菖蒲ヶ谷、寺ノ谷の3つの谷で占められ、飛地が多いのも特徴で、昭和 58 年(1983)の掛川土地宝典によると、西山に 30 箇所余、本郷には数箇所が存在しています。

※飛地とは、ある行政区画に属しながら、地域から離れて他の区域内にある土地をいう。



本郷から見た幡鎌地区

(2) 古文書等にみられる幡鎌の特色

『掛川誌稿』には、幡鎌は、水に深い関係を持つと書かれています。原野谷川が台地に突き当たって洩をつくったのは、場所的に台地の端にのぞんでいることから端鎌即ち幡鎌という地名が生まれたものと考えられます。中世に入ると 14 世紀の東寺百合文書に「はたかま殿分」とか「原 幡鎌方」といった原氏の一族で幡鎌という地名を名乗る武士が登場してきます。また幡鎌は原野谷川の洪水による被害に悩まされ続け、安政 2 年(1856)の原野谷川の普請願に詳細が書かれており、当時の幡鎌村は、直面する大きな出来事であったことがわかります。



原野谷川通御国役堤川除御普請願場書上帳



明治5年の幡鎌村古地図(幡鎌区蔵)

明治はじめの幡鎌村古地図に、家と思われる 45 戸が表示され、古地名の記入もあります。この古地図は、川池用水・荒地・秣場・田方・畑方・道筋を色別に表示していますが、山と思われる所はすべて「秣場」となっているのが特徴です。古地図の右側が北方向で、川幅の広い所は荒地と記入されています。秣場とは、田畑の肥料や牛馬の餌にする草の刈取地で、地域の農民が共同で使った入会地です。

※大円山最福寺は、永享 12 年（1440）大輝靈耀大和尚の開山で、曹洞宗、大洞院末です。永禄 3 年（1560）今川氏真より 3 石 6 斗地寄付の黒印、慶長 8 年（1603）徳川家康より 25 石 5 斗の朱印を与えられました。令和元年（2019）には最福寺の大改修が行われました。

（3）幡鎌の特色ある古地名

①地形的特徴から板ヶ谷のように谷や、上河原のように河（川）がつく地名が多く見られ、小高いところで・・・山や・・・崎なども使われています。谷と川と山といった景観と関わりを有する地名が多いと思われます。②土豪屋敷の跡を伝えるような古地名、裏門、馬場先や、大屋敷、宮下などの小字があります。この地は、比較的高台であり、土豪の居館や城の場所としての雰囲気を持っています。③



平成22年に発掘された峯山遺跡の一部

荘園体制下の荘官名と一致する古地名として峯山、田中前、黒比志、西田、松葉がその例で偶然に一致するものもあると思われます。

（4）幡鎌の名字ベスト 3

「幡鎌」の名字発祥の地といわれる幡鎌姓は、現在、幡鎌地内に一軒もないです。幡鎌の名字の半分近くが山本姓です。この地の山本姓は、江戸時代初期（寛永時代）の頃以前からと思われます。平成 23 年（2011）の調査では、山本姓が 1 位で全体の 43 %、鈴木姓は、21 %、村松姓は、6 %でこの 3 つの姓で幡鎌の 70 %を占めています。苗字の数は 21 で西山の 50 以上に比べて半分以下です。

幡鎌区の苗字の多い順 ベスト 3		
1	山本	35 戸
2	鈴木	17 戸
3	村松	3 戸

（地域電話帳調べ H23. 2. 24）



神明神社跡地を案内する鈴木武彦氏（中央）

（5）古老に聞く

幡鎌在住の鈴木武彦氏は、85 歳で（平成 30 年 12 月現在）幡鎌の古地名の由来や遺跡、神社などを現地でお聞きしました。また、当時の原野谷川の豊富な魚類、爆弾が落下した貴重なお話のなかで、今後も幡鎌全体をさらにくわしく案内したいとのことでした。武彦氏は、茶園の改植のため峯山遺跡の一部が発掘された地主で、当時をなつかしくお話されました。

※猿田彦神社は、猿田彦之命を祭祀したもので、創立された年代は不明です。昔ここに天白社があり、その当時の社殿は焼失し、安永 9 年（1780）6 月 4 日に再興されました。明治 13 年（1880）9 月に天照大神、豊受大神を祭る神明神社を合祀、同時に村社としました。

4. 幡鎌区の古地名

(1) 板ヶ谷 (いたがや)

「～ヶ谷」は谷地・窪地に付けられますが、この低地は山と山との間が広く、細長い板状であることから「板ヶ谷」と命名したと考えられます。原野谷中入口の信号付近は、谷口と呼ばれています。山がほとんどで、低地の水田に沿って天浜線と県道森掛川線が並行し、新東名の森掛川インター沿いに森町へと通じています。この新東名と県道沿いに「寺島・幡鎌地区農地整備事業」の計画が平成 29 年（2017）に発足しています。



原野谷中入口の信号より北西方向を撮影

(2) 田中前 (たなかまえ)

田中前の田中は、荘園体制下の荘官名と一致します。この地にある原野谷中学校は、もともと田園地帯であった所を自衛隊の協力により埋め立て、そこに校舎を新築し昭和 35 年（1960）に開校しました。翌年、三教場より新校舎に移り、12 月に新校舎落成式を挙行了しました。また昭和 30 年代、この辺りの水田では、農家が近くの瓦屋に粘土層を提供した際、トロッコ押しのアルバイトをした中学生もいたようです。



中央の原野谷中学校付近が田中前

(3) 上河原 (かみがわら)

原野谷川は、豪雨による氾濫を繰り返してきたが、昭和 34 年（1959）の集中豪雨の後、強固な堤防が築かれました。上河原の堤防付近は昔から赤池と呼ばれてましたが、堤防は蛇籠で小中学生の格好の水遊び場となり、学校から帰るとランドセルを置き、すぐさま、ふんどし姿になり飛び込みなどの遊びを満喫しました。



左側は原野谷川で原田から南方向を撮影

(4) 中河原（なかがわら）

土地改良前は、上河原の南が中河原でした。しかし、改良後は中河原の地名は出てこなくなり、川幅も広く堤防の一部となっていると推察されます。この地も上河原と同様、川の氾濫に農家の人々は悩まされ、古地図には「荒地 中川原」と記されています。



左側は原野谷川で北東方向を撮影

(5) 黒比志（くろひし）

荘園管理下、領主が荘園を管理し、荘民を支配するためにおいた役人（荘官）の姓と一致します。原田駅前道路東側に、未発掘の「黒比志遺跡」（約 5,000 m²）が存在し、弥生時代中期の土器片が出土しています。この広い水田地帯は、昭和 44 年（1969）11 月から昭和 56 年 3 月にかけて土地改良が行われ、無農薬栽培のおいしいお米が収穫されるようになりました。遺跡の東側約 400 m が原野谷川で、昔は魚類が容易に捕獲できたと考えられます。



前方の家屋付近が黒比志遺跡

(6) 菖蒲ヶ谷（しょうぶがや）

昭和 20 年（1945）、B29 爆弾 10 数発が落下したが、現在は埋め立てられています。当時、近くの製材所に丸太を持ち込むも、爆弾の破片が刺さっていたため、製材を断られたと長老から聞きました。この地は、山が連なり、谷田（谷間にある粗悪な土地）と呼ばれているところで、狭くて以前は水田・茶畑を耕作していましたが、現在はほとんどが耕作放棄地となり、奥へ進むと葛城北の丸へ通じている道があります。同名の土地が、近くの西山区にもあります。



菖蒲ヶ谷は右後方窪地の奥に長い

(7) 寺ノ谷 (てらのや)

原野谷川より、沢伝いに奥へ亀が登って来たと当時の耕作者に聞きました。このようなところは、子供達の格好の遊び場であったと思われます。寺ノ谷の奥は茶園で耕作放棄地が増えています。この途中には昔の火葬場があり、寺の北方向に位置した奥側の谷で、「寺ノ谷」の場所を特定できる谷であることから命名したと考えられます。



中央より左が寺ノ谷、右へ行くと猿田彦神社

(8) 松崎 (まつざき)

最福寺裏山に隣接した山の奥が松崎です。崎は、本来の意味は山の険しいことで、山の突き出したところを一般的にいいます。『掛川誌稿』では、「… 幡鎌トハ端鎌ト云義ニシテ、昔ハ深淵ニ臨ミシ村ナリシニヤ…」と記されています。西側に水路があり、水と関連しているため「松崎」と命名したと考えられます。



後方の山が松崎で民家はない

(9) 峯山 (みねやま)

荘園体制下の荘官名と一致します。峯の下
の文字は、神様が降りてくる神木を意味し、その神木がある山が「峯」という漢字です。峯山の頂上で、平成 22 年 (2010) に幡鎌峯山遺跡の一部を発掘したところ、縄文時代中期前葉、弥生時代後期から古墳時代前期・後期の集落跡であることがわかりました。そのすぐ南側に猿田彦神社が祀られています。神社北側の峯山頂上付近には昔、「天白神社」が祀られていた。現在は茶園になっているが、さらに調査したい。峯山の頂上に立つと、尾根の眺めは絶景で、峯山の古代人は太陽が沈むまでこの地を日々、おう歌していたと思われます。



原野谷川方面より北方向に撮影

(10) 馬場崎 (ばばさき)

写真左から最福寺山門、稲荷神社、常夜燈と並んでいます。「馬場」とは、馬を扱う土地で、「馬場先」は馬場の前方の乗ってきた馬を止める所です。先が崎となっているが、関連があると考えられます。中世時代とされる幡鎌城が、最福寺裏山に位置し、未完成の曲輪や土塁の残片が見られ、幡鎌古墳も含め、掛川市遺跡地図に記されています。幡鎌平四郎が天文年間（1532 ～ 1555 頃）に築いた館（城）とされています。秋葉山常夜燈は、平成 30 年（2018）に木造瓦葺から新しく御影石製で設置されました。



左から最福寺、稲荷神社、秋葉山常夜燈

(11) 裏門 (うらもん)

大手門(表門)に対し、搦手門(裏門)といわれます。阿弥陀堂のあった処は、「大屋敷」^{おおやしき}と呼ばれ、幡鎌平四郎の宅跡と言われている。裏門遺跡は未発掘で、縄文時代後期から弥生時代中期にかけて、縄文土器、弥生土器片が見つかっています。最福寺門前の秋葉山常夜燈は、以前裏門の地にあり、また、3代目の「火の見やぐら」も撤去され、跡地に市の同報無線が設置されています。当時は、夜警小屋は反対側にあり、馬場崎を含め、幡鎌の中心地であったと言えます。原谷橋の幡鎌入口にあった石の道標は、公会堂前に移設しています。



道路の奥を右側に下ると原谷橋

(12) 西田 (にしだ)

写真正面の山の下側は大円山最福寺で、その南側の西が西田です。荘園体制下の荘官名と一致します。この地に昔、「神明様」が祀られていましたが、今は猿田彦神社に合祀されている霊験新たかな跡地です。



西山方面から北方向に撮影

(13) 土合（どあい）

一般的に、「土合」とは、多くが街道と街道の合流点「道合」から変化したといわれています。また川と川の合流点「洞合」語源の地も存在しています。現状は、南北に水路があり、隣接している字「松場と馬場崎」の間に細長く位置し、北の奥へと伸びて、幡鎌では最も面積が小さい字です。



左側が馬場崎・中央が土合・右側が松場

(14) 松場（まつば）

荘園体制下の荘官名と一致します。今でも油屋・鍋屋と屋号で呼ばれている旧家があります。その一軒の旧家にある江戸時代と思われる古地図では、約 728mm × 1,013mm の大きさで、田畑、川用水などが色分けで示され、当時の土地の様子がわかります。洪水のときは、低い土地からこの地に非難してきた人がいたと、松場の住民から聞きました。



右方向は原野谷川

(15) 下川原（しもがわら）

原野谷川付近には、川原や河原と呼ばれている地名が多くあり、西山区にも同名の飛地があります。昭和 5 年（1930）の古地図によると、原野谷川に沿って隣接した上河原・中河原・下川原の一部は、いずれも荒地と記入しています。二段構えの堤防も軟弱で洪水時には、田畑に浸水した話を長老から聞きました。



西山方面より東方向を撮影

昭和 6 年（1931）7 月、原谷橋が完成

完成の式典が行われている様子が撮影されています。

原谷村役場や工事の関係者でしょうか？

川原にはたくさんの子供たちの姿も見えます。

手前が本郷、向こうに見えるのが幡鎌です。

工費は 1 万 6487 円であったと記録されています。



第三節 本郷西区の古地名考

1. 本郷西区の古地名（小字）地図



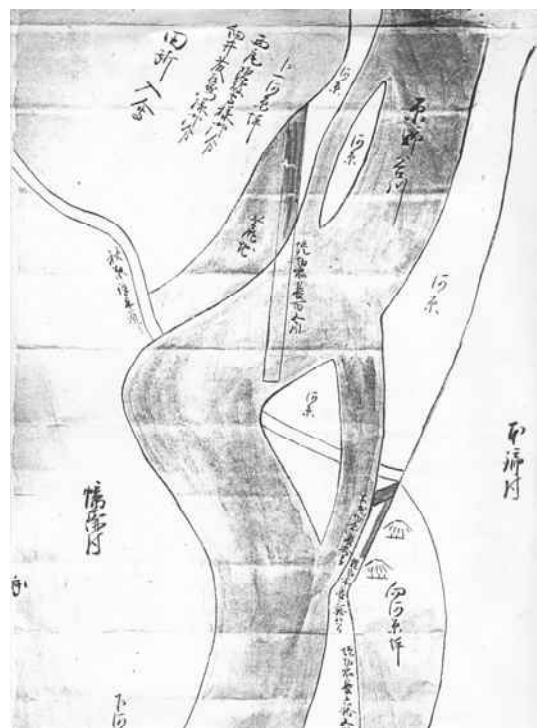
2. 本郷西区の古地名一覧

番号	古地名	読み方	説 明
1	上新田	かみしんでん	本郷西区の一番北側。江戸期の新田開発によるもの。
2	大石	おおいし	現在は田畑だけの地域です。
3	又太郎	またろう	開発者の名前から付けられたものか。
4	切山	きりやま	日常生活には出てこない小字です。
5	向河原	むかいがわら	幡鎌地番の地域で、幡鎌村の飛地であったところでした。
6	中川原	なかがわら	原野谷川の川原であったところでした。
7	東坪	ひがしつば	条里制に関係するか。江戸期には小澤八太夫家の屋敷地でした。
8	西坪	ひしつば	条里制に関係するか。原谷駅の所在地です。
9	清水	しみず	豊かな水に恵まれた地域。原谷浄水場があります。
10	町屋	まちや	人家の集まった地域か、または待ち家からきた地名か。
11	町屋川原	まちやがわら	ここも原野谷川の川原からつけられた地名です。
12	柳原	やなぎはら	新興住宅地です。
13	宮坂	みやざか	八幡神社への登り坂の周辺地域です。
14	宮西	みやにし	八幡神社の西側の地です。
15	古城	ふるしろ	原氏の居館があったところでした。
16	井戸沢	いどさわ	水源地があったことが推測されます。
17	上ノ山	うえのやま	原氏の「上ノ屋敷」があったところと推定されます。
18	古戦	こせん	古い戦いのあった地域で、歴史を感じさせます。
19	北ノ谷	きたのたに	上ノ山の東北にある谷です。
20	中村	なかむら	もとは村の中心地だったところか。

※向河原について…

右の絵図には原野谷川と洪水によって「切所」となったいくつかの堤防や荒地、河原などが記されています。川の東側には本郷村と向河原坪（幡鎌村）、西側には幡鎌村と上河原坪、下河原坪の地名が読み取れます。また向河原坪には民家が描かれ、上河原坪には「西尾隠岐守様御分、細井藤左衛門様御分、田地入会」とあります。飛地の様子や幡鎌村が横須賀藩と旗本の相給支配を受けていたことなどが分かります。さらに秋葉往来通りと記された道路も見えます。

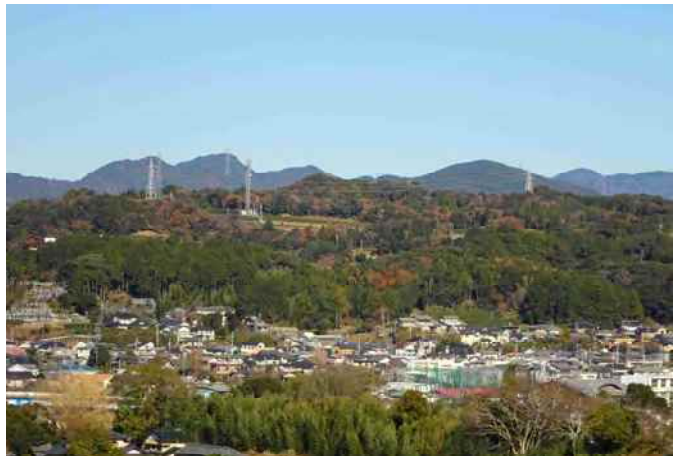
（「書上扣」 文政 11 年（1828）、村松家文書）



3. 本郷西区の古地名考

(1) 本郷の地形、特産品

本郷は原野谷川の東にあり、その中心を古来から塩の道、秋葉道とよばれる街道が南北に縦断しています。近代に入り道路も整備され、かつ地元の念願であった鉄道が昭和 10 年（1935）、二俣線として開通し原谷駅が設けられました。また村の中央よりやや奥に安里山長福寺、八幡神社があり、村人の尊崇を集めてきました。この地方は古くから穀物生産を主とし、近代とともに茶業が急速に普及

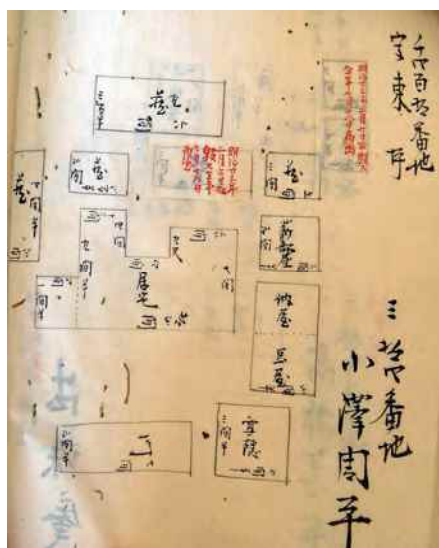


西山から見た本郷西区

・発展し、農家にとって欠かせない副業となりました。また原野谷川の「年魚」（あゆ）は有名で、本郷は天龍坊とよばれる柿の産地でもありました。

(2) 本郷の歩み

地区内には縄文、弥生、そして古墳時代の遺跡が点在しています。長福寺古墳や楠ヶ谷古墳群は、この地域に早くから人々が住み始め、次第に長とよばれる有力者が登場してくる様子を明らかにしてくれます。そして『掛川誌稿』には、「古へ幡羅郷ノ里長ノ居ル所故名シモノナリ」、「原氏…古へヨリ数世此ニ居リシ家ナルヘシ」とあり、古くから地域の中心であったこと、また原氏が本拠を置いていた地であることなどが言及されています。原氏は一族を含めて中遠地帯を支配下におき、国人として大きな力を有したが、戦国時代とともに有力武士たちの圧迫を受けしだいに勢力を失い、16 世紀後半滅亡に追い込まれていきます。同じ時期、原野谷川中流域には原田荘が登場してきます。本郷、細谷、幡鎌、寺田、吉岡の五



明治期の小澤家屋敷図

か郷から構成されていたが、後に細谷は最勝光院、それ以外の四か郷は金剛王院が荘園領主となります。江戸幕府の権力が確立すると、この地域は天領や大名領、旗本領が混じり合い複雑な変遷を繰り返します。江戸時代後半、本郷村は掛川藩と旗本細井氏の相給で村高 1146 石弱、戸数 143 戸とこの地域では最大の村でした。庄屋は原氏の系譜を引く小沢八太夫家がつとめ、東坪に広大な屋敷を構えました。

明治に入り政府による近代化策が推進され、町や村の在り方も大きく変化しました。それが明治 22 年（1889）の自治区造成でした。本郷、細谷、西山、幡鎌の四か村が合併による原谷村の成立です。その後昭和 32 年（1957）に掛川市に合併するまで原谷村は続きました。

旧本郷村の区域は、現在、本郷西区、本郷東区、本郷南区、サングリーン区の四つの自治

会に分かれています。

(3) 本郷の古地名

昭和 34 年 (1959) の「土地宝典」によれば本郷には 56 の小字があります。この小字以外に現在の人びとの記憶から忘れ去られた「古地名」＝文献上に出てくる地名として、構、左用防、椿藪、三左衛門島、久保海戸、廣畑ケ、権兵衛、東屋敷などがあり、また小字より小さな地名として権兵衛、伝四郎原、ぼんでん(梵天)、稲荷山、しもしょうじ、おんだし、五軒丁、井ノ口など、ルーツを考えると興味深いものもあります。

こうした古地名などを分類すると、①律令制や荘園制に関係するものに東坪、西坪、七反田、一丁田、在家田、味噌野、勧喜寺、奥ノ海道、久保海戸、町屋、②原氏に関係するものに古城、古戦、上ノ山、中殿ノ谷、左用防、構などがあります。③社寺に関わるものに宮坂、宮西、勧喜寺、宝光寺、中御道、④土地開発に関するものに上新田、下新田、又太郎、切山、権兵衛、伝四郎、三左衛門島、奥ノ海道、④地形的特色を有するものとして中川原、大石、町屋川原、清水です。

これらの地名から本郷という地域が歴史的にも古く遡ることができることがわかります。そして地名には時代の特徴が刻印されていて、何気なく使っているものにも人々の暮らしやこの地域の歴史の盛衰といったものを読み取ることができます。



長福寺



天浜線原谷駅舎

(4) 本郷西の苗字

本郷西の苗字は多い順に、鈴木姓 20 戸 (約 10 %)、竹下姓 11 戸 (約 6 %)、守屋姓 9 戸 (約 6 %)、山崎姓 9 戸 (約 6 %)、小澤姓 7 戸 (約 5 %)、弓桁姓 6 戸 (約 3 %)、野口姓 5 戸 (約 3 %)、山本姓 5 戸 (約 3 %) と続きます (平成 23 年 2 月地域電話帳等調査)。鈴木姓、竹下姓はほかの地区でも見られます。守屋姓、小澤姓、弓桁姓、野口姓などは西区の特色ある姓といえます。

(5) 本郷西の古地名

以下見ていく古地名は、現在の本郷西区の地域に限定して取り上げていきます。

4. 本郷西区の古地名

(1) 上新田（かみしんでん）

新田開発により新しく田が造成された地域です。江戸時代に入ると戦乱も収まり、積極的に耕地拡大や収量増加をもとめる動きが見られ、本郷地区もたぶんこの時代に開墾が進んだものと思われます。山中豊平（天保7年没）の「遠淡海地志」には、本郷村の小字として上新田は、中村、カマイ、下新田などとともに登場しています。原野谷川の東西に民家が分かれています、西側は寺田村・幡鎌村、東側は桑地村にそれぞれ接していました。



寺島から南をのぞむ

(2) 大石（おおいし）

大きな石・岩があるために名付けられるようですが、こと地区には明治はじめ頃までは大石姓の住民が住居を構えていました。現在は田畑となって民家はありません。この大石や又太郎の地区は、原野谷川流路の関係もあり、豪雨発生時に頻繁に破堤しました。たとえば明治30年（1897）9月、豪雨により所々に破堤するが、なかでも大石村樋近くで堤防が崩壊し洪水は本郷村へ流れ込み、82軒が浸水しました。のち大正末年に又太郎に東西の堤防が築かれる背景です。



バイパスから北を見る

(3) 又太郎（またたろう）

開発者の名前に由来するのでしょうか。地元では「またたろう」と発音し、田畑や宅地だけでなく、池島フーズのある山の上まで広い範囲を含んでいます。ここには、江戸時代に秣場、明治以降は財産山が遊家にかけて存在しました。この山には、ぼんでん山（梵天山）やいなり山（稻荷山）と呼ばれ地域があり、梵天は墓地に由来するものともいわれ、現在池島フーズの駐車場に移された墓があります。写真は現在の上川原組ですが、真ん中の道路には昭和40年代まで高く洪水対策用の堤防が築かれていました。



池島フーズへの登り坂から西を見る

(4) 切山（きりやま）

お茶の林園から池島フーズに登っていくと、又太郎地番の所々に切山と表記された地名（小字）が存在します。文字通り山を切り開いた所という意味でしょうか。もともと切＝キリは開墾の意味があるといわれ、開墾の古い用語には、ハリ(墾)、シバ(新発)、カイト(開土)などがあります。現在、日常的にはまったく使われない小字です。



中川原から林園、池島フーズ方面

(5) 向河原（むかいがわら）

本郷西区内における幡鎌地番は、原谷橋の南方、原野谷川に沿った地域に存在します。上川原から流れてくる排水路との間に挟まれた地域で、現在では6軒ほどの民家が建っています。ここは幡鎌村の飛地でありました。その由来は、原野谷川が現在より東を流れていたころ幡鎌地内であったものが、流路が西にずれたため本郷地内に残ったことによるのでしょうか。



原野谷川堤防より北を見る（水路の左）

(6) 中川原（なかがわら）

川原とつく以上、原野谷川の川原であったころの名称が地名化したものです。この地には権兵衛という小地名があり、掛川誌稿の本郷村に「弓削田氏 長福寺記ニ、弓削田八郎、退テ当郷ニ居ル、願主トシテ鐘ヲ鑄ルコトアリ、此後権兵衛ト云人アリ、今ニ椎原嶋権兵衛堰等ノ名残レリ、子孫アリ」とあることに関係するものと思われます。中川原には弓桁姓が多くみられる。地区内には信州街道、秋葉道が南北に通る、人家の密集地帯で、明治はじめ中川原には21軒が確認されます。



天浜線から東を見る

(7) 東坪（ひがしつぼ）

西坪とともに条里制の遺構と推測されます。近世とともに、ここに屋敷を構えたのが小澤八太夫家であり、広大な敷地に本宅、長屋門、土蔵が軒を連ねていました（1869 坪＝6 反 3 畝 9 歩）。明治に入り小澤家の本宅は原谷尋常小学校の校舎、村役場として利用されたが、明治 35 年に同じ場所に小学校が新築されました。現在、小澤八太夫家屋敷跡碑と昌安神社が残されています。明治はじめの「東坪」は宅地が 6 反 3 畝 9 歩、田が 9 反 1 畝、計 1 町 5 反 4 畝 9 歩となります。



小澤八太夫屋敷跡と昌安神社

(8) 西坪（にしつぼ）

東坪の西側の部分で、原谷駅やいわゆる本郷銀座など原谷村の中心街として最近まで商店などが立ち並んでいました。西坪の区域は、天浜線の西側まで含まれ、ここには清水屋と呼ばれた原谷村長小澤金作家、その南に五軒が並ぶ五軒丁がありました。また平尾修二氏宅は「井ノ口」と呼ばれ、用水路入口であれば、原野谷川の流路も時代によって大きく変わってきたことを推測させます。



駅前から北を見る

(9) 清水（しみず）

現在の原谷浄水場周辺であり、豊富な水、わき水で知られる場で現在も原谷浄水場があります。大正末年の「原野谷川河川改修に伴う附帯工事」（1925 年）では、字清水地先の樋管改築工事において「湧水多く水替へ器械ポンプ借用…」などと工事が難航した様子が記録されています。また小澤家と並び明治初期に戸長をつとめた国井家の屋敷があり、豊かな水を利用した酒造りが行われていました。小澤安男氏宅は「しもしょうじ」と呼ばれます。明治中期の地図には清水を東西に横切り町屋、中川原へ通じる道がありました。



原谷浄水場

(10) 町屋（まちや）

町屋は、町にある民家、町に建つ商家および職人の住まいという意味を有します。それ故に本郷村の中心として家が建ち並んでいた地区として捉えることもできます。また町屋＝待ち屋ならば、秋葉道が原野谷川を越える渡場跡として捉えたり、水運を使って物資を南方へ運搬する船着場があり、それに関係する地名と推測できます。すぐ南に中村という字もあり、本郷村の中枢がこの地域に存在したと考えることもできます。



天浜線ガード西側から南を見る

(11) 町屋川原（まちやがわら）

原野谷川に接した地区で、町屋の北に位置する。天浜線のなかった時代には、すぐ北に中川原が続いており、もともとは原野谷川の川原が連続していた場所であったのでしょう。中川原で述べた権兵衛という古地名もこの町屋川原まで続いていたものと思われます。明治初期には6軒の民家が存在していました。



天浜線ガード西側から西を見る

(12) 柳原（やなぎはら）

清水の南、原野谷川に近い地区のことです。現在は団地が造成され、柳原組が出来ました。もともと柳の木が生い茂っていたことから呼ばれ地名化したものと推測されます。団地ができるまでは民家はなく田畑だけでした。写真に見える山崎接骨院とその北側に隣接する住宅地です。



学習センターから見る西北方面

(13) 宮坂（みやざか）

八幡神社への坂道ということでしょう。神仏習合の江戸期までは八幡宮とか五所大菩薩と表記され、明治の神仏分離により八幡神社と呼ばれました。掛川誌稿には、「山林ノ中ニアリ、村中祭ル、除地四石五升アリ、昔原氏全盛ノ時創立セシモノニヤ、天正十五年ノ金鼓アリ、願主小沢八郎四郎ト刻セシハ、今ノ庄屋八太夫カ祖ナリ、是原氏断絶ノ後ニ係レルモノナレハナリ」とあり。幕末、神主の小澤力は遠州報国隊に参加しています。



八幡神社

(14) 宮西（みやにし）

字の如く八幡宮の西方の地域にあるため宮西と呼ばれたものと思われます。ここには「神主屋敷」があったようで、山崎常磐の調査書には、「八幡神社ノ西北行者山へ行ク途中、今開墾畑ニナリ居ル所昔八幡社神職ニナリシ原氏ノ宅址ナリト云、神主屋敷ト云、開墾畑ノ北少ク下リタル所ニ墓石一ヶ存ス、表面及左右ニ数人ノ戒名刻シアリ、其中一行ノ下ニ享保十二年十一月十九日ト刻セルアリ、数人ノ墓ヲ後ニ改築シタモノナルベシ」とあります。現在墓は池島フーズの駐車場の南にあります。



八幡神社から西方を見る

(15) 古城（ふるしろ）

掛川誌稿には、「今里正小沢八太夫ナルモノ、宅後ニ古城ト呼フ所アリ、溝壘ノ遺趾尚存ス、其上ヲ上（ウヘノ）山ト云、又東屋敷下屋敷ト云所アリ、下屋敷ノ山ニハ古墳墓多シ、是皆原氏累代ノ古墟ニシテ、三百年外ノ事想像ルヘシ」とあり、この周辺に原氏関係の遺跡と地名が集中しています。また内山真龍の「遠江国風土記伝」には「本郷 城跡一所あり、今人構と謂ふ」、山中豊平の「遠淡海地志」にも「カマイ」が登場します。構＝カマイは、原氏居館＝古城のことか。昔は居館跡の輪郭がよく残されていました。



八幡神社への登り口に見える

(16) 井戸沢 (いどさわ)

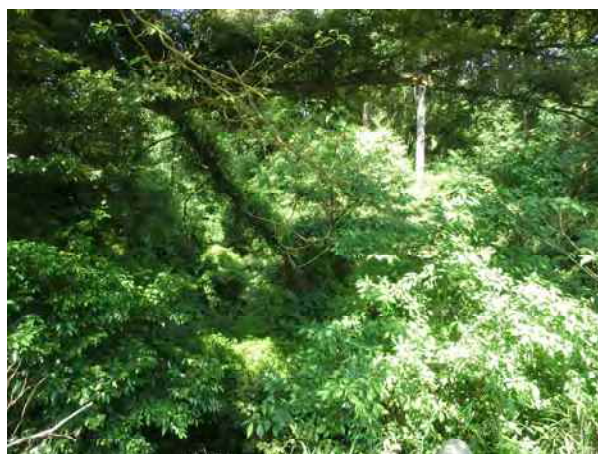
八幡神社の東北に井戸沢と呼ばれる地名があり、現在は鬱蒼とした草木で覆われています。湧き水などの水源地があったのではと推測されます。水は南の小さな池に流れ込み、さらに本郷地区の中心へと繋がっています。八幡神社の境内地でしたが明治とともに上知され士族に払い下げられました(田 8 畝余歩、蜷川親義。宮西・宮坂の境内地も同じように払い下げられた)。この地名も現在ほとんど使われなくなったものといえます。

(17) 上ノ山 (うえのやま)

前述の山崎常磐の調査によれば、「本郷古址ノ内掛川志ニアル上(ウヘ)ノ山ハ今牛乳屋宅ノ西北一段高キ平地ナリ、今モ小字上ノ山ト云ヒ俗ニハ上ノ屋敷トモ云フ由土人ノ言ナリ」とあり、上ノ山＝上ノ屋敷があったことがわかります。また「掛川誌ニ云フ東屋敷、下屋敷ト云フ所ハ今知ル人ナシ」と昭和初頭には地元においてもその所在が不明確となっていたようです。ただ長福寺石田住職より、本郷東大草氏の屋敷裏あたりは今でも下屋敷と呼ばれていることをご教示いただき、上ノ山の南＝奥ノ街道あたりに下屋敷があったものと推定されます。

(18) 古戦 (こせん)

株式会社トーカイの横の道を上っていくと遊家につながっています。この東、つまり遊家方面からの守りは、上ノ屋敷、下屋敷、東屋敷などを配置して固めたのではないかと思います。明応3年の「北条早雲、遠州に乱入、放火殺戮・・・」に係わる戦闘がこの近くで行われたことが想起されます。それ以外でも激しい攻防戦はくり返されたはずです。古戦の地域も明治はじめには宮坂の一部も含めて広く捉えられ、9軒の民家が記録されています。



八幡神社社殿から東を見る



古戦あたりから北を見る



トーカイ近辺 遊家への道

(19) 北ノ谷（きたのたに）

上ノ山の北方を北ノ谷と呼びます。ここに設定された本郷最終処分場は、昭和 63 年に埋立が完了し農地に復旧され茶園が造成されましたが、平成 29 年 2 月～3 月、跡地の水処理施設が解体されました。その西に伝四郎原と呼ばれる土地が続きます。伝四郎という名前について詳細は不明ですが、その土地を切り開いた人物名であろうかと思われます。現在では茶園が開かれています、その西北が八幡神社となります。



古戦の少し北から西方を見る

(20) 中村（なかむら）

郡や荘園の中心や中心村落が「中村」と呼ばれたこと、もしくは分村に対する本村を意味する地名だといわれます。全国的に存在する地名だが、本郷の場合どのような歴史的由来があるのか知りたいところです。ただ昔は原野谷川の水運を利用して荘園の年貢や物資が運搬されたであろうから、川沿いのこの地区が重要な役割をしていた可能性はく、川を挟んだ西山には市場があることから商業との関わりを推測できます。現在の原谷地域生涯学習センターとその西側から南区の住宅までを含む地域です。



原谷地域生涯学習センター

小学校の歩みを古地名＝小字名から見ると…。

近代の学校は明治5年(1872)の学制からスタートしました。各地に学校設立が奨励され、「国民皆学」のスローガンのもと子どもたちは学校に通うことになります。しかし明治はじめの頃は、校舎を新築したり学校を維持するだけの財政力のある村も限られ、加えて勉強など必要ないという昔からの考えも広くあり、なかなか校舎新築や就学率の向上は進みませんでした。そのため寺院などを仮の校舎として使うことが一般的で、本郷村でも宮坂の法珠庵や古城の長福寺が校舎＝校堂として使われました。

ようやく明治13年、本郷村は学校新築計画を立てます。宮坂の一反歩の土地に500円を集めて校舎を新築しようとしたのです。翌明治14年11月から新築工事に着工し、明治15年(1882)11月15日に完成しました。校地はこの間、どのような理由か分かりませんが宮坂から味噌野に変わり、集めた資金も千数百円に膨れあがりました。完成した校舎は、校地が8畝4歩＝244坪ほど、校舎は10間と5間の50坪の規模でした。地域の期待を一身に集めて新築された本郷学校の校舎でしたが、それから二年半後の明治18年5月25日に焼失してしまいます。原因は不明です。村や地域にとって悲しく不幸なできごとでした。

明治22年(1889)に新しい原谷村(本郷村、細谷村、幡鎌村、西山村の四か村)が誕生し、原谷小学校は宮坂の法珠庵を仮用してスタートします。しかし財政事情や位置問題のため新しい校舎を建築できず、明治23年には東坪の小澤周平氏の屋敷をそのまま買い取って校舎に転用し授業を行うことになりました。それから13年後の明治36年ようやく校舎を新築することができました。次ページの写真は、明治43年(1910)に校舎を増築したときの落成記念写真ですが、ここには小澤家屋敷の外にあった大松＝門松が写っていません。下に大正3年(1914)の卒業記念写真帖から門松を紹介しておきます。

昭和47年(1972)に原谷小学校は、それまでの東坪から現在の小学校のある在家田の地へと移転していきます。

※参考：旧原谷村役場文書、『函右日報』明治15年12月2日、4日外



※門松の南側は水田でした。
※中央の人物(教員?)の側に自転車が写っています。

大正3年3月『原谷尋常小学校卒業記念帖』より

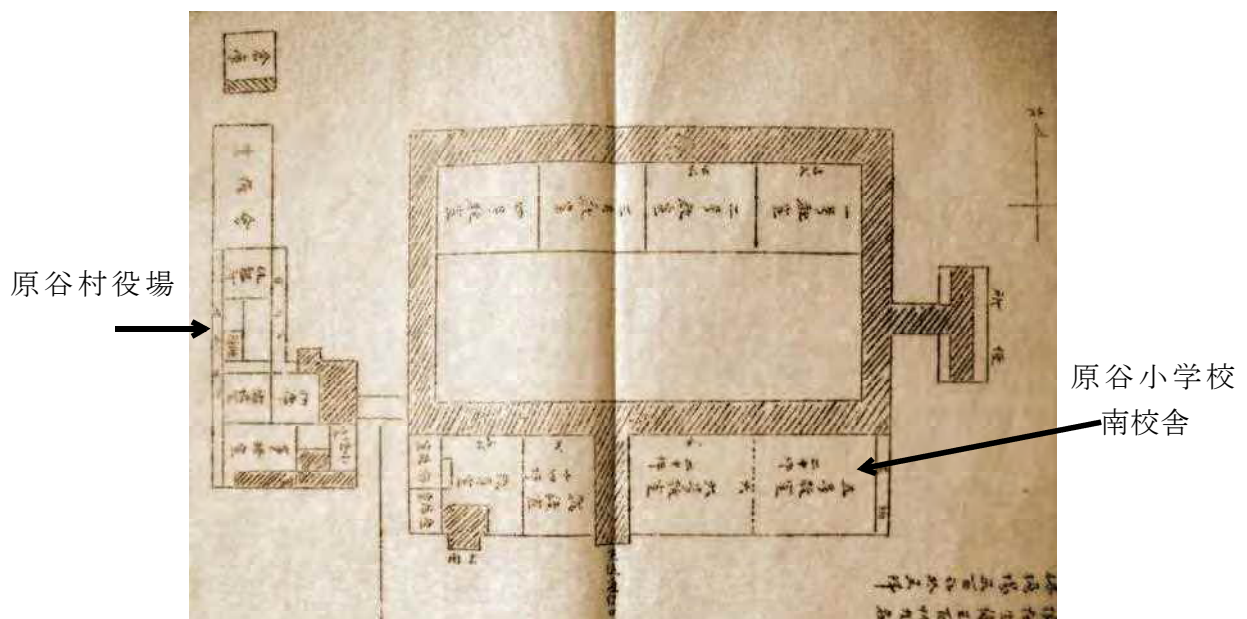
原谷小学校落成式（明治 43 年か）の写真 小澤家文書



役場と小学校校舎の平面図

左側（西）にある建物が原谷村役場です。

南校舎が明治 43 年（1910）に完成し記念式典が行われました（上の写真）。



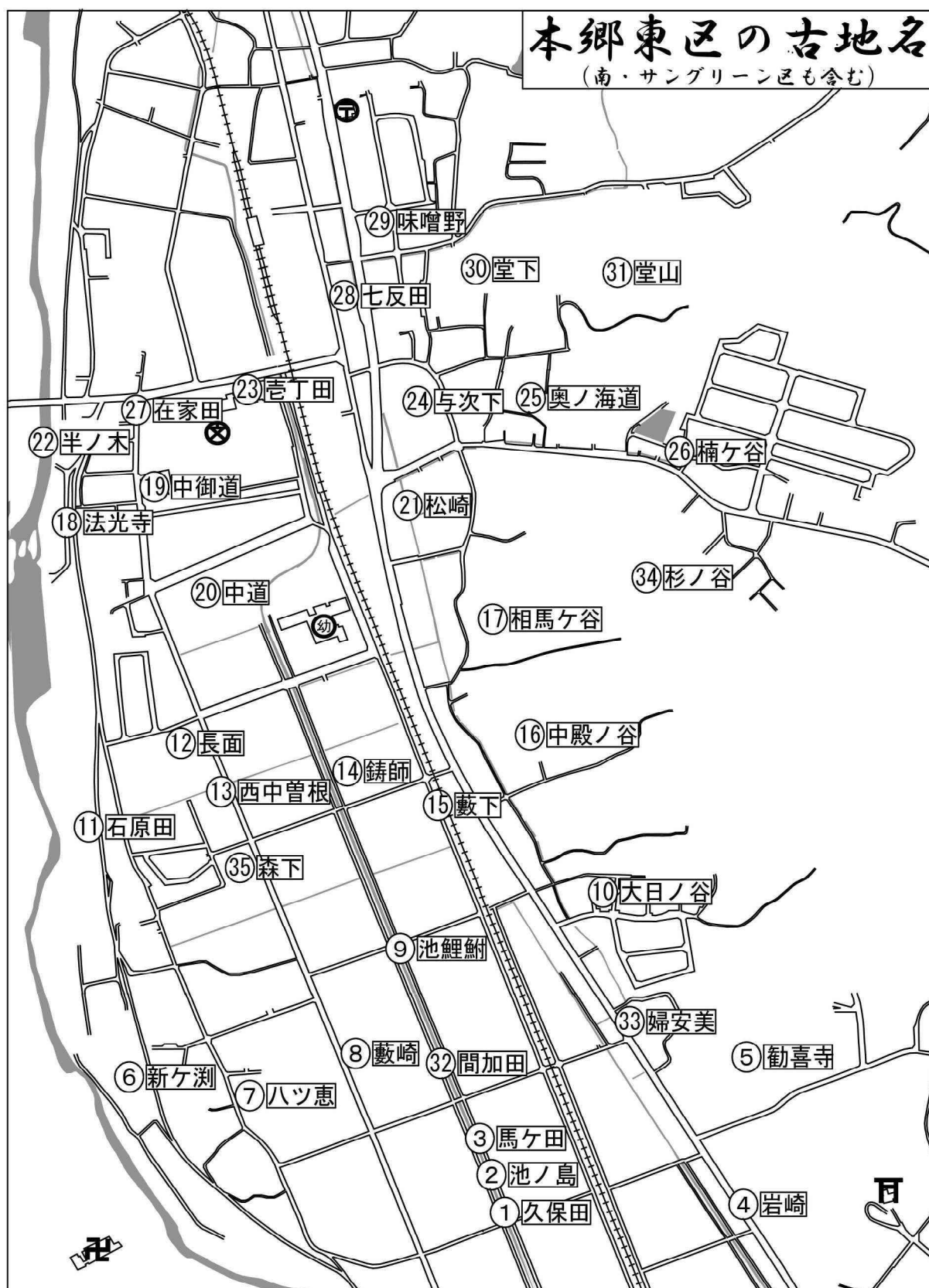
本郷東坪にあった原谷小学校と門松^{かどまつ} (昭和 45 年<1970>)

- ・ グランドの中央にあるのが門松です。何故グラウンドの真ん中にあるのでしょうか？ 61、62 ページの写真を参照するとグラウンドが南側、西側に大きく広がった結果だということに気付かれることでしょう。つまりグラウンドが拡張されることで門松はグラウンドの中央に取り残されていたのです。
- ・ 明治 15 年（1882）に新築された本郷学校はこの写真右下の住宅地（校舎の南側）辺りと推定されます。
- ・ まだバイパスが通っていません。小学校の周辺には田畑が広がっています。



第四節 本郷東区の古地名考

1. 本郷東区の古地名（小字）地図



2. 本郷東区の古地名一覧（南区・サングリーン区を含む）

番号	古地名	読み方	現在組	説明
1	久保田	くぼた		窪(くぼ)とも読む。窪地であった所か。今のジャゴジの南東部の田んぼ。
2	池ノ島	いけのしま		久保田の北側。池があり島状態になっていた所もあったのか。
3	馬ケ田	うまかだ		馬を用いて田んぼを耕したところなのか。
4	岩 崎	いわさき	16組	白い岩が飛び出ているところなので。
5	勸喜寺	かんきじ	11組	今は原野です。中世期に勸喜寺という寺院があったのか。
6	新ケ渕	しんがふち	12組	今の下新田である。渕があり、井戸の地下水もあり水量が豊富。
7	八ツ恵	やつえ		昔は道があり、「法多山」などと書かれた石の道標があった。
8	藪崎	やぶさき		ここらの溝や川で「かいんぼり」などして魚など取ったと言う。
9	池鯉鮒	ちりゅう		下新田への途中の窪。今の池鯉鮒橋がある辺りで池があった。
10	大日ノ谷	だいにちのや	11組	お大日様(大日如来仏)を祀っている。石で造られている。
11	石原田	いしはらだ	13・14組	昔の原野谷川の河川敷か。とにかく石が多い所です。
12	長面	ながおもて		今は田圃だが、耕作するには土質や地盤が悪いところだ。
13	西中曽根	にしなかそね		原野谷川の流れに沿ってできた土手のような所か。
14	鑄師	いもじ		鑄物を作った場所なのか。このあたりの土は赤粘土質です。
15	藪下	やぶした	10・11組	今の7イレブンがある辺り。この辺りまで藪や葎が茂っていた。
16	中殿ノ谷	なかとのや	10組	十郎さまと呼ばれる宝篋印塔の中世の墓あり。今10組で祀る。
17	相馬ケ谷	そうまがや	8組	原氏の時代に馬の調教などを行ったりしていたところか。
18	法光寺	ほうこうじ	南区	ここに中世期において法光寺という寺院があったのか。
19	中御道	なかおみち		いろいろな中道のある中の主流の道が通っていたところか。
20	中道	なかみち		昔はこの地の中を東西南北に通じる様々な道があった。
21	松崎	まつさき		この地に目印となるような松があったのか。
22	半ノ木	はんのき		春ノ木ともいう。桜などの木か。稲を架けるハゼの木の事か。
23	壺丁田	いっちょうだ	9組	昔は2組。今は「華月苑」がある辺り。
24	与次下	よじした	1・2組	旅人の泊まる宿屋などがあった所か。「次」とは旅の宿の意。
25	奥ノ海道	おくのかいどう	6組	海道というからには海に通じる道か。塩の道なのか。
26	楠ケ谷	くすがや	7-1・2組	大きな楠木がこの谷間沿いに沢山茂っていたのではないか。
27	在家田	ざいけだ		今の原谷小学校の辺りで、天浜線の東側も含む。
28	七反田	しちたんだ		新しくできた住宅団地の辺りです。昔と大きく変わっています。
29	味噌野	みその	17組	以前は家はなかったが、今は16戸ほどの住宅地になっている。
30	堂下	どうした		照月寺の周辺です。一部は民家ですが藪や畑等になっている。
31	堂山	どうやま		墓地がある所。ここは昭和初期までは火葬場でした。
32	間加田	まかだ	幡鎌地番	江戸期は横須賀藩の領地。なぜ幡鎌地番になっているのか。
33	婦安美	ふあみ	幡鎌地番	ここも江戸期は横須賀藩の領地。名前からして荘園地か。
34	杉ノ谷	すぎのや	幡鎌地番	奥ノ海道の遊家に通じる山ぎわの所。
35	森下	もりした		「もりした」とは、とおどの森の下という意味です。

3. 本郷東区の古地名考（現在の南区・サングリーン区を含む）

(1) 本郷東の地形上の特色

本郷東は、掛川市の西部にあり南流する原野谷川の東岸に位置しています。原谷の地形上のほぼ中心部に位置し戸数は原谷最大の300戸余です。又、掛川駅を起点とした天竜浜名湖鉄道（旧国鉄二俣線）が本郷の地を南北に縦走しています。電車からは本郷東の豊かな田園風景が見られます。春の時期には、本郷東の名物である約1,000メートルの美しいソメイヨシノの桜並木が車窓から見られます。



中殿谷から見た本郷東地区

(2) 古文書等にみられる本郷東の歴史

本郷は佐野郡幡羅郷（和名称）と言われていました。本郷には里長が住んでいたのでこの名が付いたとの由来があります（『掛川誌稿』）。また、この地は古くは安里村とも称されていました（『遠江国風土記伝』）。中世期には原田庄の中心地でしたが、この本郷の地は荘園問題で中央政権とたびたびもめていました。

(3) 本郷東には秋葉路や塩の道等の人々の往来の多い街道筋であった



本郷には、廃寺となった南城山照月寺がありました。照月寺の裏手には、堂山と言われる本郷領主だった原殿墓があります。原氏の出自である小澤氏の歴代墓所もこの地の最上段にあります。江戸期に秋葉信仰につながる全国からの「秋葉山詣で」で賑わう秋葉路がありました。秋葉山への常夜灯が本郷の街道筋に残されています。当時の姿を思い浮かべます。また、この道は「塩の道」とも呼ばれ、多くの海の産物が本郷東の街道筋を通り信州路へ運ばれていました。さらに、この地は東海道の裏街道として原泉の大尾山の麓を通過して川根筋を上り駿府にも通じていました。このように本郷東は多くの往来の人々が通過する街道筋として発展してきました。本郷東には当時を偲ぶ屋号「藤屋（旅籠）」「饅頭屋」等の家がありました。

(4) 本郷東の特色ある主な古地名（抜粋）

- ①勸喜寺 かんきじ 今はこの地名にある寺は存在しません。東寺百合文書には勸喜寺の名が出てきます。鎌倉期に存在していたことが東寺百合文書に記されています。昔の隆盛が偲べれます。
- ②池鯉鮒 ちりゅう 近くに伝説の地「とうどの森」があります。ここには八幡神社の別社があり、祭典では御神輿が渡ってきました。御神輿を洗った場所がこの池でした。
- ③大日ノ谷 だいにちや 大日如来を祀っていた地です。中世期の長福寺守り本尊は大日如来でした。この事は松堂高盛の語録に出てきます。今でも大日様を祀る組が本郷東にあります。



十郎様(原一族の中氏のものか)

力者の荘園地でした。そして婦安美はなぜか幡鎌地番です。

⑦堂山 当地には阿弥陀堂があったと推察されます。今はその痕跡としての碑があります。

当地は墓地になっています。少し前までは埋葬地でした。

⑧新ヶ渕 別名「下新田」です。今は東区 12 組と呼ばれ明治初期に本郷地から何軒かが移り住みました。鈴木、佐藤、竹下、豊田といった家々が最初の入居者たちでした。江戸時代までは人が住めない沼地状態の湿地でした。

(5) 本郷東の苗字ベスト5

本郷東には原谷地区にはあまりない苗字が見られます。豊田姓と毛利姓です。まず豊田姓の家は昔からある旧家が多いです。そして豊田勝義家には裏山敷地に「お高根さん」という氏神様を祀っています。お高根山とは藤枝の最高峰の山のことです。戦国期には今川支配が当地に続きました。今川の重臣の中にこの豊田氏がいたのでしょうか。その末裔でしょうか。

又、毛利と名乗る苗字の家が堂山周辺に見られます。原氏は戦国期に中国地方の毛利氏を頼って落ちのびました。その事に起因するのでしょうか。まだまだ謎はつきません。さて、本郷東の苗字ベスト8は右表の通りです。

本郷東区の苗字の多い順 ベスト8					
1	豊田	21戸	5	竹下	10戸
2	山崎	17戸	6	松浦	9戸
3	佐藤	15戸	7	山本	7戸
3	鈴木	15戸	8	毛利	6戸

(地域電話帳調べ H23. 2. 24)

(6) 本郷東の長老に聞く

平成22年の7月11日(日)と8月15日(日)の2日に渡って、本郷東在住の長老に本郷東区の古地名の由来やその場所や様子をお聞きしました。お名前は豊田隆氏(10組)、豊田忍氏(12組)、鈴木嘉久氏(12組)です。長老の方が語る戦前の本郷東の様子がわかるお話が聞けました。特に、殿谷城のあった所が読売のゴルフ場になり、本郷東の山間の様子が変貌したことが大きいことが分かりました。



長老からの古地名の聞き取り

4. 本郷東区の古地名

(1) 久保田 (くぼた)

この地は右写真の電信柱の向側の地です。原野谷川が大きくカーブした「しゃごじ」といわれるしゃもじのような形に湾曲したカーブをしている所の地です。昭和初期までは、台風などの豪雨災害の時にはよく堤防が崩れて氾濫した地です。そして氾濫した土砂などがたまったところでもあります。久保田とは窪田とも書きます。昔は窪地のような地だったと推察できます。又、この近くに「山伏塚」と言う地名も残っています。



原野谷川堤防「しゃごじ」沿いの所

(2) 池ノ島 (いけのしま)

池ノ島は(1)の久保田の北側部分に位置しています。電信柱よりも手前の大部分が畑になっている所です。この地は原野谷川が大きく迂回しており、古代よりこの地は流れがよく変わったことが予想されます。この地は大きな池状態となっており、池の内部に島状となった陸地があったような所でしょうか。地形が推察できるような地名です。だから「池ノ島」と呼んだのでしょうか。地名から昔が偲ばれる所です。現在は水田のはるか向こうにインフラテック(株)がみえます。



池ノ島の東側

(3) 馬ケ田 (うまかだ)

この地は馬に関連した所と考えられます。その名の通り、馬で耕した田が広がっていたところではないかと推察されます。現在でも広々とした水田が広がっています。この写真は西から東に向けて撮影しています。前方には殿谷城跡が見えます。この地周辺には(1)と同様に修験者の塚(山伏塚)があります。興味を誘う地名である。この地の南側(細谷区)に「土狗在家」という奇妙な地名があります。



原野谷川堤防「しゃごじ」沿いの所)

(4) 岩崎 (いわさき)

今の本郷東区 16 組のあたりです。地元の長老のお話によると、白い岩肌が出ている所だよと教えていただきました。目印としても岩肌が出ていてわかりやすい所です。現在は、山肌には大きな木々が茂っています。原氏の活躍していた室町以前の時代には^{とりで}砦のような所であったかと思います。上に立てば周囲が見渡せる良き地であったと推察されます。ここから奥は「殿ノ谷^{とんのや}」といわれる所で細谷地区になります。まさに、戦国領主の原氏がいたところです。岩崎は地名のように岩肌が玄関砦のような役目をしていた地と思われる。



インフラテック (株) の入り口

(5) 勸喜寺 (かんきじ)

本郷東区の 11 組のあたりです。石油スタンドから入る所に (4) の「岩崎」があり、少し進んだところに「インフラテック (株)」の工場があります。この場所に中世の寺跡「観喜寺」がありました。「東寺百合文書」(国宝)の中にも勸喜寺の文字が見られ、勸喜寺という名のお寺があったと思われます。その地名は今でも小字として残っています。この奥が^{とんのや}「殿ノ谷」(細谷区)で領主の館が有り、そこに通じる途中にこの寺院があったと推測されます。



インフラテック (株) 工場周辺

(6) 新ヶ渚 (しんがふち)

下新田ともいい本郷東区の 12 組です。現在は 26 戸あり、本郷東地区の最大戸数の組です。昭和 30 年代は 12 戸でした。新たな住宅建築敷地の余地もあり、まだまだ増えそうな勢いです。当初は渚という地名からも渚状のところと推測されます。最古の旧家である鈴木嘉久宅には、昔から屋敷内に「ナマズ」^{まつ}祠を祀っています。昭和初期くらいまでは、川の反対側(西山)の向川原と組同士の会合を開いていました。12 組とは川に仮に架けた一本橋でつながっていました。



下新田といわれる地区 (本郷東区 12 組)

(7) 八ツ恵 (やっえ)

向こうに見える集落は 12 組（下新田）です。手前は「防の窪」と呼ばれる幹線排水路が流れています。池鯉鮒橋から見た水田が「八ツ恵」となります。恵みという文字から、肥沃な土地だった様子がうかがわれます。この排水路の両サイドの土手は地元民の散歩コースになっています。東側の土手には 1,000 メートルほどの「そめい吉野」の名物桜並木になっています。春の天浜線電車が走る田園風景と咲き誇った桜並木の風情は圧巻です。



ちりゅうばし
池鯉鮒橋から見た水田

(8) 藪崎 (やぶさき)

この橋は「藪崎橋」です。この周辺は水田地帯ですが、地名からこの辺りには藪があったようです。窪地のような水辺となっていて、ところに背の高い葦が茂っているような光景が目につきます。最近、この辺りの一部の田んぼが廃田となっています。そこでは人の背丈以上の藪のような葦が生い茂った状態になっています。「藪崎」とはそんな光景が見られた場所だったのでしょう。



藪崎橋から見た田園光景

(9) 池鯉鮒 (ちりゅう)

この地には鯉や鮒が沢山いた池があったと想像させる地名です。古き時代においてこの池では「とうどの森」の祭祀の時には汚れた体を清めたり、御神輿を清め洗ったと推測されます。日照りが続くと雨乞いの神事もあったようです。近辺の田んぼへの灌漑を行っていたと思われます。同じような事が愛知県の知立（江戸期は池鯉鮒）で見られたと記録に残されています。写真の前方には下新田集落（12 組）が見えます。その向こうの小山の部分が吉岡春林院古墳です。



12 組から東に位置する水田地帯

(10) 大日ノ谷 (だいにちのや)

県道沿いの永川モータースの所から東側の山に向かって両サイドに広がった住宅地に成っているところです。以前は「下の谷組」と呼ばれていたところです。お大日様といわれる大日如来像は現在は長福寺の薬師堂に移転しています。ここには戦国期の墓と思われる数体の石仏が 11-1 組の斜面の裏山に祀られています。そして毎年、11-1 組で縁日には供養祭が行われています。又、大日ノ谷の行き当たった所は読売ゴルフ場になっています。高所から振り返ると、西方に下新田の住宅地や春林院の古墳山が見えます。



住宅地が道路の両側に広がっている。

(11) 石原田 (いしはらだ)

前方に見える住宅地（リバーサイド）が石原田です。以前は、原野谷川がこの辺りを流れていたところでもあります。多分、河川敷になっていたところです。とにかくこの地は古代の頃には河川敷で石だらけの水田地帯となっています。農業するのには適していないところでもありました。現在は、昭和 40 年代頃の高度経済成長期に新興住宅団地として 50 軒ほどの家が建てられました。東区 13 組・14 組と言われる地域ですが、住宅の堤防側は原野谷川になっています。



現在はリバーサイドと言う住宅地

(12) 長面 (ながおもて)

土質や地盤の面は水はけの悪い所です。よくトラクターがぬかるみから出られなくなっている様子が見られました。その水田の向こう側は石原田や本郷南区の住宅が並んでいます。さらに本郷南区の地は法光寺と言われる地名が残っています。今は寺院があったという痕跡は何もなく、想像し得ない光景が広がっています。



農道の東側の水田地帯の所です

(13) 西中曽根 (にしなかそね)

長^{ながおもて}面のさらに東側に位置する所です。河川が氾濫したとき、自然に堤防などが形成された場所が「そね」と言われています。この写真の所は現在は幹線排水路（防の窪^{ぼうくぼ}）があり「西中曽根橋」という名が付いた橋があります。この辺りも低地になったところであり、古代以前には、防の窪^{ぼうくぼ}の水位が上がり氾濫があったりして堤防状態ができたところでしょうか。今でも低地であり水が多く、防の窪という幹線排水路になっています。



前方にこども広場あんりが見える

(14) 鑄師 (いもじ)

珍しい呼び名の地名です。西中曽根のさらに東側部分に当たる所です。珍しい名前の地名めいです。近くの踏み切り板には「鑄師」と書かれています。この辺りは鑄造物に関係する土質なのでしょうか。この辺の田んぼからは赤黒土のような粘土質の土壌がとれます。この場所で、鑄物を作ったのでしょうか。武器類か、それとも鍬や鎌のような農具類なのか。とにかく興味がそそられる地名です。近くには鑄造などに携わっている豊田精工（株）があります。



北方にこども広場あんり

(15) 藪下 (やぶした)

今の 10 組。昔はこの辺りまで藪が迫っていたところが古地名から推測できます。南方にはヒマラヤシーダーの巨木が見えます。藪下という今での笹藪のような感じでとらえる方がより近いと思います。この藪下という地名^{あし}がついた時代には、やはり背丈が高い葎のような笹藪状態のようなものが広がっていたと推察されます。このような光景がずうっと南まで続いており、原氏の時代には、城を守るような役目をしていたと思われます。



西中曽根の東に面したところです

(16) 中殿ノ谷 (なかとのや)

この写真は宝篋印塔ほうきょういんとうです。この地には明治期の頃まで「宗塔庵そうとうあん」という寺院が存在していました。現在はこの供養塔だけがひっそりとたたずむだけです。この供養塔は東区の10組の人たちがお坊さんを招いて毎年4月の第1日曜日にお祭りをしています。今は森町の日蓮宗の僧侶がお経を組の人達と唱えています。なぜ日蓮宗なのか分かりません。この塔を地元の人たちは「十郎様じゅうろうさま」と呼んでいます。十郎様とは曾我兄弟の曾我十郎(兄)のことです。でも、原氏の墓と考えたほうがよいかもしれません。中殿ノ谷という地名から原氏のものとも考えられます。その子孫は、岸和田藩の主席家老をつとめた人につながります。地名「中殿ノ谷なかとのや」はロマンを誘う地名です。



十郎様 (曾我十郎の供養塔といわれる)

(17) 相馬ヶ谷 (そうまがや)

現在の8組です。中世時代の鎌倉や室町、また戦国期にここで原氏の武将達が馬術訓練や馬を飼っていたところではなかったと思われます。今は家がなく、道の左側山裾に佐藤姓の墓地群があります。この谷の入り口の所は、以前は本郷東公会堂があったところです。写真からは馬の調教場だった平地のようにも見えます。



この谷の奥は読売ゴルフ場

(18) 法光寺 (ほうこうじ)

今は本郷南区になった所です。右の写真は原野谷川の堤防から撮ったものです。ここには以前、掛川市の雇用促進住宅が何棟か建っていましたが、現在は取り壊して平地になっています。地名は「法光寺」と呼ばれ、この地には、中世期以前に法光寺という寺院があったのではないかと思います。それらしき寺院の古文書一つありません。最近近くには鉄筋の雇用促進住宅が建ちました。



原野谷川の堤防から撮った所

(19) 中御道（なかおみち）

中道に「御」の字があるので、神社仏閣などに通じる道があったかもしれません。東方の本郷地域から(18)の法光寺に渡ってきた道なのかもしれません。または「とうどの森」へ通じる道だったのでしょうか。「御」の字が気になります。今、この辺りは市の雇用促進住宅が新しく何棟かでき、それに伴う原谷小学校のグランド拡張や南区公民館などが建ち大きく変貌整備された地域です。この地には、以前は本郷保育園がありました。



手前右側が本郷南公会堂

(20) 中道（なかみち）

今の「こども広場あんり」から雇用促進住宅地辺りです。数年前と比べて大きく一変した地域です。隣接して原谷小学校もありこの近辺は文教地域になっています。今後も大きく住宅地等の変貌しそうな感じがします。地名からみて昔は田園の中を通る道があったと思われます。ただし、当時の周辺^{あし}の景色は水田や低地に葦などの生い茂った様子が目に浮かびます。



天浜線側から雇用促進団地を見る

(21) 松崎（まつざき）

前方には変則型の四差路の交差点があります。この写真は天浜線の東側から東方面を撮ったものです。交差点や石油スタンドなどが見えます。ただ、天浜線の鉄道がなかった時代には桜木方面からやってくる道がこの辻にでてくる所ようです。ここには一つの目印としての松林があった所ではないでしょうか。今は車の大変交通量が多く昔の様子を想像する事が難しいと感じます。



ガソリンスタンド交差点周辺

(22) 半ノ木 (はんのき)

「はんのき」とは^{はんのき}榛の木とも書けます。この文字をもじった地名なのかもしれません。今は見られなくなった稲刈り期の田圃の「ハゼ」の組み木に使われていたのが「榛の木」とも伝えられています。この辺りのあぜ道などに榛の木が栽植してあったのかもしれませんが。あるいは、さらには文字からは春の木ともつながるといわれています。春の木と言えば「桜」かもしれません。とにかくこの辺りには、春に咲く美しい木があったのだろうか。



原谷小学校の西側一帯

(23) 耆丁田 (いっちょうだ)

以前この辺りには原谷地区の「つるみスター」というスーパーマーケットがあったところです。今は、住宅地や福祉施設に切り替わっています。古地名から分かることは、昔は水田のあったところです。その時代と比較するとこの辺りの風景は様変わりしていると感じます。このような水田の単位を表した地名は条里制の名残^{なごり}かもしれません。とにかくこの地には、古代から人々が住み着き、しかも米作をして生活している進んだ文化の地と考えられます。



天浜線路の東側で(有)モリヤ石材工場周辺

(24) 与次下 (よじした)

(有)モリヤ石材工場の四差路から撮った写真で、北方の方向を見ています。以前は雇用促進住宅があったところですが、その後取り壊され、現在は「かけがわ西の市」が設置され毎日買い物客で賑わっています。与次下^{よじした}という地名の由来は今のところ定かではありません。でも、文字からして「次」とは旅の宿という意味があります。秋葉信仰や塩の道にかかわる多くの旅人が通行しており、一休みしたり宿泊したりができる所だった所かもしれません。



西の市周辺一帯 (変則4交差点付近)

(25) 奥ノ海道 (おくのかいどう)

今の本村産業の近辺が本郷東区 6 組です。この辺りから、遊家の方向に街道筋となっています。特に海と書かれた街道なので、塩の道に關した道筋だと考えられます。さらに、この場合の「奥の」とは海辺から見て奥地で有りさらに奥地である信州路へとつながる意味で付けられたのではないのでしょうか。中世期に勢力があった長福寺や国人原氏の居住する地域への玄関位置でもあった海道と考えられます。とにかく奥地へ通じる道が存在したと言すべき古地名です。



交差点から遊家に向かう街道筋

(26) 楠ヶ谷 (くすがや)

写真の道は本郷と遊家を結ぶ自動車道路です。最近では掛川西郷方面と本郷森町方面を東西を結ぶ幹線道路となり、交通量が多いです。谷筋の向こう側は桜木地区の「遊家」です。昔のこの谷間は、古地名から推測するに楠木があったのでしょうか。今、この地区は 7 組と言って住宅地の増加により 2 組に分かれています。又、高度経済成長期にサングリーンと呼ばれる新興住宅地でもあります。太古は海進がここまでできていたことが分かる貝塚などの遺跡が発見されています。



今の本郷東 7-1 組か 7-2 組の辺り

(27) 在家田 (ざいけだ)

現在の原谷小学校校地の周辺です。天浜線の東側の一部も在家田です。この辺りは地名から田圃^{たんぼ}があり家もあった所だと推定されます。現在は、原谷小学校やあんり園が近くにできました。そして雇用促進住宅地の立て替えに伴い平成 20 年にはグラウンドが拡張しました。お陰でゆとりある学校環境が整いつつあります。原谷小学校も少子化の波で現在は全学年単学級の学校になっています。近年は小中一貫校への話が地域の問題に登っています。新校舎はどこに建設されるのでしょうか。



原谷小と雇用促進団地辺り一帯

(28) 七反田 (しちたんだ)

今の東区 17 組辺りで、西の市がある所から北側が七反田です。以前は雇用促進住宅地であったところでした。古地名の字のごとく、七反の^{たんぼ}田圃があったところではないかと思われます。今は、県道が走っており、ひっきりなしに自動車通っているところです。この県道沿いの原谷地区には3つものコンビニエンスストアがあります（本郷西・本郷東・細谷に1ヶ所ずつです）。近年、新東名インターも森町にあり大変自動車量が多くなっています。



以前は写真の雇用促進住宅がありました

(29) 味噌野 (みその)

今の 17 組辺りで、最近住宅地が多くなってきました。この道路の進む方向には、遊家^{こせん}があります。途中の切り通しの部分は古戦といわれる地名があります。室町期の明応3年（1494）に北条早雲が率いる今川・北条軍が当地になだれ込んできました。当時、当地を支配していたのは原氏でした。原谷全体はこの戦いで大きな痛手をしました。特にそれまでは当地は平和でしたが、長福寺をはじめ農家までもが沢山焼かれてしまいました。そして原氏は以後、それまでの勢いがなくなっていき今川氏に従属することになりました。



写真の道を東進すると遊家に出ます

(30) 堂下 (どうした)

堂山の下に当たる位置がこの名の古地名です。埋葬や焼却したという墓地の近くです。墓地の下と言うことで、この地には新しい住宅が建っていません。この地には堂と言う地名が付きます。この周辺地には阿弥陀堂があったようです。すぐ隣には廃寺となった南城山照月寺があります。原氏に関する城の役目を照月寺はしていかもしれません。遠方には、本郷西区の住宅地がよく見えます。



堂山の東側にあたる所です

(31) 堂山（どうやま）

原氏の遺構が残る関係墓地です。本郷東区だけでなく西区の大半の墓があります。最上段の位置に、小澤八太夫家関係の墓所群があります。写真の手前に見える石碑に「原惣領家阿弥陀堂」という文字があります。この石碑には第 28 代当主の原義一氏や春林院白木和尚の名が見られます。昭和 53 年建立と刻まれてあります。原義一氏 93 歳の時のものです。義一氏は昭和 54 年に亡くなっています。彼の晩年最後の墓碑建設でした。この堂山は昔は死んだ人を火葬したり埋葬したりしていた本郷地区最大の墓地でした。



多くの墓が存在する堂山

(32) 間加田（まかだ）

この地は幡鎌地番です。なぜ、幡鎌の飛び地であるのか詳しくは分かりません。いろいろな説があります。賭け事で当地は幡鎌地番となったという説があります。幡鎌の人がこの地を開墾したという説もあります。とにかく、江戸時代には、横須賀藩に属していた幡鎌です。掛川藩であった本郷の中にある飛び地は謎です。ただ、江戸期の中頃までは原谷の地が幕府直轄の天領であったことにも起因しているのでしょうか。でも、文字から、本郷地の間^{あいだ}に加えてもらった田圃という言い方も考えられます。



幡鎌地番です

(33) 婦安美（ふあみ）

写真の前方に見える右方面の一角です。間加田と同様に幡鎌地番です。なぜかは、前段で述べたので省きます。ちょっとしゃれた地名です。荘園の名残のような地名でもあります。安は安里などともつながる安らかで穏やかな地という意味があります。婦は女性を表す。女性が安心できる穏やかな土地柄のような意味もあったのかもしれませんが。



本郷東区の南側に近い一帯

(34) 杉ノ谷 (すぎのや)

写真後方の山中一帯を指します。今でも杉の木が多く群生している所です。なぜか、この地も「幡鎌地番」です。あらためて、なぜこのような他地区の地番になっているのか考えさせられます。この地の所有者は誰になっているのか。そして誰が実質管理している土地なのかにも興味があります。戦国期、「楠ヶ谷、杉ヶ谷」などは孕石氏の支配地でもありました。



杉ノ谷は幡鎌地番

(35) 森下 (もりした)

前方の木立の見える辺りが森下です。この写真は池鯉鮒橋の所から北西方向に向けて撮った「とうどの森」が見え、周辺は12組や13組の住宅が見られます。中央のこんもりした所が「とうどの森」です。この地は、夏には毎年「^{やぐら}櫓」が組まれ納涼祭が営まれるている地です。又、八幡神社の別社となってもいます。また、この地には有縁無縁の供養碑があり例年、長福寺の住職を招いて供養祭も行われています。その手前の水田の部分「^{もりした}森下」という地名です。この「森」とは「とうどの森」の森から付けたものです



「とうどの森」の隣の水田地帯

第五節 細谷区の古地名考

1. 細谷区の古地名（小字）地図



2. 細谷区の古地名一覧

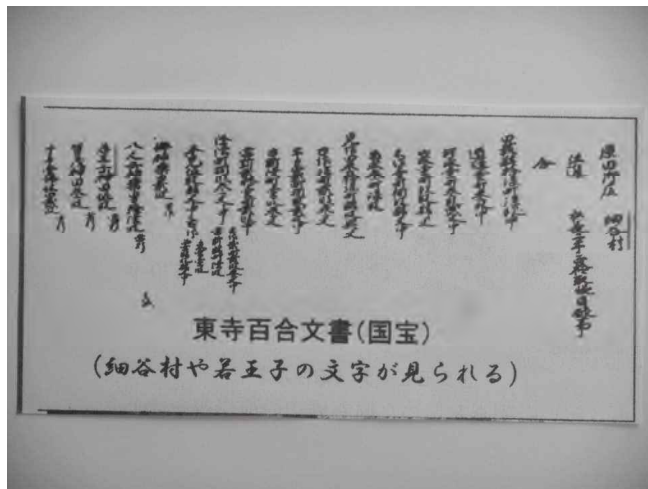
番号	古地名	読み方	説 明
1	殿ノ谷	とんのや	中世に原氏の戦時の殿ノ谷城がありました。
2	郷ヶ峰	ごうがみね	塩の道が宇洞方面からこの地を通っていました。
3	若宮	わかみや	若（一）王子神社や多宝庵がありました。
4	宮下	みやした	百合文書に記述がある若一王子神社が鎮座する場所。
5	高松	たかまつ	昔、目印になるような松があった場所でしょうか。
6	大谷	おおや	宇洞トンネルに向かう大きな谷になります。
7	谷口	やぐち	地名は地形が大谷の入り口付近からきています。
8	堂前	どうまえ	水穴地域で祀る阿弥陀堂が鎮座します。
9	打越	うちこし	はたして「賭博」と関係があるのでしょうか。
10	久保田	くぼた	「久保」は「窪」でしょうか。高村八六?供養碑あり。
11	勘左ヶ谷	かんざがや	いこいの広場がある場所。かつて水田でした。
12	狐ヶ谷	きつねがや	いこいの広場がある場所。狐は見たことがありません。
13	山崎	やまさき	山の一部が県道にかかる場所です。
14	土橋	つちはし	信州街道沿いにあり手掘りトンネルが残ります。
15	五反田	ごたんだ	田の広さを表す「五反田」が百合文書に残ります。
16	権田ヶ谷	ごんだがや	団地造成で全く様子が変わった地域です。
17	枕田	まくらだ	団地造成で全く変わった地域。大井川用水が通ります。
18	土狗在家	けらざいけ	修験宗(修験道)の影響が考えられます。
19	山伏塚	やんぶしつか	修験宗(修験道)の影響が考えられます。
20	池ノ島	いけのしま	氾濫が何度もあり水がなかなかひかなかった場所です。
21	細合	ほそあい	読み方、地名の由来が全く聞くことができない場所です。
22	橋向	はしむかい	西側にある原谷川に対向する地域。細谷駅があります。
23	中坪	なかつぼ	「坪」は「壺」と考えられ窪地でした。
24	梨ノ木	なしのき	「梨」は「無」でないか。昔は水田がありました。
25	上船原	かみふなばら	昔は水に浸かる場所でした。
26	正負田	しょうぶでん	試験田から。熱心な人々の生活が想像できます。
27	下船原	しもふなばら	昔は水に浸かる場所でした。
28	溝尻	みぞじり	水路が入り込んでその末端を表します。
29	下正負田	しもしょうぶでん	試験田から。熱心な人々の生活が想像できます。
30	塚越	つかこし	修験宗(修験道)の影響が考えられます。
31	東姥田	ひがしうばた	「姥」とは「老女」「充実した・やせた土地」のどれか。
32	西姥田	にしうばた	「姥」とは「老女」「充実した・やせた土地」のどれか。
33	子貝	こがい	※中世の荘園体制下の荘官名が地名の由来です。
34	松向	まつむかい	昔は松があったのか。いこいの広場駅があります。
35	東柳添	ひがしやなぎぞえ	畔や水路沿いに柳の木が植えてあり利用されました。
36	西柳添	にしやなぎぞえ	畔や水路沿いに柳の木が植えてあり利用されました。
37	上野原	かみのはら	「野原」より「原野」で、利用しにくい土地でした。
38	下野原	しものはら	「野原」より「原野」で、利用しにくい土地でした。
39	西野原	にしのはら	「野原」より「原野」で、利用しにくい土地でした。
40	高代	たかしろ	高代山古墳や高代山砦があった場所です。
41	西向	にしむかい	ここが西へ向う起点になっていたのでしょうか。
42	山合	やまあい	※中世の荘園体制下の荘官名が地名の由来です。
43	柚ノ木	ゆのき	大井川用水が通っています。富部(桜木)に隣接します。
44	下前	しもまえ	秋葉山常夜燈が残っています。現在は細谷地区の中心。

※中世の荘園体制下の荘官名が地名の由来です… 23 ページの※を参照してください。

3. 細谷区の古地名考

(1) 地形や人の生活の特徴

南北 1.6 km 東西 1.0 km、細谷は南北に細長い地域です。地域の真ん中を南北に県道 40 号線、天竜浜名湖鉄道が通り、その東側は小さな谷に沿って民家が並び、それぞれの地域により少しずつ習慣などに違いが見られます。細谷南部の地域に団地があり、自治会や小学校は隣の富部(桜木)との結びつきが強くなっています。そこには工場が数社あります。また、県道 40 号線の西側は、平らな地形で、整備された水田が広がっています。昭和 40 年頃の農地の整備前の水田に比べて現在は、機械化に適した大きな区画になっており、良質な米が生産されています。



東寺百合文書に「細谷村」「若王子」の記述

(2) 歴史

縄文時代後期や弥生時代の古墳が存在し、当時から人が住んでいたようです。「細谷」という地名が初めて歴史の記録に出てくるのは古く、平安・鎌倉時代の東寺百合文書(国宝)の中に記述が見られます。その「弘長目録」のなかに、原田荘(荘園)について記載があります。原田荘は原野谷川中流域の五か郷を荘域として、12 世紀後半に成立した荘園です。荘園領主は法金剛院から最勝光院へ交代し、13 世紀末にはさらに細谷郷が最勝光院領、本郷・幡鎌・寺田・吉岡の四か郷が金剛院領に分割・支配されました。年貢高 450 石と大きな荘園ですが、在地の武士＝原氏が荘園侵略を推し進め、荘園領主に納入される年貢等は減少してきました。最勝光院の権利をのちに東寺が継承したため、細谷郷に関する資料が「東寺百合文書」としてたくさん残ることになりました。この地域の荘園や武士による荘園侵略の実態を知ることのできる貴重な資料といえます。この百合文書の記述に年貢高全体の 35 %が細



大雀神を祀った若一王子神社

谷からの年貢であったという記述がみられます。当時の細谷は、遠い京と深いつながりをもった地であったと思われます。原谷地域の中には飛び地が何か所かみられますが、細谷地域には飛び地が存在しません。細谷地域には、宇洞方面(桜木)から若一王子神社前を通り北へ向かう塩の道や、富部方面(桜木)から手掘りのトンネルをぬけ北へ向かう信州街道が通っています。

(3) 古地名の特徴

自然地形の特徴を表している古地名として「大谷」、「谷口」、「山崎」、「野原」、「狐ヶ谷」などがあります。修験宗(修験道)に係すると思われる古地名として「土狗在家」、「山伏塚」などがあります。荘園の時代に関わる古地名として「子貝」、「山合」、「枕田」、「高松」、「土橋」、「塚越」などがあります。これらの古地名は当時の荘官名と一致します。その他、細谷の人々が大切に守ってきた神社、目印となるものを想像させる古地名として「宮下」「堂前」「松向」などがあります。「宮下」の「宮」は現在の若一王子神社のことです。「堂前」の「堂」は阿弥陀堂のことです。「松向」の「松」は昔、地域のシンボルになるような大きな松の木があったのだろうと思われます。



細谷から桜木にむかう昔の信州街道

(4) 地域の苗字の特徴

細谷には現在、軒数が約 180 軒(アパートを除く)あります。その中で多い名は「平尾」「伊藤」「松井」「山崎」です。細谷を除く原谷地域全体ではたくさん無い名字です。その他、「吉川」「小野田」「内藤」「山本」「鈴木」と続きます。「鈴木」以外の名字は細谷地域でそれぞれ集中している傾向があります。



阿弥陀堂 33年に1度のお開帳(平成28年度)

4. 細谷区の古地名

(1) 殿ノ谷(とんのや)

殿谷城（高藤城）から南に続く谷の地名です。中世、領主の原氏が戦のときに使った城で、曲輪が整備され井戸もありました。インフラテック（株）のある場所は昔、鹿島谷田と呼ばれ、そこからと、本郷東区の中殿ノ谷から城に登る道がありました。城から西を眺めると各和城や幡鎌館を眺めることができました。中世の原谷地域は原氏勢力の中心地でありました。現在は、ゴルフ場の一部となり3番ホール近くの池そばに遺跡板があります。



殿谷城跡のある北を見る

(2) 郷ケ峰(ごうがみね)

平地の周りに家が並んでいます。東側が高くなり、桜木の地に続いています。塩の道が宇洞方面から郷ケ峰に続いていましたが、現在はゴルフ場ができて切れています。その峰の一番低いところから東を望むと栗ヶ岳や富士山を望むことができます。地名の由来はそのあたりに関係しそうですが詳しくはわかりません。位置的には「郷ケ峰」の郷は本郷の端になる峰の部分という意味にも受け取れます。



東の方向を見る

(3) 若宮(わかみや)

「若宮」の地名から細谷の存在が特に重要な地域であったと思われます。それは国宝「東寺百合文書」の中に「若宮」という文字が記載されているからです。「若宮」は今の若一王子神社のことであり、平清盛も京都の地に若一王子神社を祀っているようです。細谷の地は平安の頃、皇室の荘園領（最勝光院）でありました。細谷は1,000年以上も昔の古文書にもでてくる土地です。現在の若一王子神社は宮下にあります。以前は若宮に祠がありましたが、神社が宮下に移った後は畑になっており現在は何も残っていません。北側に最福寺の末寺であった多宝庵跡があり今でも池のかたちが残っています。



南の方向を見る

(4) 宮下(みやした)

この地名は高台にある第 11 等級若一王子神社の手前下にある地域を表しています。細谷の守り神で地元の人々とのつながりは深く、熱心にお祀りされています。大雀神（おほさざきのかみ…仁徳天皇の和風諡号にあたる）を祀り、年 4 回の例祭（例大祭、新嘗祭、祈年祭、元旦祭）を行い、出産や入学などでお詣りする人がいます。古墳時代中期の若一王子神社古墳群(1~4)が発掘されています。



神社下より西を見る

(5) 高松(たかまつ)

郷ヶ峰から南に続くところが高松です。ここから大谷の方へ抜ける道がありましたが、現在はゴルフ場ができたため切れています。ゴルフ場内 3 番ホール近くにある水田用ため池の高松池は現在も使用されています。池の東にある山を、地元では「でんぼやま」と言っていました但现在はゴルフ場建設により削られてなくなっています。山の中段には大きな松があったと聞いていますが痕跡は残っていません。中世の荘園体制下の荘官名「高松」が地名の由来のようです。



林の向こうがゴルフ場

(6) 大谷(おおや)

県道から宇洞トンネルの方面を向くと大きな谷が、トンネルに続いています。地名はその地形からきています。昔はトンネルがなくて、桜木方面へ行くには山道を越えて行ったようですが、現在はトンネルができて便利になっています。細谷から桜木方面に向かう交通の要所になっていますが、今後は大きく風景を変えようとしています。トンネルの南側に切り割りの道路を通し、桜木と吉岡、袋井方面の東西交通がより便利になる予定があり、工事が続いています。



将来、工事で景観が変わる

(7) 谷口(やぐち)

大谷(おおや)に向かう谷の入り口で地名はその地形からきています。「細谷」という地名は数多く細長い谷があることを表しています。細谷には、他にも「谷」という字がつく地名が多くあります。



道路工事場所から南を見る

(8) 堂前(どうまえ)

阿弥陀堂の周辺の地のことを言います。現在、奥ノ谷組、新田東組、新田西組まで含む広い地域で多くの人家が集まっています。地元では浄土宗や浄土真宗の本尊である阿弥陀様を祀っています。安産や乳の出方にご利益があるとされ、毎月地区の担当組が 300 年前からお祀りしています。毎年 3 月には春林院住職が来て祭典を行っています。33 年ごとに行うお開帳は、とくに盛大にお祝いをしています。最近では平成 28 年にお開帳が行われました。地元では先の 3 組のことを水穴(みづな)組と言っています。



阿弥陀堂のある南を見る

(9) 打越(うちこし)

打越は江戸時代の「違法商行為」の意味があります。昔、「賭博」が街道筋で行われていたと言う古老もおります。桜木地域にも「打越」という場所があります。いこいの広場のグラウンドが整備される前は、南の富部方面へ通じる素掘りのトンネルへ道が続いていました。また、この場所から北に進むと堂前(どうまえ)を通して森街道に合流します。この道は森街道の裏街道であり地元の人々の生活道路でもあったと考えられます。古墳時代中期の打越古墳群(1~5)が発掘されています。



元ため池の場所から南を見る

(10)久保田(くぼた)

「久保」は「窪」のことであり窪地であったことを示しています。このあたりは地下水脈の通りがあり、水が自噴しているところがあります。そのためか昔、田植えのとき腰まで浸かりながら苦勞して作業を行ったと古老からよく話を聞きました。深田と同意味であると思われます。細谷には「深田」という名字の家がありますが由来はこのような場所から生じたと思われます。いこいの広場に通じる道路が整備される以前は、富部川が東の山側に当たりこのあたりで西に曲がって流れていました。高村八六翁の供養碑があります。



いこいの広場入り口から北を見る

(11)勘左ヶ谷(かんざがや)

環座の字をもじって「勘左」になったのではないかとされます。「勘左」とは円い形になった谷のことを表します。久保田の東にあたり、現在のいこいの広場の駐車場や事務所のある場所になります。いこいの広場が整備される以前は、打越にあったため池から南側に向かって田が続いていました。



いこいの広場事務所を見る

(12)狐ヶ谷(きつねがや)

いこいの広場から読売カントリークラブに行く道が分かれる付近です。グラウンド辺りになります。電子基準点もここに設置されています。古老に聞くと地名の由来は、昔、キツネがよく見られたからではなかろうかと言います。でも実際にキツネに出会ったという人はおりません。辺りはすっかり開けて球場に整備され地形が変わりました。



球場をみる

(13) 山崎(やまさき)

いこいの広場入り口信号の南側一帯になります。小高い山の西側は県道や天竜浜名鉄道で切られています。地名は「山」とその端部分を表す「崎」が一緒になった地名です。茶畑や田などに利用されていますが、最近では利用されなくて一部は放棄地になっています。吉田工業(株)辺りまでの地域になります。地元の人が清水ヶ谷という場所があります。



左の山の西側は切られている

(14) 土橋(つちはし)

南側の富部方面から手掘りのトンネルを抜けて北に向かう道が現在も通じています。地元の人が「くらぼね」とか「ほったがや」(トンネルを掘ったという意味か。)という場所があります。最近まで、農作業でしか利用されないような場所でありましたが、家代の里に住宅ができ、ナフコ(株)に買い物に行ったり散歩する人が利用するようになりました。東側は静岡県総合教育センターの一部になっており昭和パックス(株)の用地までの一帯になります。この地名は中世の荘園体制下の荘官名「土橋」からきています。



手前はトンネルに続く旧道

(15) 五反田(ごたんだ)

県道を挟んで東西の地域に広がります。東側は現在ナフコ(株)になっています。ナフコの用地になる前の地図を見ると田や畑になっていました。「五反」という具体的な面積を表していますが、この地名は国宝「東寺百合文書」に記述されています。まぎれもなく田の面積を表しており、それが地名になっていると思われます。



ナフコ駐車場と県道

(16) 権田ケ谷（ごんだがや）

現在、権田ケ谷から枕田までの地域に 80 軒ほど住宅とアパートが建ち、つくしの団地となっており、その東側の山は一部残っています。昔は畑や茶畑が広がっていましたが、昭和 40 年代に団地が開発され学区や自治会が桜木になっていることもあり、人々の記憶から細谷の地であることが忘れられてきています。古墳時代中期の権田ケ谷古墳群(1~5)が発掘されています。



団地北側の家並み

(17) 枕田（まくらだ）

現在は、つくしの団地になっていますが、この一帯は昔は畑や茶畑が広がっていました。権田ケ谷と同じく人々の記憶から細谷の地であることが忘れられてきています。古墳時代中期の枕田古墳群(1.2)が発掘されています。中世の荘園体制下の荘官名「枕田」が地名の由来です。



団地入り口から東を見る

(18) 土狗在家（けらざいけ）

当地の地名から修験宗（修験道）の影響が大きい場所であったことを表しています。曹洞宗の長福寺になる前から修験僧がこの地に来ていたことがわかっています。吉野に飛んでいった長福寺の鐘の話のなかにも修験僧との関わりが出てきます。長年、長福寺で修験僧による火渡りの行事を 8 月に行っていましたが、その後しばらくこの行事が途絶えました。現在の石田住職に代わってから「役行者尊(えんのぎょうじゃそん)」として行事が復活しています。



踏切から北西の方向を見る

(19) 山伏塚(やんぶしつか)

この地名からは修験宗との関わりを強く感じさせます。昔、多くの修験者(山伏)が長福寺のある当地にきていたようです。その中には不幸にも当地で亡くなった身寄りのない修験僧が埋葬される塚(墓)がつくられました。地名の由来はそこからきています。昭和 40 年頃に行われた農地改良整備以前の地形は、小さな土盛りがいくつかあったと聞いています。



東側を見る

(20) 池ノ島(いけのしま)

地域の西側を流れている昔の原野谷川堤防は現在より低く、増水のたびに決壊し氾濫することが多くありました。畑をトラクターで耕運すると大小の石がごろごろ出てきます。そのため、田の利用には向かなく畑として利用したようです。昔は洪水の水が引かないで池のようになって、一部の堆積物が小高く残り島のように見えたことから地名ができていると考えられます。



堤防から東側を見る

(21) 細合(ほそあい)

細谷の古老の皆さんから「細合」の読み方や地名の由来が全く聞き取りできなかったところです。細谷の小字名をみると「谷」を「や」と読むことが多いです。「田」は「た」や「でん」と読む例があります。「土橋」のように訓・訓で読む場合と「谷口」のように音・訓のように読む場合があり、規則性を見つけることはできませんでした。「山合」の「合」を「あい」と読むことや、「細谷」の「細」を「ほそ」と読むことから「細合」を「ほそあい」と読んでおきます。辺りは田が広がっている場所になります。



堤防から南東側を見る

(22) 橋向(はしむかい)

現在、細谷駅がありその一帯になります。ファミリーマートから道を西に進むと吉岡橋に向かうことになります。ここに立ち西を向いた様子から地名の由来はきています。細谷駅前には現在、住宅が立ち並んでいますが昔はすべて水田でした。二俣線(現在は天竜浜名湖鉄道)が開通する以前は西側の原野谷川まで遮るものではなく、ずっと田畑や雑草地などが続いていたはずでした。



天浜線側から東を見る

(23) 中坪(なかつぼ)

細谷駅のすぐ西側一帯になります。まわりに東坪、西坪などの地名がないので、この場合の「坪は条里制による面積をあらわす坪ではない」と思われます。自然に窪んで深くなったところを表す「壺(つぼ)」の意味ではないかと思われます。天竜浜名湖鉄道(株)から原野谷川まで見渡せて、水田が続いています。



天浜線側から西を見る

(24) 梨ノ木(なしのき)

昔、この地に梨の木があったとも考えられません。地名の由来は不明です。この「梨」は「無し」につながる意味を表し、木がなかったようなところという意味ではなかったかと思われます。細谷駅から中坪を経てその西側一帯になります。農地改良整備以前からよい田が多くありましたが、現在でも良質の米のとれる水田が続いています。



梨ノ木橋から西を見る

(25) 上船原(かみふなばら)

平尾ライスの建物がある一帯になります。池ノ島が堆積物で小高くなっていたのに対して、そこより低くなっており、水に浸っていることが多かったと考えられます。現在流れている原野谷川の水量からは想像できませんが、700年ほど前には水量があったようです。この水量の流れを利用して、この地から遠く京まで、荘園の年貢として米などが船で運ばれていました。原野谷川を使った水運の利用がさかんであったことを彷彿とさせる地名です。



左に見えるのは平尾ライス

(26) 正負田(しょうぶでん)

地名は試験田を示しています。いろいろな米やその他の穀物の多収穫をねらった試験を繰り返し行った一帯でしょうか。いずれにせよ細谷の農民の農耕意欲が旺盛であったことを示しています。現在でもこの地には良質の水田が広がっています。その他、賭博により取り合った田という意味にもとれます。また、軍事武事を重んじるという意から戦いに関わる「尚武(しょうぶ)」から地名の由来はきているとも考えられますが最初の由来を支持したいと思います。



正負田橋から西を見る

(27) 下船原(しもふなばら)

上船原の南側でファミリーマートから吉岡橋に向かう道までの一帯です。そのほかについては上船原に同じになります。



平尾ライスのある一帯

(28)溝尻(みぞじり)

ファミリーマートから南、県道から天竜浜名湖鉄道(株)の間一帯になります。農地の改良整備が行われる以前は原野谷川からファミリーマート近くまで水路(溝)が来ていました。尻とは終点という意味があり溝尻という地名になりました。吉岡の原野谷川沿いに「溝西」というところがあります。



天浜線から北東側を見る

(29)下正負田(しもしょうぶでん)

正負田のファミリーマートから吉岡に行く道路の南一帯です。地名の由来は正負田と同じです。辺りは良い水田が広がります。



右の道路は吉岡に通じる

(30)塚越(つかこし)

下正負田の西側一帯になります。地名は山伏塚の地を超えた辺りという意味ではないかと思われます。農地の改良整備以前には堤防が切れることがあり、一帯に小山のような土を盛り上げたところが2カ所ほどあったとも聞きます。中世の荘園体制下の荘官名「塚越」が地名の由来になっています。



正面に市の水道施設が見える

(31) 東姥田(ひがしうばた)

農地の改良整備以前は、平らすぎて排水が悪い場所でしたが、改良整備後は乾田になり良い水田になりました。「姥(うば)」という字には老女、老婆の意味があります。地名の由来は、老女の人々に与えられた土地(田)とからとも、老女もできる仕事のしやすい土地(田)というところからきているとも考えられます。いずれにしても、老人女性をいたわる地名として中世の人々の心優しさを感じさせる地ではなかったでしょうか。



松向橋から北西側を見る

(32) 西姥田(にしうばた)

東姥田の西側一帯になります。地名の由来は東姥田に同じと考えられます。



天浜線から西側を見る

(33) 子貝(こがい)

この場所を「こつぽ」という人もいます。昔はタニシなどの貝が用水の中にたくさん見られたようです。タニシのような貝を「つぽ」と言うので、「こつぽ」と読んだのでしょう。中世の荘園体制下の荘官名「子貝」が地名の由来になっています。



農道から西側を見る

(34) 松向(まつむかい)

富部川と天竜浜名湖鉄道に囲まれた一帯になります。昔、ここに大きな松があったようです。松堂高盛語録にもでてくる富部の大松の話がありますが、この松のことではなかったでしょうか。昔は、この地にとっても大きな松があったとも聞きます。または、この松は、高松の松を指しているのかもしれませんが。高松の松をめざすというところからきているとも考えられます。天竜浜名湖鉄道(株)の松向踏切のあたりを地元の人は掛下(かけした)とも言います。



いこいの広場駅辺り

(35) 東柳添(ひがしやなぎぞえ)

昔は、柳の木が6本ほど並んでおりその風景は昭和30年代頃まで見られたようです。その柳の木に竹や木のはずを架けて刈り取った稲を干していました。現在でも北陸などで、水田地帯の道沿いに見ることができます。地名の由来はその光景からきています。



線路から西側を見る

(36) 西柳添(にしやなぎぞえ)

東柳添の西一帯になります。東柳添と同じ光景が見られた場所でありました。地名の由来は東柳添と同じです。



富部川本川から東側を見る

(37) 上野原(かみのはら)

トダックス(株)に近く、天竜浜名湖鉄道(株)のいこいの広場駅西一帯にあたります。昔はこの辺りから南の下野原にかけて土地が低く田に水が溜まりやす場所で、「野原」より「原野」に近い場所でした。原野谷川の流域が変わるたびに土地が荒れ、長い間、作物栽培には適さない原野的な場所ではなかったかと思われます。畦を揺ると向うまで揺すれたとも、田もよくなって「びしゃ」という木がたくさん生えていて荒れていたとも聞きます。農地の改良整備によって改善はされましたが、いまでもトラクターが入って耕運できない田があります。



天浜線から北西側を見る

(38) 下野原(しものはら)

山崎の天竜浜名湖鉄道(株)をはさんで西側一帯になります。地名の由来は上野原と同じです。



野原橋から南東側を見る

(39) 西野原(にしのはら)

下野原の西側一帯になります。現在の農道のあたりに魚がたくさん集まった場所があり「三田堀」という場所がありました。土地の様子は上野原と同じです。



南正面に岡津山が見える

(40) 高代(たかしろ)

この場所には昭和 30 年代頃まで高代山という小山があり、古墳時代中期の高代山古墳や中近世時代の高代山砦の存在が認められています。「代」は田の意味があり高い場所にあった田ともとれますが昔の写真を見ると畑が多くありました。この場所は細谷地区の亡くなった人を火葬する場所があり、人が亡くなると葬列はそこまで続きました。夜、火葬の火加減を見に行ったという人がいるので、最近までその場所は火葬場として使れ、村が掛川市に合併するまで続きました。



アース製薬のある一帯

(41) 西向(にしむかい)

アース製薬(株)北側の小山辺りになります。この小山を地元の人にはドンドン山とも言います。傍を流れていた用水路の落差(約 80 cm)があって、水がドンドンと流れていたためかそう言ったそうです。地名の由来は、細谷の地から京の都や伊勢・熊野などへ向かう起点と考えるのは考えすぎでしょうか。



西向橋からアース製薬を見る

(42) 山合(やまあい)

中世の荘園体制下の荘官名「山合」が地名の由来です。現在、アース製薬(株)がある一帯で、高代山の土砂が工場用地の盛り土に使われ整地されました。



アース製薬工場正面を見る

(43) 柚ノ木(ゆのき)

県道をはさんで東側の枕田、西側の柚ノ木の一带はすぐ南は富部(桜木)に隣接しています。昔、富部川は現在より西寄りのアース製薬の用地内を流れていました。当時は水田や畑で、細谷の何軒かの人が耕作をしていましたが、現在は工場用地などに変わりました。細谷の中でも遠い場所で、関わりが少なくなったため人々の会話にこの地名が使われることはなくなりました。地名の由来は不明です。大井川用水が県道、線路の下を通ってここまで来ています。



富部川から西側を見る

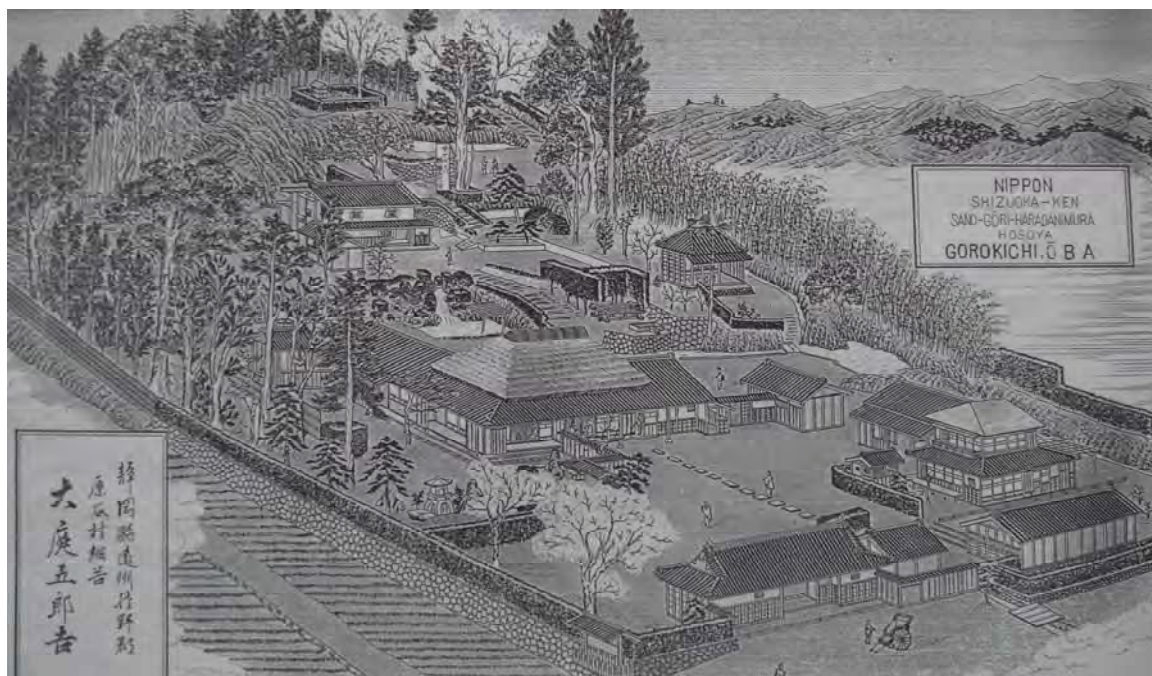
(44) 下前(しもまえ)

細谷公民館から県道をはさんで南を向いた一带になります。下前という地名の由来ははっきりしませんが、「堂前」の西側になることからついたと考えられます。昔も今も細谷の中心の場所になります。この場所には公民館や秋葉山常夜燈や1等水準点、道しるべ石があります。



左側に公民館がある

原谷村細谷 大庭五郎吉 屋敷



明治 25 年『日本博覧図静岡県初篇』より

大庭五郎吉略歴

- | | |
|---------|------------|
| 安政 6 年 | 細谷村に生まれる |
| 明治 10 年 | 冀北学舎に入学 |
| 明治 15 年 | 佐野城東郡役所書記 |
| 明治 18 年 | 細谷村外七ヶ村戸長 |
| 明治 22 年 | 原谷村村長（初代） |
| 明治 30 年 | 原谷村村長（3 代） |
| 大正 2 年 | 原谷村村長（7 代） |



第三章 その他

第一節 原谷地区の踏切道

はじめに

南北に長い原谷地区の中央を、さっそうと走る天竜浜名湖線（天浜線）は、地方色が豊かであります。以前に二俣線として活躍した時代から一般の乗客、学生たちの足として受け継ぎ、現在にいたっています。

この踏切道は、何箇所でどのような名前がつけられているかを調査しました。昭和 10 年（1935）4 月に国鉄二俣線が開通した当時は、「遠江桜木・原谷・森」の三箇所の駅が最初でした。いまでは、起点終点を含め、39 駅あります。

1. 原谷地区の踏切道の特徴

(1) 踏切道の名前

設置場所の古地名（小字）をつけて踏切名としていますが、一箇所だけが、道路名の「信州街道」を踏切名としています。

(2) 駅の木製改札口

現存する木製の改札口は少なく、「原谷・都田・気賀・西気賀・三ヶ日」の 5 駅であり、都田以外が文化財登録駅 4 駅で、貴重な文化財の一部となっています。残りの文化財登録駅 7 駅「桜木・遠州森・遠江一宮・天竜二俣・岩水寺・宮口・金指の 7 駅」は、旧木製の改札はありません。

(3) 踏切道数

使用中	13 箇所
廃止	8 箇所

(4) 踏切道の遮断機

現在使用中で、遮断機ありの踏切が、10 箇所（警報音が作動）で遮断機なしが 3 箇所です。

(5) 踏切道の道幅

県道より踏切を通じて農道につながり、踏切付近は道幅がせまいです。

(6) その他

幡鎌の公会堂（裏門）付近のカーブは、天浜線内では最大の急カーブ（R 200）です。

天竜浜名湖鉄道 原谷地域の踏切道一覧表

②～⑬：原谷地域の古地名（小字）と一致。
廃止踏切の名前・年度は、不明。

踏 切 道 名（*印：遮断機なし）			備 考
①	シンシュカイドウ 信州街道 踏切道（竿2本）		幡鎌区内
		1 廃止踏切	幡鎌区内
		2 廃止踏切	幡鎌区内
② *	テラヤ 寺の谷 踏切道（竿なし）		幡鎌区内
③	ウラモン 裏門 踏切道（竿4本）		幡鎌区内
④	シモガワラ 下河原 踏切道（竿2本）		幡鎌区内
⑤ *	マチヤガワラ 町屋河原 踏切道（機器なし）		本郷西区内
⑥	ニシツボ 西坪 踏切道（竿2本）		本郷西区内
⑦	ザイケダ 在家田 踏切道（竿4本）		本郷東区内
		3 廃止踏切	本郷東区内
		4 廃止踏切	本郷東区内
⑧	イモジ 鋳師 踏切道（竿2本）		本郷東区内
		5 廃止踏切	本郷東区内
⑨	フアミ 婦安美 踏切道（竿2本）		本郷東区内
		6 廃止踏切	本郷東区内
⑩	ナカツボ 中坪 踏切道（竿2本）		細谷区内
⑪	ショウゲン 正負田 踏切道（竿4本）		細谷区内
		7 廃止踏切	細谷区内
⑫	マツムカイ 第二松向 踏切道（竿2本）		細谷区内
⑬ *	マツムカイ 第一松向 踏切道（機器なし）		細谷区内
		8 廃止踏切	細谷区内
踏切道として使用中 13箇所		廃止踏切8箇所（痕跡による）	

2. 天浜線の歴史

原 谷 地 域 に 関 す る 事 項	
1935年（昭和10年4月17日）	国鉄二俣線、掛川～遠江森間（12.9km）開通。
	「遠江桜木駅」・「原谷駅」・「遠江森駅」営業開始。
1936年（昭和11年12月）	新所原・三ヶ日間12.1km開通。
1938年（昭和13年4月）	三ヶ日・金指間13.81km開通。
1940年（昭和15年6月 1日）	遠江森・金指間（29.1km）開通。
	これにより、掛川・新所原間（67.9km）全線開通。
1945年（昭和20年7月24日）	二俣線細谷でグラマン機銃掃射、死傷者18名。
1956年（昭和31年5月10日）	二俣線「細谷駅」開業開始。
1971年（昭和46年3月23日）	二俣線幡鎌地内に閃光式踏切警報機を設置。
1987年（昭和62年3月） （昭和62年）3月15日）	二俣線が廃止となり、国鉄から第3セクターとなり民営化。 天竜浜名湖鉄道開業。
1988年（昭和63年3月15日）	天竜浜名湖線に「いこいの広場」「原田」両駅開業開始。
2010年（平成22年）	ポッポ屋原谷会が発足。
2011年（平成23年1月26日）	天竜浜名湖鉄道全般にわたり、国の登録有形文化財に登録。

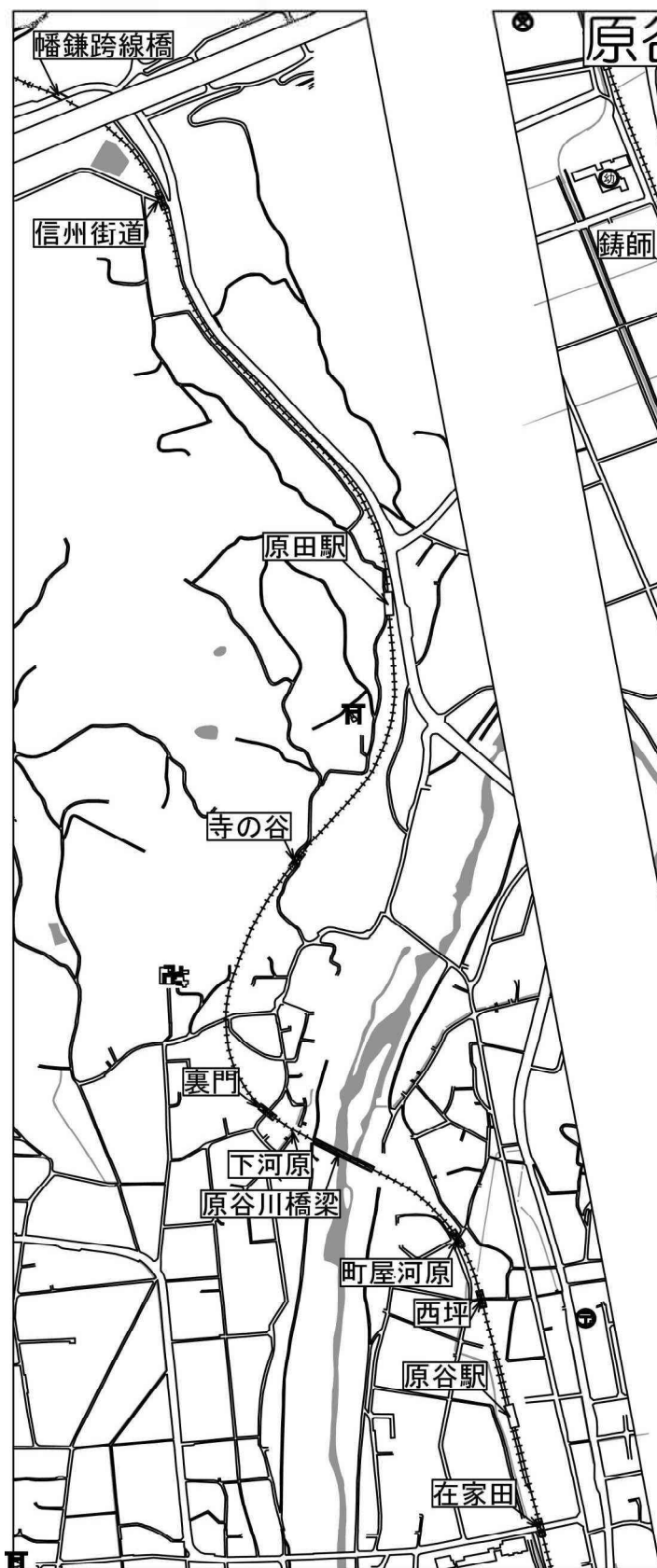
3. 踏切道の種類

踏切道の種類	自動踏切警報機	自動遮断機	原谷地域の踏切道名
	あり	あり	信州街道 裏門 下河原 西坪
第1種踏切道（10箇所）			在家田 鋳師 婦安美 中坪
			正負田 第二松向
第2種踏切道	現在は該当なし		
第3種踏切道（1箇所）	あり	なし	寺の谷
第4種踏切道（2箇所）	なし	なし	町屋河原 第一松向

4. 原谷地区の踏切道・駅 … ①北部の地図下の※ 1 が②南部の※ 2 に接続します。

①北部

②南部 ※ 2



※ 1

5. 原谷地区の踏切道

①信州街道（しんしゅうかいどう）踏切道

- ・踏切道幅 7m
- ・信州街道（県道40号線）を踏切名としています。
- ・竿2本
- ・写真後方は新東名で、左方面は森掛川インター



①幡鎌区内

②寺の谷（てらのや）踏切道

- ・踏切道幅 4m
- ・「寺の谷」の古地名を踏切名としています。
- ・竿なし
- ・遮断機なし
- ・写真後方は、峯山



②幡鎌区内

③裏門（うらもん）踏切道

- ・踏切道幅 6.4m
- ・「裏門」の古地名を踏切名としています。
- ・竿4本
- ・写真左後方は幡鎌公会堂



③幡鎌区内

④下河原（しもがわら）踏切道

- ・踏切道幅 3.9m
- ・「下河原」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本
- ・写真右方向は原野谷川橋梁



④幡鎌区内

⑤町屋河原（まちやがわら）踏切道

- ・踏切道幅 1.8m
- ・「町屋河原」の古地名を踏切名としています。
- ・遮断機なし
- ・写真左側は、原谷川橋梁（105m）で、左方向は幡鎌区、右側は本郷西区



⑤本郷西区内

⑥西坪（にしつぼ）踏切道

- ・踏切道幅 2m
- ・「西坪」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本



⑥本郷西区内

⑦在家田（ざいけだ）踏切道

- ・踏切道幅 6.4m
- ・「在家田」の古地名を踏切名としています。
- ・竿4本



⑦本郷東区内

⑧鋳師（いもじ）踏切道

- ・踏切道幅 5m
- ・「鋳師」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本



⑧本郷東区内

⑨婦安美（ふあみ）踏切道

- ・踏切道幅 4.9m
- ・「婦安美」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本



⑨本郷東区内

⑩中坪（なかつぼ）踏切道

- ・踏切道幅 4.9m
- ・「中坪」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本



⑩細谷区内

⑪正負田（しょうぶでん）踏切道

- ・踏切道幅 5.8m
- ・「正負田」の古地名を踏切名としています。
- ・竿4本



⑪細谷区内

⑫第二松向（だいにまつむかい）踏切道

- ・踏切道幅 5m
- ・「第二松向」の古地名を踏切名としています。
- ・竿2本



⑫細谷区内

⑬第一松向（だいいちまつむかい）踏切道

- ・踏切道幅 1.7m
- ・「第一松向」の古地名を踏切名としています。
- ・遮断機なし



⑬細谷区内

6. 原谷地区の駅

①原谷駅本屋（駅舎） はらのやえきほんや

二俣線としては、最も早い昭和10年(1935)4月17日に開通した3駅の一つで、原谷地区では最初の駅です。

無人化後、平成22年（2010）にポッポ屋原谷会が発足し、駅の清掃や草刈りなどを行っています。平成24年（2012）には、NHKの団塊スタイル「夢の駅舎づくり ポッポ屋の挑戦」でその活動が紹介されました。空を飛んだ釣鐘伝説で有名な「遠州役の行者尊祭典」時には、多くの見物客が原谷駅を利用しています。



①原谷駅



原谷駅の木製改札口 1935年（昭和10）



原谷駅本屋 国の登録有形文化財登録

②原田駅

昭和63年（1988）営業開始

森掛川インターの最寄り駅で、加茂荘花鳥園（旧加茂花菖蒲園）に近く、花菖蒲の開花時には、観光客でにぎわっています。



②原田駅

③細谷駅

昭和31年（1956）営業開始

原谷地域では、2番目に開業した駅で地域住民や学生の足となっています。



③細谷駅

④いこいの広場駅

昭和63年（1988）営業開始

近くに静岡県総合教育センター（あすなろ）や市の総合スポーツ施設（いこいの広場）があり、年間を通じて多くの乗客があります。



④いこいの広場駅

※西坪付近から原谷駅に向かう二俣線貨物列車（昭和 40 年頃）



第二節 「防^{ほう}の窪」にかかる橋について

1. 「防の窪」にかかる10本の橋

①一丁田橋	いっちょうだはし	竣工	昭和 51 年 3 月
②中道橋	なかみちはし	竣工	平成 19 年 3 月
③西中曽根橋	にしなかそねばし	竣工	昭和 51 年 3 月
④池鯉鮒橋	ちりふばし	竣工	昭和 50 年 7 月
⑤藪崎橋	やぶさきばし	竣工	昭和 50 年 7 月
⑥池之島橋	いけのしまはし	竣工	昭和 49 年 3 月
⑦梨之木橋	なしのきはし	竣工	昭和 49 年 3 月
⑧正負田橋	しょうぶでんはし	竣工	昭和 49 年 3 月
⑨柳添橋	やなぎぞいはし	竣工	昭和 48 年 3 月
⑩野原橋	のはらはし	竣工	昭和 48 年 3 月

2. 橋の名前の付け方

橋の名前については、特に決まったルールはないようです。

①橋を架ける場所の地名や近くの代表的な地名・シンボル

②橋の架かっている河川名

③橋を設計するときに決めた名前を使う

などで決められているようです。

本郷東から細谷にかけて流れている幹線排水路にかけられている 10 本の橋については、すべて古地名が用いられています。

古地名は歴史を解きほぐすのには、その存在価値は特に大きいものがあります。

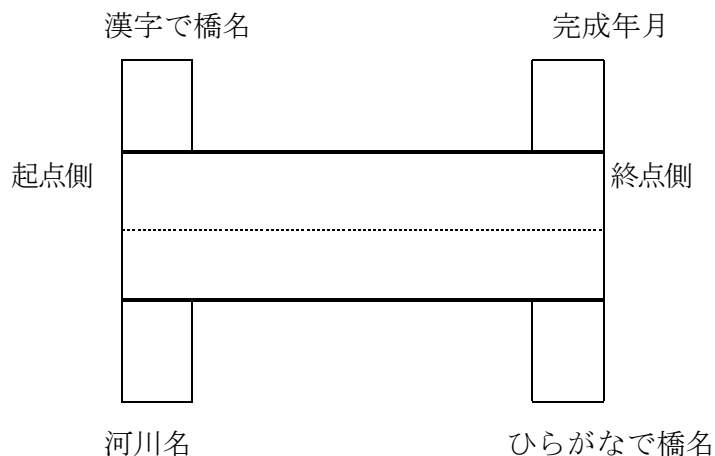
しかし、改名して古地名が消えていく現実があります。

①昭和 37 年に「住居表示の法律」ができたこと。

②戦後の高度成長期の社会の変化、急速な都市化現象や開発に伴う社会構造の多様化による急激な変容により古来の地名が急速に消えつつあります。橋の名として是非残しておきたいものです。

3. 橋の起点と終点

橋の入り口と出口は橋名板によって決まります。



・橋名板（きょうめいばん）について

「橋名板」とは「橋の名前」「川の名前」「橋が完成した年月」を記したものです。

起点側 橋に面して左側 漢字で橋名

橋に面して右側 河川名（又は鉄道路線名）

終点側 橋に面して右側 完成年月

橋に面して左側 ひらがなで橋名

「防の窪」にかかる 10 本の橋にも橋名板がついています。

①一丁田橋以外は東側が起点、西側が終点となっていますが、なぜか一丁田橋は西側が起点、東側が終点となっています。不思議な気がします。

・由来の地名

①一丁田 条里制の名残か。米作で生活していた進んだ文化の地と思われます。
「土地法典」では壱丁田と表記されています。

②中道 昔は地名どおりの道があったと思われます。

③西中曽根 原野谷川が氾濫したときに、自然に堤防などが形成される場所が
曽根と言われます。

④池鯉鮒 鯉や鮒が沢山いた池があったと思われます。またとうどの森の神事
や水田への水引も行っていたようです。愛知県知立市で見られます。

⑤藪崎 現在は水田になっていますが、昔は葦などが生え、藪のようになって
いたのではないかと思います。

⑥池之島 三日月池ができていたところか。その一部が島状の陸となっていた
のではないかと推定されます。

⑦梨之木 橋のある場所の古地名

⑧正負田 橋のある場所の古地名

⑨柳添 橋のある場所の古地名

⑩野原 橋のある場所の古地名

「本郷東区の古地名考より」

・補足

県営原野谷地区圃場整備事業

防の窪の一带は、昭和 44 年（1969）12 月から大規模な圃場整備が行われました。

総事業費 173, 400 万円

総面積 459 ヘクタール

工期 昭和 44 年 12 月から昭和 56 年 3 月

この整備事業より富部川も改修され、橋も整備されました。

中道橋については、こども広場あんりの建築に伴い道路の拡幅が行われ、架け替え

られたと思われます。

4. 防の窪橋梁名の地図と写真





① 一丁田橋



④ 池鯉鮒橋



② 中道橋



⑤ 藪崎橋



③ 西中曾根橋



⑥ 池之島橋



⑦ 梨之木橋



⑩ 野原橋



⑧ 正負田橋



⑨ 柳添橋

主な参考文献一覧

『静岡県掛川市原谷地区土地宝典』、帝国市町村地図刊行会、昭和 34 年 12 月 20 日
『掛川市（和田岡・原谷・原田）土地法典』、株式会社帝国地図、昭和 58 年 5 月 25 日
『ふるさと探訪 掛川の古城址』、林陸平、昭和 54 年 10 月 1 日
『静岡県史』通史編中世・近世・近現代、資料編中世・近世ほか
『掛川市史』通史編上中下、資料編ほか
『原谷郷土読本』、原谷尋常高等小学校、昭和 6 年 7 月
『はらや一原谷郷土誌一』、原谷地域生涯学習センター、平成 23 年 11 月
『学校創立百周年記念誌』、原谷小学校、昭和 63 年 9 月
『掛川市の古地名考』、掛川市教育委員会、昭和 55 年 3 月 26 日
『掛川誌稿』、中村育男・全翻刻版、静岡新聞社、平成 9 年 9 月
『遠淡海地志』、山中真喜夫復刻、平成 3 年
『遠江国風土記伝』、内山真竜、復刻版
『（原氏）家譜私考 全』、原義一、昭和 13 年
『円通松堂禅師語録』（訓註曹洞宗禅語録全書、中世篇第 12-13 卷）四季社、平成 19 年
『国登録有形文化財天竜浜名湖鉄道昭和の鉄道遺産を巡る旅』、天竜浜名湖線市町会議
『掛川市の神社・寺院めぐり』、かけがわ街づくり株式会社、平成 18 年 10 月 1 日
「袋井ほっと観光」、袋井市観光協会、袋井市産業政策課観光振興室
『日本歴史地名体系 22』、静岡県の地名など 平凡社
『静岡県の地名』一地名の中に息づく暮らしー、静岡県生活環境部県民生活課編、昭和 60 年 3 月
『遠江国殿谷城址調査報告書』、静岡県地方史研究会、昭和 52 年 7 月 5 日
旧原谷村役場文書
原谷地区内の方々から提供いただいた資料や写真多数
その他、掛川市、袋井市、国土地理院、大日本報徳社等から資料協力を得ました。

執筆分担等

青木 一	第二章第一節
山本忠夫	第二章第二節、第三章第一節
高木敬雄	第二章第三節、第一章第三節
佐藤收一	第二章第四節
山崎 潔	第二章第五節
松浦正明	第三章第二節
豊田金男	第一章第二節ほかの地図作成

平成 30 年度「原谷の大地（原谷古地名考 150）」編集委員会組織

編集委員長	佐藤 收一（本郷東区＜南区・サングリーン区含む＞担当）
編集委員兼監修	高木 敬雄（本郷西区担当）
編集委員	山崎 潔（細谷区担当）
同上	青木 一（西山区担当）
同上	山本 忠夫（幡鎌地区、原谷地区の踏切道担当）
協力委員	豊田 金男（各地区マップ図作成等・写真資料等）
同上	松浦 正明（防の窪にかか ^{ほう} る橋について担当）、本郷南区区長
同上	平賀 興紀（IT 情報発信）
同上・相談役	小澤 利行（平成 23 年度「郷土誌はらや」刊行）
同上	森下 俊次（写真撮影等）
事務局	竹下文博（原谷地区まちづくり協議会長） 山崎 潔（原谷地区区長会長） 名倉 功（原谷地区まちづくり協議会事務長） 山下 真弓（原谷学習センター事務長）
協 賛	掛川市教育委員会社会教育課

「原谷の大地」編集関係者



おわりに

「原谷の大地」 監修 高木敬雄

何とか期日に間に合ったという感じが強いです。これも編集委員長佐藤收一氏の熱い思い、そして編集委員や協力委員、さらには事務局の皆さんのご理解とご尽力の賜と感謝申し上げます。

振り返れば、皆さんが述べているように今から 10 年ほど前にさかのぼりますが、地域に残る古地名を最初に編集委員長の佐藤收一氏が取り上げたことが端緒となっています。それから各地区で調査、研究、そして発表が行われ、それらを集大成しようという計画が持ち上がり、足かけ 2 年、ここによりやく『原谷の大地』を完成させることができました。

それぞれ研究スタイルや文章表現、そして意見を異にする人々の成果を一つにまとめることは、ある面では無謀であり、困難を伴います。従って全面的な意見の統一を図ることは無理であることを前提として、ここに示された考えや意見はそれぞれの執筆者の見解が主となっており、敢えて統一を図ることはしなかったことをご理解いただきたいと思います。

それでも原谷地区に 150 もの古地名があること、それぞれの意味や由来について総括的に調べ上げ、一冊の本に仕上げた意味は大きいものと思います。まだ不十分なところ、間違い、意見の相違など目につくかも知れませんが、これがスタートです。この冊子を手にとられる皆さん自身が、是非とも興味関心をもって自分の地域の歴史や地理について調べられることを願ってやみません。

もう一つ、忘れてならないこととして原谷史学習会の存在があります。約 10 年前、佐藤收一氏、澤村久雄氏を中心に設立された学習会は毎月一回の例会を開いてきました。この 8 月で延べ 123 回を数えます。こうした地道な学習会の活動があったればこそ、同じテーマにもとづいて複数の人たちが共同で取り組むことが可能になったと思います。この『原谷の大地』はそうした共同研究の成果であるといえましょう。

最後に古地名を考える上で大切なことは、それぞれについての歴史性を考察することだと思います。地名は平面的なものではなく歴史的背景を考えて行くことにより、意味合いも深まるものと思います。歴史的根拠をどこかに見つけ出せば素晴らしいと思います。原氏や原田荘といった大きなテーマがこの郷土の歴史に埋もれています。そして江戸時代のことも資料不足であまり明らかにはなっていません。そうした意味で地域の歴史を一つ一つ明らかにすることは、とりもなおさず古地名を考察するヒントを得ることにもなると思います。この冊子をもとにさらに多く調査や考察が行われますことを願っております。

「原谷史学習会」について

- ・ 毎月第3土曜日（原則）の午前中に原谷地域生涯学習センターで例会を開催しています。
- ・ これまでに計 123 回の学習会を開いてきました（令和元年 8 月まで）。
- ・ 下の写真は最近の学習会の一コマです。



原谷の大地

－原谷古地名考 150－

令和元年（2019）12 月 発行

編 集 「原谷の大地（原谷古地名考 150）」編集委員会

印刷発行 原谷地区まちづくり協議会

静岡県掛川市本郷 806-1 TEL 0537-26-0064

製 本 石田製本所

静岡県掛川市初馬 289-10 TEL 0537-24-1864